

Fate/Grand Zero

てんぞー

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

魔神に抗い、焼却されなかった物語。影の国の女王と共に戦場を駆ける。

目次

序章	1
序章	2
序章	3
序章	4
序章	5
初日	1
初日	2
初日	3
二日目	1
二日目	2
二日目	3
二日目	4
二日目	5
三日目	1
三日目	2
三日目	3
三日目	4
特異点X日目	1
特異点X日目	2
特異点X日目	3
特異点X日目	4
特異点X日目	5
特異点X日目	6
特異点X日目	7
	163
	157
	149
	142
	135
	128
	121
	114
	107
	100
	93
	86
	79
	72
	65
	58
	51
	44
	37
	29
	22
	15
	8
	1

あとがき	—				195
Epilogue	—	Year	2015		190
特異点X日目	—	10			184
特異点X日目	—	9			177
特異点X日目	—	8			170

序章——1

「冷静に考えれば研究者——求道家の領分ではない。そう思ったのだよ」

ケイネス・エルメロイ・アーチボルトという金髪の男がソファで足を組みながらそう言った。テーブルの上には紅茶が並べられており、その品質が良質であるのは己でさえ解る。楽しみ方は解らないが、それでも礼儀は弁えている。ケイネスの前で淹れられた茶をちやんと飲み、そしてそれを味わっている様に見せる。細かい作法を理解している訳ではないが、持て成された側として、出されたものは適度に“楽しんでいきます”とアピールするのは重要だと思う。

「令呪が私の手に出現した時、私はこれを己の箔付けする為には最適の機会だと思った。故に私は探せる聖遺物の中でも古いものを、そして強力な英霊のものを探し、そして見つける事に成功した。あとはこれをここへ送ってもらっただけだったのだがね——何ともまあ、嘆くべきか笑うべきか。どうやら聖遺物を盗まれてしまったな」

「不幸な出来事ですな」
「ああ、実にね」

ケイネスはその言葉で苦笑した。だが、しかし、と言葉を付け加える。

「私は令呪がこの手に出現した時、高揚していたと言っても良い。話にのみ聞いたあの聖杯戦争へと参戦する事が出来る。これは私の名に、家名に箔をつけるだろう、と。何せ仕切っているのがあのアインツベルンなのだから。期待を抱かないという方がおかしいだろう？　しかしな、触媒を盗まれた時、私はふと、怒りに包まれつつも冷静になったのだよ」

ケイネスは言う。

「ああ、次の触媒を用意しないと、と。英霊はどんなのが召喚される？　どういう触媒を用意すればいい。あらかじめ組んでいた戦術はどうなるのだ？　私の礼装との相性は？　根本的な部分が揺るぎかけた状況ではあるが、考えさせられる状況でもあった——果たして、

これは労力に見合うのだろうか、とも」

そこで、紅茶のカップをソーサーの上に下ろしながら言葉を加える。

「それでエルメロイ教授は労力に合わぬ、と判断したわけですね」

「然り、だ。箔付けの為に参戦するのは悪くはない。だが聖杯戦争は本当に私が参戦するだけの価値があるかどうか、それをもう一度考えさせてくれる余裕をくれた。その結果、過去の記録を確認し、品も誇りも感じないような野蛮な殺戮が行われているのを知り、過去三度の聖杯戦争でもとてもだが完成からは程遠い結果だったのを理解した」

「失望なさいったのですね」

「端的に言えばそうなるだろう。まあ、私はこれに自分が参戦する事には不満を覚えてしまった。故に参加を拒否したかった所なのだが——そこに君が来た。まさかこの話を嗅ぎ付けてくるものがあるとはね」

「偶然ですよエルメロイ教授。俺は偶々、幸運にもそれを耳にしただけです。それに教授もここ最近では生徒達の方からやる気がない様に見える、と言われていたらしいですよ？」

その言葉にやれやれ、といった風にケイネスが息を吐いた。

「なんと、そうか、私とした事が見える程に落胆していたか。うむ、やはりアインツベルンが主催する聖杯戦争という言葉に少々浮かれすぎていたのだろう。——私は天才で、我が家はこのまま研鑽を積みば順当に根源へと到達する。そこに急ぐ理由は一切存在しないのだ。今回の件は憶えて自分を戒めるとしよう」

「失敗を次へと繋がりますか」

「失敗から学ぶ者こそが魔術師だ。我々は失敗しながらも前進を続けているのだ」

「流石です、エルメロイ教授」

軽く相手の気分をよくするためにヨイショするのを忘れない。ケイネス・エルメロイ・アーチボルトは魔術的に考えれば間違いなく天才の部類に入る。自分の様な秀才とは格が違う。だけど、同時にこの男は“俗物”だと自分は思っている。少なくとも家柄を、家名を、そ

して誇りなんてものを持ち出す人間の大半は俗物だ。その中でもケイネスは非常に解りやすい男だ。何せ、自分の家と魔術、それに婚約者に対して強い執着を見せているのだ。割と話しやすい相手だと思う。若干見下されることさえ無視すれば。

「それではケイネス教授——」

「——ああ、約束通りこの令呪を君へと譲ろうではないか。何よりもアニムスフィア家のご令嬢の紹介であるならば私も無碍にはできない」

ケイネスの笑みに対してこちらも柔らかな笑みを返しつつ、思う——
——結局は家柄か。



ケイネスとの面談、或いは交渉が終わると右手にはケイネスの手にあつたはずの令呪が移植されていた。ただケイネスの手にあつた頃とは微妙に異なり、デザインは大きいUの字を描くような鞘に十字架に近い形をした剣が収まっている様な、そんなデザインだった。令呪、それは聖杯戦争に参加する資格であり、聖杯戦争で戦うために必要な英霊を呼び出す為の鍵で、チケットでもある。これがない事には聖杯戦争には参加すらできない。だからこれで漸くスタートライン、という所まで来れた。

ケイネスと話し合うのに使っていたケイネスの執務室から出て時計塔の廊下に出ると、そこには数少ない時計塔の知人の姿があつた。白髪にオレンジと黒のジャケットに腕を通す女性の姿、彼女こそがケイネスの言つた“名門”アニムスフィア家の令嬢、オルガマリー・アニムスフィアになる。手を上げて彼女へと挨拶しつつ、

「お前って相変わらず信じていた相手に裏切られて捨てられそうな顔をしてるよな！」

「ぶち殺すわよー！」

どうやらこちらの交渉、というか面談が終わるまで律儀にも待っていてくれたらしいオルガマリーに手を振りながら近づきつつ、右手の

甲にケイネスから譲られた令呪を見せる。それをオルガマリーは確認し、そしてふんつ、と声を漏らす。

「ちゃんと手に入れた様ね。ま、私がバツクについているんだからこれぐらいできて当然なんだけどね。それにしてもロード・エルメロイの相手はどうだったかしら」

「めんどくさいアレ」

「そう、良い気味ね」

あつかんべー、という風に舌を突き出しながら此方をののしるオルガマリーの姿を見て、軽く息を吐く。なんとなくだが馬鹿な姿を見たら安心したというべきか、アニメスフィア家の次代当主がこれでもいいのか、とか思ったりもするが、なんだかんだで自分の立場は“外様”だ。そこまで言うもんじゃないし、何より友人に近い感情を抱いているのだ、こういう軽い付き合いの方が比較的に楽しい関係というものだ。

「とりあえずこれで聖杯戦争に参戦する資格はゲットした——これでいいんだよな、マリー」

「ええ、そうよ。アニメスフィア家は聖杯を必要としているわ。けどウチにはマスター適正の高い人間はいないわ。聖杯戦争に必要なのは魔術師として優秀な人間ではなく、マスターとしての適性が高い人間。それを調べた結果——」

「引っかかったのがお前の知り合いだった俺で、俺も俺で聖杯戦争には個人的な興味はあったから——」

「——win—winな関係ね。契約やら搜索やらで色々と時間がかかるから身近な人物でヒットして本当にここは助かったわ。魔術師として有能な人材イコールマスターとして優秀な人間とは限らないもの」

「マスターにはマスターとしての適性が存在し、魔術回路の有無とは別にサーヴァントを上手く扱えるかどうか、って話だっけ」

「大体そんなものね」

魔術回路を保有し、サーヴァントに対して十分な魔力補給を行えることはマスターとして最低限必要な条件だ。だがそれとは別に、オル

ガマリーが言うには“マスター適正”というものが存在し、マスターとしてサーヴァントの力をどれだけ引き出せるか、サーヴァントを上手く運用できるか等、そういう能力適性が存在するらしい。そしてオルガマリーとその家が調べた所、十全に魔力供給を行えつつ戦闘をこなせ、それでいてマスターとして優秀なのは俺だったらしい。

オルガマリーの数少ない知人が、だ。

そこに運命を感じる。まるで何かが聖杯戦争へと向かえ、と言っているかのような。まあ、それはそれとして、聖杯戦争に参戦する資格をこうやって得る事が出来たのだ、こうなってくると色々準備を進める必要がある。礼装、人知、拠点、サーヴァント、と、やる事はたくさんある。遊んでいる暇はなくなってくる。

「んじゃ、まずはサーヴァントの召喚か」

「そうね。貴方の魔力量を考えたらセイバーやライダー、バーサーカーはなしね。アレらは魔力の消耗が激しいクラスだし。かといって地の利がこちらにある訳じゃないからキャスターもなしね。既にアサシンは別の参加者に召喚されているらしいし——」

「——となってくるとコストパフォーマンスで優秀なランサー、或いはアーチャーが最適か」

「魔術師としての能力のなさを考えると魔術系統のスキルを使用できるサーヴァントが理想的ね。そうすれば魔術による攻撃から身を守れるし、ね。対魔力を保有しているのはランサーのクラスだったかしら」

「となるとランサーで大英雄クラス、魔術の知識がある者か。ここまて来ると大分絞り込む事が出来るな」

「そうね」

予め聖杯戦争で使えそうな英霊はリストアップしている。と言うのも、アニメスフィア家から聖杯戦争にマスターとして参戦してみないかと声をかけられたとき、そこから既に聖杯戦争に参加し、戦う為の準備は進められてきたのだ。アニメスフィア家はこの聖杯戦争に關しては本気だ。何よりも、“英霊召喚術式”というものを欲しがっており、聖杯を手にすることで術式を手に入れようと計画している。

ケイネスの令呪の放棄も、実はケイネスの気まぐれではないのだ。生徒に、或いは友人に金をつかまさせ、少しづつケイネスの頭の中に言葉を溜めこんで行くのだ。周りの人間が“聖杯戦争なんてくだらない”、“リスクに成果が合わない”。そんな風に言っているのを聞けば成程、と思うのが人間の集団心理だ。ケイネスの一件はそれに引っかけただけだ。まあ、間抜けと言ってしまうえば間抜けなのは魔術的要素が一切ないからだろう。

基本的に魔術師という生き物は魔術ばかりを見ているせいで現代を見ていない連中が多い。アニメスフィア家の連中はそこらへん、実に賢いと思う。

「ほかの参加者たちは現在、どんな感じだ？」

「遠坂家、間桐家、アインツベルンは既に召喚済みね。あとは聖堂教会の神父もどうやらマスターとして参戦するらしいわね——さつき言ったアサシンはここよ。ちなみに遠坂家の当主、遠坂時臣とこの神父は師弟関係にあつたらしいから同盟を真つ先に疑うべきね」

「同盟ねえ……面倒くせえ。こつちから同盟を組めるような相手、いるのか？」

その言葉にオルガマリーは足を止め、そしてこちらへと振り返る様にいるわ、と答える。

「——レフ・ライノール・フラウロス。時計塔十一科ロクスロット研究棟の館長でありサーヴァント・キャスターのマスターよ。事前にこちらから話を通して、支援体制と同盟の体制を整えてあるわ。だからあとは貴方が英霊を召喚すればそれで一先ずの準備は完了——聖杯戦争へと状況を移行する事が出来るわ」

「そっか」

オルガマリーの様に足を止め、そして自分の右手の甲を見る。自分の様な非才の者が——才能がないから、と家から放逐されたような存在が聖杯戦争へと参戦する。半ば捨てられるように放逐され、旅に出て、修行して、そしてオルガマリーにスカウトされる様な形でこの時計塔へとやってきた。それで今、自分は想像もなかった舞台にいる。聖杯戦争。興味はあつた、だが実際にこうなるとは欠片も思いは

しなかった。

「が、それはそれ、これはこれ、だ。」

やるとなったら緊張や使命感は投げ捨てる。覚悟なんてものは判断を鈍らせる道具でしかない。生きるのであれば流されつつも舵を取るのが大事なのだ。フレキシブルに、柔軟に、しかししっかりと芯と“真”を持って生きれば、世の中は何とかなるものなのだ。

「うっし、さっそく今夜から召喚をしよう」

「触媒は色々と用意してあるけど、召喚したい英霊は決まっているの？ まさか縁召喚でガチャるとか言わないわよね」

「流石に俺もそこまでダイナミックな自殺志願者にはなれねーわ」

笑いながら煙草を取り出し、啜えたそれに火をつけつつ、あのウルトラ求道僧と名乗った馬鹿が今、世界のどこらへんで旅をしているのだろうか、そんな事を思いつつ答える。

「――影の国の女王を召喚する」

魔術に対する知識、数多くの英雄を育て上げた実績、統治者としての人格、そして予想出来る“願い”を考慮する。総合的に見ると非常に強力で、扱いやすい英霊になると思う。多少聖杯のピックアップ範囲から外れる可能性がスカサハの存在を考えれば有り得るが、アニメスフィア家の誇る技術力を合わせればそこら辺は多少、どうにかなると思う。少なくとも、

「そうね、ならばさっそく召喚の為に最高の環境を用意しましょうか」
迷う事無く、そして自信を持って連絡をサポートスタッフに入れようとするオルガマリーの姿は信頼できた。

序章―2

「――俺は元々日本の魔術師の家系出身でな。分家とはいえちつたあ有名な所だったんだわ。まあ、それでも才能がなかったのは確かだ。小さい頃から色々魔術に関してアレコレ叩き込まれたもんだけど……結局は才能のなさが露呈してなあ、放逐されちゃったんだ。出来が悪くて次代を作るために利用しようにもいい種にやあなりはしねえって理由だな。んなわけ若い十代をホームレスという新たな職業にジョブチェンジすることになったんだわ」

街路を歩いているとホットドッグの屋台を見つける。イギリスにしては少々珍しいものを見つけたな、とちよつとだけ幸運に思いながらホットドッグを二つ購入し、片方を自分用に、もう片方を隣に歩く女の姿へと手渡す。長い黒のスカートに上半身はポンチヨの様な布ですっぽりと覆い隠し、首には黒いマフラーを口元を隠すように巻く、赤目の女だ。彼女はホットドッグを受け入れると話の先を催促する様に視線を向けてくる。

「まあ、それで色々やべえ状況になるんじゃないかコレ？　と思っっていたりもしたんだけどやっぱり世間の常識と魔術世界の常識は違つてなあ……家出したって当時のクラスメイトに言つて、しばらく泊めて貰つたりして食いつないだわ。その間に一人で生活する為のアレコレを覚えたりしてな――んで日本を歩き始めたんだわ。なるべく乗り物に乗らない様に自分の足で歩き回りながら日本を回つて、魔術の世界に引きこもつてる奴は旅行さえもしたことねえのかよばあーか！　って気分だな。クソヒツキー連中じゃ味わえない経験を徹底的に味わつてやるぜ！　って、まあ、不良少年な時代だった訳よ、これが」

ホットドッグに齧りつく。冬の寒さは嫌いじゃない。こうやって野外で食す暖かなものが体に染み渡る感覚を楽しめるからだ。旅をしたおかげで色々と感じられるものがあつた。これもその一つだと思つている。そう、世界は美しいのだ。

「まあ、それで割と早い段階で日本を歩き終わっちゃまつてな。その間

に喧嘩のしかただとか、金の稼ぎ方とか、魔術の実戦利用とか嫌な事ばかり覚えちまってるな。でもどーしても実家の影が頭の裏にチラチラとチラつくんだわ。お金が欲しければ死徒でもぶっ殺して報告すれば多少の謝礼金はでるし、後はどっかで依頼でも引っ掛けりゃいい。魔術つてもんは金になるからな、お金に余裕が出来たわけだから、こりゃあ日本じゃなくても外国も歩かなきゃ損だな、って思ったわけよ」

酷い時代だったと思う。世間的な常識が欠落していた頃でもあった。まだ若いし、そこらへんしようがないかもしれないけど。それでも、楽しかった時でもあった。いや、実家を出てからはずっと楽しい人生の様な気もするが。

ホットドッグを食べ進め、人波を縫う様に、隣の女と一緒に進む。「まあ、それでただで国を出るのもつまらないしそもそも俺、ビザ発行できねえだろ！　って事実には気付いて、密入国を決心したんだよ。まあ、それで北海道からロシアへ入ってそこでやってきたぞ北の大地、ってガッツポーズしたのは良かったんだけどここで問題に直面してな——ロシア語も英語も俺、喋れねえわって気づいちやったんだ」

「理解していたが、やはり貴様はどちらかという馬鹿な方だな」
仕方がない、中学校を卒業してないのだから。それに多少抜けている方が楽しいって理解したのだ。

「まあ、これが寒くて寒くて辛くてなあ。野宿したくて廃墟を借りようとしたらヤク打ってラリってる俺よりも若いガキが十何人ついたりしてな、マジかよって気分だったわ。日本を歩き回った時とは全く違う光景にカルチャーショック？　的なのを感じたね。まあ、ここらでウルトラ求道僧と出会ってな、夕日をバックに凍った湖の上で殴り合った結果氷が割れて俺達そろって沈んじまって、そして結果として意気投合したんだ」

「戦士たる者、武を通しお互いを理解する事は良くある事だな」

まあ、あの馬鹿は戦士というよりは宗教家だったのだが。

「まあ、そこで意気投合した俺達は特に外国語を流暢にしゃべられる

訳でもないけど、夢と希望と馬鹿だけは大変良く出来ましたって先生に評価されそうなレベルで溢れてたからな、そのまま二人で旅を続行したんだ。俺はだんだんと武者修行がメインになってきた。体を動かしたりするのが楽しくなってきたし、自分がどこまで行けるかっつのを試すのも楽しかった。アイツもそういう修行とかは好きだったけど、それよりもアイツは神話とか宗教とかそういうのを調べたり集めたりするのが好きな奴だったわ」

まあ、何というべきか。最終的には絶望してしまったのだが。

「ロシアからモンゴル、中国、そしてインドへと俺達は旅を続けた。あの馬鹿の方は俺よりも長く、そして逆方向に旅を続けていたらしくヨーロッパの方は腐るほど見てきたらしくてなあ……んでインドでヒンドゥー教の調査とかで辺境の寺院に向かったんだけど……まあ、結果だけの話をするとな俺達、ここで別れる事にしたんだわ」

ほう、と声を漏らしながら彼女がこちらへと視線を向けてくる。それはなぜか、と問う様に。

「二つ目はここで教えていたマントラとかが比較的俺と相性が良かったから俺はここで修行してくかあ、って残る事にしたわけだわ。んで馬鹿の方だけど——アイツ、なんか納得のできる答えにたどり着いちまったようだな。結局宗教つてもんじや本当に馬鹿の叶えたかった事が出来ないってたどり着いちまったらしいんだわ。そこからへん、俺には良く分かんねーけど。まあ、ただ、その直後絶望したテンションのままヒマラヤを訓練もしてないのにチャレンジしてっつた」

「自殺志願者か」

「後日メールで登頂記念の写真が来たわ」

「現代では中々見る事の出来ないタイプの男のようだな」

それは良く思う。しかし馬鹿は——門司はあの時、本当に絶望したような表情を浮かべていた。すべての宗教、そして神々は身勝手にあり食い違っている。人間の理想が神に反映されているのだから人間が救われるわけがない、と。そしてそのテンションのままヒマラヤへと走って行くのだからアイツ凄い。しかしどうなのだろう、“彼女”時代にはこういうタイプの人間、いたのだろうか。

「まあ、そこで結構長居してたらフランス料理食った事ねえなあ……って唐突に思つて、ニューデリーを通る時に会ったんだよ——
マリーと」

運命的な出会いだつたと思う。何せ、

「出会い頭に見下しながら」おい、案内しろ”とか言ってくるから無言で腹パンを叩き込んでから街灯に吊るしてやったわ」

「中々愉快的な出会いをした様だな」

「無論、そこは俺だ。吊るした下で儀式の様に意味のない踊りを入れるのを忘れなかった」

「まさにキチガイの所業だな」

「気が付いたらアニムスファイア家の私兵に襲われてたわ」

「残念ながら当然の結果だな」

完全に同意する。まあ、盛大に馬鹿をやってはしゃいでたのは確かなのだが、ある意味これは解れてしまった門司と合えなくて、しばらく寺院の方で精神修行とかずつとやってた影響でハジケてしまったのではないかと思つている。まあ、真偽はどうあれ、

「これが俺とマリー……つまりはアニムスファイア家との出会いだつた訳だ。出会いは最悪だったわけだけど……まあ、色々あつて気に入られた？ のか？ まあ、そんな感じで時計塔へと連れて来られた訳だ。魔術の勉強とかは時計塔へと連れて来られるまで一切しなかったから、実家での勉強もクソの様なものだったし。学生に戻った様な気分で色々新鮮な気持ちだったわ。もう二十も半ばなのになあ」

三十路が少しずつ見えてきたぜ、とサムズアップを彼女へと向ければ、苦笑を返された。流石というべきかなんというべきか、やつぱり“まだ生きている”せいかな、彼女は現代に詳しいし、現代を理解している。だからこちらの言葉は通じるし、意味も分かる。喋つていて楽しいと思える。

「ま、そつから数年だ、数年。そんなんで今、こうやつて一緒に歩いている訳だ——ランサー」

「奇妙な奴だよ、お前は」

苦笑しながらも返答をしてくれる彼女は人間ではない——英霊

だ。聖杯戦争という戦いは座より召喚させた英霊を七騎戦わせ、潰し合わせ、聖杯にくべる事によって完了させる儀式だ。彼女、ランサー・スカサハはそういう事を考えると一種のイレギュラーサーヴァントであると評価しても良い。なぜならスカサハ本人はまだ、死んでいない。故に聖杯戦争に召喚されることはない。それが本来のルールだが——オルガマリーのいるアニメスフィア家はそこらへん、普通ではない。

聖杯ではなく英霊召喚術式、そのものに非常に興味を持っている。故に、それに独自の干渉や解析を行っている。

スカサハの召喚もその一環だ。無論これはスカサハの本体ではなく、他の英霊と同じようにスペックを落とされた分身の様な存在になっている。難しい話は分からない。ただ魔術や科学の知識に乏しい自分に理解できるのは“アニメスフィア家には出来る事だった”という事実だ。聖杯戦争に勝利する為なら確実なサポートを、バックを提供するといったオルガマリーはちやんと言葉を守ったのだ。

「なあ、マスターよ。お主の事は今の話でよく分かったが——語る必要はあったのか？」

「ないよ？ でも俺だけ一方的に良く知っている、ってのはフェアじゃないだろう？」

個人的に英霊と取りたいスタンスは対等の立場だ。此方が使役するというのはマスターという特性上仕方ない事だ。

「だけど一方的に知られているだけってのも気持ちが悪いだろ？ 古代ケルトがどーだったかは知らんけど。少なくとも背中を預けて一緒に戦う戦友なんだから、俺個人の事がある程度は知って貰いたいし、理解している方が無駄にぶつかったりしないだろ？ 個人的に相性はそんなに悪くはないと思ってるし」

「ふむ、成程な。いや、合理的というべきか」

そう、合理的な話だ。サーヴァントとマスターは命を預け合う仲だ。マスターが死ねばサーヴァントは消える。サーヴァントが消えればマスターは戦えなくなる。それが聖杯戦争のルールなのだから。だからマスターとサーヴァントの関係はしっかりしておくべきもの

だと思う。特に自分の様に、戦場に出て直接戦うタイプは信頼と連携が重要になってくる。息が合うかどうかは別の問題として、背中から刺されるかもしれない程険悪な仲で戦う事なんて絶対にしたくない。

「そうなるとコミュニケーションはとるべきもんさ。実際、こうやって話、共有できる時間を持った方がお互い、理解できるだろう？ プライベートタイムはお互いちゃんと確保してさ」

「言いたい事は理解した。合理主義者だが人情家、と言った所だな、お前は。それに良き師にも会えたように鍛えられているのも分かる。これが我が影の国であれば迷う事無く弟子として育てたものだが……ふむ、そこまで余裕がないのは少々困ったものだ」

「いやいや、あの影の国の女王に鍛えられるのは吝かではないというか是非此方からお願ひしたいぐらいだよ。まだ冬木入りまでは時間があるし、どうだ、今夜からちよくちよく手合せしたり」

「うむ。悪くはないな」

食べたり話すよりも、どうやら体を動かす事の方がスカサハとしては好ましいらしい。鍛錬をするというと少しだけ声が弾んでいるのを感じられる——まあ、ここら辺はさすがケルト文化の女王と言った所だろうか。戦って飲んで戦って戦って戦った文化だ、やはり三度の飯よりも闘争と鍛錬を好むものらしい。しかし鍛錬自体は自分も嫌いじゃない——むしろ好きだ。ライフワークにしているぐらいには。この聖杯戦争だって英霊と戦えるという部分に興奮しているフシがある。一流の英雄を生み出してきたスカサハに鍛えて貰えるのだ、それはそれで非常に楽しみにもなる。

そんな事を思っているとピピピ、と電子音が響く。直後直接耳の中へと響くように音が聞こえる。

『あー、あー、あー。テスト中なんだけど聞こえるかしら？ 聞こえたら左手を持ち上げてくれる？ 良し、届いているわね。それじゃ自由時間を邪魔して悪いけど一度戻ってきてくれるかしら？ 現在判明しているマスター達の情報を入手してきたから、冬木に入る前に情報共有と作戦会議に入りたのよ』

「拝承、拝承。……ってこれ、聞こえてるのか？」

『聞こえてるから安心していいわ。最終的には此方からオペレーター映像を流したりすることも検討に入れているけど……今はまだ無理ね。それじゃあ戻ってらっしゃい』

キウン、という音と共に音声が見えなくなる。その現象をスカサハは興味深そうに観察しており、

「魔術と科学の融合か……成程、私を召喚したのもこれが原因か」

「原理は俺、一切理解してないけどな。魔術と科学の相性の悪さをどうやって克服したのか気になる所だわ」

ホットドッグを食べ終わると少々口元が寂しくなってくるため、煙草を取り出すが、横から延びるスカサハの手がそれを素早く奪い取り、握りつぶして消し去った。

「鍛えるならまずはここからだ」

「マジかよ……」

スカサハがいるところではタバコ吸えないなあ、と嘆きつつも、広大な学園都市である時計塔その敷地を歩いてアニメスファイア家へと向かう。

徐々に、徐々に——聖杯戦争は近づいていた。

序章―3

「まず最初に紹介するけど、ここにるのが今回、貴方を冬木市における聖杯戦争でサポートするメンバーよ」

オルガマリーが呼び戻して連れてきたアニムスファイア家の屋敷の一室、そこには複数の人物たちの姿が見える。オルガマリーを抜いてこの部屋にいるのは自分とスカサハ、白衣の男、そしてローブに全身を隠す存在だった。部屋にいる二人を確認してから視線をオルガマリーへと戻す。

「まず白衣はロマニ・アーキマン、此方で用意した医療のスペシャリストよ」

「やあ、宜しく。君の事はマリーから聞いているよ。メンタルやフィジカルのチェックは僕の担当だから何かあったら真つ先に連絡してくれ、此方で出来る事はなんでも解決させるよ」

白衣の男が挨拶しながら手を差し伸べてくるので握手を交わす。意外とゴツゴツとした、マメのつぶれて硬くなった手の感触を感じさせるそれは何か、武器を持つようなことをやりこんでいた、と思われるような手だった。

「で、こっちが礼装のメンテナンスや作成、技術関連に関しての担当よ。本名は契約で口に出せないから“ダヴィンチ”って呼べばいいわ」

「よろしくダヴィンチ」

「ああ、宜しく頼むよ。おそらく私は一番会う機会が少ないだろうけど、十全に動ける様に作成した礼装とかはなるべくそちらへと送るから」

ダヴィンチの手はロマニとは違ってやわらかい、女の手だった。声質も女のものだったから、おそらくは女なのだろうが―――本当にそうか？ と首を傾げる部分があった。ともあれ、ロマニもダヴィンチも会う回数自体はほとんどないと思う。彼らの仕事はバックでサポートする事であり、前に出て戦う此方とは立場が違うのだから。おそらくロマニは現地までついてくるかもしれないが、ダヴィンチはお

そらく時計塔に残るだろう。しかし、聖杯戦争中に専門の医者と礼装作成の係がいるのは非常に大きなアドバンテージだ。

なにせ、そういう事に注意する、つぎ込む時間を省略できるからだ。戦いとは時間の問題でもある。迅速に、そして最適に動く必要がある。専門のスタッフががいるならそれだけこちらでも最大効率で動く事が出来る。

「もつとスタッフもいる訳だけど、直接関わりもしない人を態々呼ぶのも手間だし、セクションの担当をこの二人だと思えばいいわ。今はそれよりもほかの参加者たちの情報を確認しましょう。生き残るために重要なのは情報なんだから」

「まあ、そうだな」

会議室の椅子に座り直しながらオルガマリーが黒板に貼り付ける写真を確認する。黒板に張り付けられる写真はどれも見覚えのない男性のものだが——おそらくこれが判明しているマスターの写真なのだろうと判断する。オルガマリーはそれを一つ一つ指さして確認させてゆく。

「これが衛宮切嗣、これが言峰綺礼、この無駄な髭が遠坂時臣よ。そしてこの今にも死にそうな不幸そうな顔をしているのが間桐雁夜ね」

そう言つてオルガマリーは完璧に七陣営中、四陣営のマスターの素顔を獲得していた。いや、ケイネスが令呪を保有していた事、そしてこのレフ・ライノール・フラウロスという人物と既に同盟関係にあるのなら、全陣営中六陣営のマスターを把握しているという事になる。正直、バックアップにはそこまで期待してはいなかったが、聖杯戦争の本戦開始前のこの状況でほとんどの陣営のマスターの情報を入手している、という事態には驚愕せざるを得なかった。

「情報の入手経路に関してはめんどくさいから質問しない事、いいわね？ それじゃあロマニとダヴィンチはもう用が済んだし帰つてもいいわよ」

「相変わらず君は酷いねマリー……」

愚痴りつつもロマニは立ち上がり、それじゃあ後で手を振りながらダヴィンチと一緒に部屋から出て行く。二人が部屋から出たのを

確認してからオルガマリーがこちらへと向き直り、そして話を続ける様に口を開く。

「まず不幸そうなのと髭は忘れるわ。この二人に関しては戦闘経験そのものが皆無だから、死徒とかの討伐経験がある貴方からすればそこまで怖い敵じゃないわ。問題は衛宮切嗣と言峰綺礼の二人よ。前者は“魔術師殺し”なんて呼ばれるほどまでに有名な魔術師、後者に至っては聖堂教会の元代行者よ。どちらも何年分もの戦闘経験に加え、殺し合いという行動そのものに慣れていているわ……戦うとして、一番面倒になるのは間違いなくこの二組よ」

何気にオルガマリーがひどいことを言っているが、確かに戦闘経験のない素人と戦闘経験のある者では脅威度が変わってくる。

「二人ともそこそこの有名人だから情報を集めるのもそこまで苦労はしなかったわ。衛宮切嗣は銃器をメインに狙撃や爆破、暗殺を得意としている……もはやテロリストね、そういう領域の人間よ。情報を調べて、潜んで、油断したところを必殺するってタイプね。正直一番戦争とかで相手にしたくないタイプだから排除の優先度としては一番高いわ」

「狙撃手か。この手の人間は矜持よりも効率や結果を選ぶものが多い。面倒な輩だ」

しかし、ここでオルガマリーの言葉は終わらない。

「しかも最悪な事にアインツベルン陣営のマスターで、向こうは冬木に拠点を保有している。つまりは工房戦みたいに関手の陣地に踏み込んで戦う必要があるわ。此方から倒しに行くのならね。一番最初に排除したいのは事実だけれど——序盤で倒せるかどうかと言われれば無理ね」

用意された陣地に乗れ込んで戦うのは自殺行為だ。だから相手が陣地に隠れている、或いは立てこもっている場合のセオリーは“爆撃”だ。陣地が陣地としての役割を果たせなくなる様に、陣地を徹底して破壊するのがセオリーだ。サーヴァント戦で考えるならば対軍、対城クラスの宝具を叩き込めれば良いだろう。幸い、スカサハの宝具はそういう事が可能だ。だけど、

く魔力に対してある程度のハンディキャップを被っている者からすれば非常に使いやすい道具ではある。何せ、自身の魔力の代わりに魔宝石を消耗すれば魔力の代用ができるのだから。

とはいえ、宝石は高価だ。代案として龍脈から魔力を、力を吸い上げるという礼装を用意する事で場所は限られるが、魔力を存分に使つて戦うという方法も検討した。

結局こちら辺は魔術師としての自分の非才さが目立つばかりだ。

スカサハの維持、宝具の発動に関しては問題はない。だが基本的に魔術師の多くはサーヴァントを召喚、維持する事を考えて魔術を組んだり、礼装を作成したりしない。無論、そこには当然自分も含まれている。自分が旅路の末に覚えた魔術なんかはそこまで燃費の良いものではない。特に“奥義”に関しては魔力を完全に蒸発させる勢いで消耗する。ここで魔力を消耗してしまうとスカサハの維持や戦闘に支障が出てしまう。

故に、魔力。その確保手段が重要だった。

ともあれ、そんな事もあつて議論は割と伸びてしまった。会議室から出る頃には随分と遅い時間になり始めていた。これから鍛錬するにしたつて少々遅すぎるかもしれない、何てことも思い始めていた。メシを食つたら素直に寝て、明日の朝から鍛錬するか、と判断し、会議室から離れようとしたところで人の気配を感じ、その方向へと振り返る。

「——おや、もしかして君がランサーのマスターのセノ・マサヒロかな」

「まあ、俺が瀬野正広^{セノマサヒロ}だけど——」

答えつつ片目で視線をスカサハへと向けようとすれば、既に彼女の姿はそこにはない——霊体化したらしい。つまり目の前の相手には警戒している、というサインでもある。成程なあ、と思いつつ改めて前方の男へと視線を向ける。

緑色のスーツ姿に帽子をかぶった、男の姿だった。特徴的なのはその細目だろうか、本当にその視線がこちらへと向けられているのかどうか、掴み辛い人物だった。ただその物腰は柔らかであり、英国らし

い紳士的な雰囲気を持っていた。その姿を確認して、そして誰かを理解した。

「ああ、アンタが——」

「——ええ、レフ・ライノール・フラウロス、此度の聖杯戦争でキャスターのマスターをするものだよ。今回は同盟者の顔を伺おうと思ってるね」

そう言っただけでレフは近づきながら握手の為に手を伸ばしてくる。故に笑顔のままその手を取ろうとして、動きを止める。一回自分の手に唾を吐いてから両手をこすり合わせ、もう一度手を前に出す。が、それを見たレフは既に手を引つ込めていた。

『見た目は良いが——中身が濁っているぞ、こいつは、気を付けろ。最後まで味方かどうか解らんぞ』

スカサハからのお墨付きまで来た。となると成程、自分の直観も捨てたものではないかもしれない。なんとなくだがあの魔性菩薩と会った時同様、吐き気を覚える、根底にそんなものを感じる——が、今は同盟相手、そしてアニメスフィア家にいるのだ。いきなりアクションを動かす訳にもいかない。

「ま、なんか強い相手がいるっぽいけど、陣地構築に優れたキャスターが一緒だったのは安心できるわ。魔力の回復を促進させればガンガン宝具をぶっ放して此方が有利に動けるからな」

「キャスターは後方支援をメインとするサーヴァント、強力な前衛型のサーヴァントと組めればこの戦いも優位に進めるだろう。と、それでは私は用事がある故……」

「ああ、じゃあな」

横へと体をズラし、レフに道を譲る。そのまま先ほどまで使っていた会議室へと入り込んで行くのを確認し、息を吐いて廊下を歩き始める。後方支援が、同盟者が一気にきな臭くなってきた。いや、冬木で会う前に確認できたのは幸いだ。事前に情報があれば対策できるという事でもある。だからレフ——つまりはキャスター対策を行う時間も得られるという事だ。

「爆撃機をアニメスフィア家名義でレンタルできないかなあ」

『おそらく協会にも教会にも命を狙われるぞ』

まあ、そうなるよな、と苦笑し、歩き始める。聖杯戦争の開幕は目前へと迫っている。あと少し、あと少しという所までやってきている。おそらくは近日中には準備と拠点の確保の為に日本へ、冬木へと戻る事になるのだろう。

「……………」

『思案顔を浮かべてどうした』

「いや、な」

日本の事となるとどうしても実家の事を思い出す。意図的に考える事を避けてきたが、さて——実家の連中は放逐した息子が聖杯戦争に参戦していると聞いたら、いったいどう反応するのだろう。アニメスフィア家を通して煽りメールを入れるのはこれ、結構楽しい事なんじゃないか?　と思う。

まあ、それは暇な時にするとして、

「日本へと行く準備を進めますか」

きつと、数年ぶりに食べる日本食は美味しいだろうな、と思いつつ重かった足取りを少しだけ軽くして進んだ。

序章―4

「――うう、寒い。日本の冬ってこんな寒かったっけ」

手を擦り合せながら乗っていたタクシーから降りた。タクシーの中は非常に暖かったものの、やはり日本は冬で、冬木市は辺境の都市だ。山に、そして海に囲まれたこの大地は基本的に発展性に乏しい――つまりは良く都会にあるヒーターガンガンつけっぱなし外までなんかちよつと暖かくね？ という感じの現象がない。故に普通にととてもとても寒い。とはいえ、魔術のちよつとした応用でそこら辺はどうにかなるのだ。何より自分の魔術の属性は“火・空”の二重属性だ。体を温めるぐらいだったらなんてことはない。

まあ、時計塔で勉強するまではできなかつた事なのだが。

相変わらず、俺はポンコツだった。

「さつて、と。とりあえず冬木に到着したけど――どうだ、ランサー。見えるもん変わってるか？」

同じくタクシーから降りたポンチョにマフラー姿のスカサハへと視線を向ける。スカサハはその赤い目で世界を見つめ、そして頭を横へと振りながら息を吐く。吐かれた白い息が拡散して消えて行くのを眺めながら、スカサハの見た風景が変化していないのを理解しそうか、と言葉を掃き出し、歩き始める。冬木市の地図は入手してあるが、それよりも重要なのは拠点の確保と確認だ。幸い、拠点の確保はアニメスフィア家側でやってくれている。ホント頼りになる所だ。

「んじやまずは拠点の確認をすつか――一応共同で使う場所だし」

誰とは、言わない。そんな事は言わなくても理解しているからだ。そもそも同盟なのだから一緒に行動をするのは決まっている。まあ、向こうは後からやってくる手筈になっている。それは同盟を組んでいる、という行動をあらかじめにしない為なのだが――既にバレーしている気はしなくもない。なにせ、アニメスフィア家は今回、かなり精力的に動いている。となるとアインツベルン辺りが監視していてもおかしくはないと思う。

まあ、それは追々、今は先にやるべきことを終わらせなくてはなら

ない。

既に与えられた拠点がどこのかはわかっている。



冬木は東西で二つに分かれている。中央には川が流れ、それが冬木を分断している。この分断されている冬木市の内、東側に拠点となる建造物を用意してくれた。それは第三次聖杯戦争においてエーデルフェルト家が利用した館であり、聖堂教会に比較的に近いこの場所が拠点として選ばれた。一つ目の理由はこの館の入手が比較的に楽だった事、二つ目の理由は少々手を加えれば簡単に霊脈のラインを通せる事、そして三つめは魔術拠点としての加工のしやすさから来ていた。元々第三次聖杯戦争においてエーデルフェルトの双子の当主はこの日本で戦い、そして敗北し、その屈辱から二度と日本には足を踏み入れない事を誓っている。そしてその際、この建造物を魔術教会へと預からせた。

故にこの双子館、魔術教会へと交渉し、多少金を握らせればあっさりと入手できるのだ。

そういう経歴で確保のできた双子館は非常に良いコンディションにあつた。修繕は既になされており、掃除も綺麗にされてあつた。どうやら予め掃除して、使える状況にアニメスフィア家の方で仕立て上げてくれたらしい。中に入ってみると装飾品の類は置いていないが、それでも冷蔵庫の中にはインスタント、そして食材がちゃんと中に保存されていた。

ついでに出前のチラシも。特上寿司はぜひとも頼んでみたい。

そんな事で館の確認を行っていると、スカサハが姿を現す。その服装は現代の服装のままなのは見られても良い様に、という事なのだろう。

「それでは私は陣地の建築作業に入るが……良いな？」

「ああ、任せた」

返答するとスカサハは頷いて姿を消す。胸が大きいのもいいが、ケ

ツも悪くないなあ、と思いつつキッチンへと視線を戻す。出前を取らずに今日は何か、メシは自分で作っておくか。そう思いながら色々キッチン周りの確認を進める。

なお、陣地構築に関してスカサハに心配するものは一切ない。スカサハが保有しているスキルにある“魔境の智慧”はA＋ランク存在し、これはスカサハに様々なスキルを使用する事を許す、そういうスキルらしい。そのスキルのランクもスカサハの技量や経験に合わせてAとBの間に変動するらしい。そして稀代のルーン魔術の使い手でキヤスター適性の存在するスカサハが、影の国を支配し、神殿すらも保有した彼女が陣地構築程度出来ない訳がない。放っておけば優秀な防衛拠点を築いてくれるだろう。そう思いつつ、

「お、米があるじゃん。あっちにいる間はパンばかりだったし、使うか」

さっそく台所を使う。



「で、お主は何をやってるんだ」

「見て解るだろ、炒飯食ってるんだよ。自分で作っておいてアレだけど、美味いぞ」

キッチンのテーブルで一人、座りながら皿いっぱいに乗せた炒飯をレンゲで口の中へと運んで行き、久方ぶりの簡単な中華料理を楽しむ。それを見て口元を隠しているスカサハが呆れたような溜息を出す。何かを言う前にテーブルの反対側へとレンゲを向ける。そこには運んでおいた大皿とレンゲが用意されており、テーブルの中央には中華鍋とその中に大量に突っ込んである炒飯が存在する。

「あんまり味に期待すんなよ。別に料理に凝ってる訳じゃないし」
「いや……まあ、いいか」

スカサハが観念したかのように反対側へと回り込み、無言で中華鍋から炒飯を大皿の上へと移すと、その中にレンゲを突っ込んで食べ始める。一口目で此方へと視線を向けてくるが、味には期待するなど

言っておいた筈なので無視する。まあ、普通の味、というレベルだ。個人的にはこれでも美味しいと言えるが。けどやっぱり米は良い。日本人はやっぱりこれが食えないと駄目だなあ、と思う。まあ、実際は旅してまわっている間はそれなりにコメは食べていたから、やっぱり時計塔のメシがダメだったただけだ。

「やっぱ時計塔のメシはクソだな。研究研究勉強勉強勉強。あいつら人生を無駄にしてやがるわ。目的に対して一直線なのはいいけど、もつと人生に彩とか余裕とか持たなきゃだめだなあ……」

「お主は人生、色々と余裕がある様に見えるな」

「まあ、ウルトラ求道僧との出会いが俺を変えた、って感じだな」

椅子に寄りかかりながらそう思う。人生の転機を語るならやっぱりあの馬鹿との出会いが重要な所だろ。門司と旅をしている間に細かい事でぐだぐだと悩むことをやめ、心に余裕を抱きつつも、信念や情熱はそのまま抱き続ける事を覚えたと思う。やっぱり出会いは人生を豊かにすると思う。出会いを重ねる事によって人生が広がり、そして成長して行くのだ。だから改めて思う。狭い魔術の世界だけに留まらずに、もつと広い世界を見る事が出来たのは幸運だったのだ、と。

「とりあえず誰を最初にぶつ殺すかは決めたわ」

「そうか。方針としては積極的に攻める事でいいんだな」

「ああ。ぶつちやけ待ちの戦法を取る様な戦力でもねえしな。逆に籠城するのとめんどくさい事になりそうだし……叩ける相手はなるべく叩いて速攻で終わらす。これに尽きる」

「で、誰を相手にするんだ？」

食べながら聞いてくるスカサハのその言葉に対して、一旦レンゲを置き——答えた。その言葉にスカサハは一瞬だけ驚いたような表情を浮かべたが、しかし、直後納得したような表情を浮かべる。そして再び、何でもないかのように炒飯を食べ進め始める。自分のサーヴァントはこの方針に関しては全くの異存を見せない、存在しないらしい。スカサハが協力的なのは非常に助かる——まあ、何かを抱えていそうな場合もあるが。

「とりあえず陣地の構築の方はどうなってんだ」

「其方の方は問題はない。まだ初期の段階だがすぐにこちらに馴染む様になる。優先しているのは魔力の回復でいいんだな？」

「ああ、もっぱらそれが一番の問題だしな」

ポケットの中に手を入れ、その中に入れてある小粒の宝石に触れる。魔宝石は常に持ち歩いている。冬木市に入っつてしまえば完全に聖杯戦争にエントリーしたようなものだ、何時襲い掛かれてもおかしくはない。礼装は流石に目立つから昼間から持ち歩けないのが辛い。しばらくは冬木を歩き回って、地理を頭の中へと叩き込む事から始めた方がいいな、と判断する。まあ、スカサハの様な美女と一緒に歩き回るのは実際にご褒美以外の何物でもない。

「……」

——スカサハを見る。

「なあ、スカサハ」

「なんだ」

「死にたいって思ってる？」

「ああ、思っているぞ。此度の召喚が未熟ながらも私が応えたのは試してみる価値がある様に思えたからだ。真に万能の願望器なら私すら殺してくれる筈だと、と」

「ふーん……」

スカサハ——あまりにも神の領域へと踏み入れる存在であったが故に、呪われた影の国の女王。死を奪われたスカサハは老いる事もなく、死ぬこともない。それを幸福に思う人間は多くいるのだろうか、現実が違う。命には限りがあるからこそ潤いが存在する。スカサハは死を奪われることによつて人生から潤いを奪われてしまった。どんな優秀な統治者で、師で、そして武芸者であろうとも、不死者である以上、長い年月をかければ到達出来て当然という風になつてしまふ。スカサハは死を奪われ、その全てを奪われた事に等しい呪いを受けた。

故に死を望む。

「へえ、実際ここにいるスカサハってどんなもんなんだよ。本体って訳じゃないよな」

「無論この私は本体とは別だ。召喚に応じて生まれた写し身の様なものだ。本体の私から抽出された情報が聖杯戦争というシステムを通して英霊という形で他の英霊たちと同じように顕現しているだけだ。今も私の本体は影の国にいる。まあ、本体とは言うがこの身は完全に独立した人形の様な存在だ。繋がりはもう一切ないのだがな」

「はえー……まった面白い事になってるなあ。つー事はアレか、この世界のどっかに影の国が存在するって訳か」

その言葉にほう、とスカサハは言葉を漏らす。

「なんだ、私に師事したいのか？ 見た所お前は魔術師としては劣悪ではあるが、戦士としての素養は非常に高い。不毛の平原を、光が一切存在せず見通せない大森林を、魔獣の住み着く絶望の谷を、心を試す為の橋を、そして城壁を超えて我が国へ来るといふのか」

「これ軽い観光って気分で行ける領域じゃねーぞ！ とうか影の国って観光業とか産業とかそこらへんどうなってるんだ」

「そうだな、観光業は死んでいる。そもそも試練を乗り越える事の出来るやつすら数世紀はいなくてな、おかげで宿屋が全て閉店してしまった」

「昔はあったのかよ観光業……」

意外と影の国って楽しい場所なのかもしれない、と一瞬思ったけどケルトのキチガイ戦士たちが理想の修行場として目指した場所なんだからキチガイ・オブ・キチガイの聖地であるに違いない。たぶん門司辺りが白目剥きながらマイドリーム、とか叫びながら喜びそうないメージはある。ああ、うん、あの修行キチガイであれば間違いなく影の国の入国試練も喜びそうだ。

「でも実際の影の国ってのはちよつと興味あるな……」

「ならば戦いが終わったら私が招待しよう。戦士としては間違いなく一流の領域に入るが——磨かれていない部分はまだある。私なら今よりも更に優秀な戦士として育て上げる事も出来る。うむ、久しぶりに話をしたら少し楽しみになってきたな。お主、今夜は暇か？」

「いや、エンジン入ったのはいいんだけど今夜は調査とかあるからな」「それならば仕方がないな」

少しだけ残念そうにため息を吐いたスカサハの姿に苦笑しつつ、懐
で震えを感じ、ポケットの中に手を入れる。その中から取り出すのは
英国を出る前にオルガマリーに手渡された携帯端末だ。それを操作
しながら確認すれば、

「お」

「どうした」

携帯端末をポケットの中に戻しながらスカサハに答える。

「先ほど最後のサーヴァントの召喚を確認したってさ。あとはレフさ
え日本に到着すれば聖杯戦争は開始——そのレフに關しても三日
後には日本に到着するってよ。戦いもあと少し、って所だな」

「ふむ、ならば準備を早めるか」

そうだな、と答えつつ、炒飯を食べる事に戻る。

聖杯戦争。

——英霊と戦う事の出来るこの舞台は、ずっと前から楽しみにし
ていた。

序章―5

魔術とは一見、複雑なプロセスを通して発動させる必要がある様に思える。

だけどそれは間違いだ――馬鹿でも素質さえあれば魔術は簡単に行使できる。

たとえば、自分が良いサンプルだ。

双子館の中庭、使い魔等の監視が存在しない事を事前にチェックしており、ここでも鍛錬を視線を気にせず行えるという事は確認してある。聖杯戦争中でも鍛錬していいのか？　と言われてしまうと少し困る所があるが、一般的感性から自分がだいぶ離れているのは自覚しているからしょうがない。闘争とは“日常”なのだ。体を鍛えるのも、ご飯を食べるのも、人と殺し合うのも、日常の延長線上の出来事ではないのだ。これをスカサハは“戦士の資質”と呼んでいた。一流の戦士は戦場で生まれ、育ち、暮らし、そして死ぬ。息を吸う様に戦うのが当たり前であり、それが彼らの人生だった。戦う事や殺す事に一タストレスを感じていたら簡単に死んでしまう。だから精神的なりミッターがある程度外されており、闘争を日常として受け入れ、普通の人間とは違う“日常”を認識するのだ。そうすることによって自然体でありながら常在戦場の己を保ち、どんな時でもフルスベックで戦える様にする。

そこらへんの精神構造に関しては自分は完成されている、と認識している。

或いはスカサハからすれば“手遅れ”とも呼べる領域に。

人が一日三食を求める様に、俺も日常に闘争の気配を求める。戦うのが好きでも、殺し合うのが好きでも、別段戦う日常を求めているのではない。“自然とそうなってしまっただけ”なのだ。現代の言葉にそれを当てはめるならおそらくは、

修羅と呼ぶのかもしれない。

それはともあれ、闘争が日常の者としては戦争の真ただ中でも鍛錬を続ける事を忘れたくはない。こういうのは一日抜いただけで――

——なんて言うほど愚かではないが、それでも習慣として体に根付いているものだ。特にインドで修行した数年間の経験がおそらくは一番濃く、おかげで毎日、必ずどこかで軽い鍛錬を入れる程度には慣れてしまっている。故に今日も何時も通り体内の魔術回路を確認し、そして神経の様に、血液の様に体を流れるそれに炎を流し込むイメージを生み出す。生命力が魔術回路によって魔力へと変換され、体内に痛みが生まれる。だがその痛みも修練を繰り返している内に慣れた痛みになってきた。これが正常であるという道しるべにさえなる。故に痛みと共に魔力の生成を確認し、

「——^{オーム}Aum」

魔術が発動する。右手から炎が生み出され、それが固形を得る。形は細長い、剣の様な形を生み出す。炎剣、炎という魔術属性を利用したもつとも初歩的な魔術であり、初心者向けの魔術。炎系統の魔術でこれより簡単なものとなると炎その物を相手へと向かって放つぐらいにしかない。ただこの炎剣には己のもう一つの属性、空の属性が混ざっている。本来は天候を司る属性ではあるが、空属性には“エーテル干渉能力”が備わっている。それ故にこの炎剣は実体のみならず、エーテル体、つまりは霊体や英霊にダメージを効率的に通す事の出来る武器になっている。とはいえ、所詮はそれだけだ。少し魔術を勉強し、鍛えたものなら出来る程度の事だ。この道をさらに究めれば更に多くの物を生み出す事が出来るのかもしれないが、

才能のなさが影響し、炎の武器の生成は剣を同時に二本握る程度が限界になる。それでもやる事自体に意味がある。故に不思議と手が焦がす事のない炎剣を握りながら、それを振う。炎という物質は質量が非常に低く、軽い。だが極限まで温度は上げてあるので、鉄程度ならば焼き切るといふ事が出来る武器でもある為、ある程度便利な武器だ。ただ、場合によっては質量差で敗北出来る為、実体剣を持ち歩く事は忘れられない。しかし体に一番馴染んでいるのは炎剣だ。

故に、いつも通りそれを振う。

「Om Bhur Bhuva Svaha——」

刃を振りながら寺院で修行していた時に何度も聞かされ、練習し、

民間でもメジャーとして有名な“ガヤトリー・マントラ”を精神を集中させるために呟く。魔力が空間にない限りは魔術的な意味は一切存在しない。が、マントラは呟き、歌うこと自体が精神を整える効果がある。魔術的な要素はなくとも心身のクリア化をめざし、果たしているインドのマントラ文化は非常に優秀だ。戦闘外、日常でも気軽に利用できる。今やっているのもそういうものだ。刃を振りながら呟く事で心をリラックスさせている。

そうやって十分程炎剣を振りながらガヤトリー・マントラを何ループかさせた所で、炎剣を消しながら鍛錬の動きを止める。視線をそこから中庭の入口へと持って行けば、スカサハが最近は良く見る現代風の衣装に身を包んで立っているのが見える。

「で、英雄たちの大先生スカサハ師匠からすりゃ俺はどんな感じだよ」

「私の評価は変わりません。そもそも動く所を見なくてもこの程度の評価なら出来るからな——精神面と肉体面はほぼ完成されていると言っても良い。身体的に、そして精神的には戦士と呼ぶに相応しい物がある。しかしその反面、魔術に関しては酷過ぎるとしか評価が出来んな。あとはそうだな……剣術の基本は出来ているが、もっと踏み込んだ技術を体捌きと共に身につければ良いだろう。そちらに関しては私が多少指導すればあとは勝手に育つだろうが、魔術に関しては私がしっかり教えないと芽もでないな」

「そこまで俺の魔術は酷いのか……」

スカサハで“しっかり”と言うレベルなのだから、現代の環境でスカサハに出会わなかったら育つ事はなかったと言えるレベルだ。聖杯戦争という環境でスカサハに会えたのはまさに僥倖だったんだなあ、と思える。

そこで一旦スカサハから視線を外して、庭に置いてある置時計を確認する。ベッドルームから自分がこちらへと時間を把握する為に持ち込んだものだが、まだまだ時間的にはたつぷり余裕がある。というのも、本日レフ・ライノール・フラウロスが日本に到着予定であり、予定通りならあと数時間で此方へと合流する様になっている。レフさ

え合流してしまえば本格的な聖杯戦争が開始する。ロマニも隣町でいつでもサポート出来る様に待機しているらしいし、此方の聖杯戦争の準備は完全に完了していると言っても良い状態になっている。

それまで多少時間があるのだ。

「——それでは、本戦前のウォーミングアップを兼ねてお願いしようかな」

炎剣を再び生み出しながら刃を構えれば、スカサハが相對する様に立ち、その姿を現代風の衣装から現れた時の服装へと——紫と黒のタイツに顔の下半分を覆う、マスク姿へと変貌させる。その手には赤い魔槍が握られており、此方と同様、抜身の刃を向けてきている。

「良いだろう。ただ私のやり方はスパルタだぞ。付いてこれずに死んだ者もいる」

「ならそれまでの話だったという事で」

生きていれば事故って死ぬこともある——それだけの話だ。



他愛のない修行コミュニケーションを数時間ほど過ぎすと、やがて双子館の方に近づいてくる気配を、そして魔力を感じる。その接近にレフの到着を感じ取り、握っていた炎剣を消失させながら軽く首を回し、体の疲労を感じ取る。自分の目の前には所々焦げているスカサハの姿があり、そして自分も切り傷や打撲傷が体中にできている。結局のところ、修行の内容に本格的な殺し合いが混じっていた、それだけの話なのだが。スカサハの実力を肌で感じ取る事が出来て満足できる時間だった。が、レフが到着したのならそれも終わりだ。

用意しておいた水の入ったペットボトルを開け、それを頭から被りながら流れている血を一気に汗と共に流し去る。傷口にしみるが、行動に影響の出る範囲ではない——ここら辺は流石、というべき技量なのだろう。まだまだ自分では至らないところだ。息を吐きながらスカサハに感謝しようとしたところで、既に彼女が霊体化して姿を消している事を把握する。行動が早いな、何てことを思いながら上半身

裸のまま、軽く空を見上げる。

——何時の間にか、空は暗くなっている。

——夜、それは魔術師達の時間。

聖杯戦争の時間だ。

「夜か。ま、悪くねえな」

眩きながら上半身裸で体を濡らしたまま、中庭の入口から館内へと戻り、そして館の入口へと向かう。ホールへと到着する頃には既に扉を開け、中へと入ってくるレフの姿が見えた。その服装は英国にいる時と全く変わっていない様に見える。また、キャスターの姿が見えないのはおそらく霊体化させているからなのだろう。ふむ、と口の中で軽く言葉を零すようにつぶやき、レフへと視線を向けたまま気配を探る。

「エーデルフェルトの双子館へようこそ——まあ、今ではアニムスファイアの双子館って言うべき物件なんだけどな」

「やあ、マサヒロ君。その様子を見ると随分と刺激的な時間を過ごせていたようだね」

「ランサーに稽古をつけて貰っていたんだよ。おかげでもうくったくたでさあ……いやあ、やっぱ英霊とかつて凄いわ。神話だとか英雄譚ってのは俺には解らねえけど、そう謳われるだけの実力があるってのは理解したよ。なんつーか……馬鹿だから言葉には出来ないわ。アンタならたぶん適切な言葉が解るかもしれないな」

「ははは、あまり自分を卑下するものじゃないよ。君だって数奇な運命をたどってこうやってマスターとして聖杯戦争に参加する事が出来たのだろうか？　だとしたらその運を誇り、そしてそこにたどり着けた自分を称えるべきだ。そういう数奇な運命こそがすべてをひっくり返す鍵になり得るのだからね」

「成程ねえ、流石インテリはいう事が違うわ」

笑いながらレフを迎える為に歩いて近づき、笑顔のままキャスターの気配を捉える。霊体化してはいるが、存在としてそこに“在る”のだ。つまり生物が発する特有の気配等が消えたわけではない。少なくともスカサハの様に、魔境の智慧を通して気配遮断でも取得しない

限り、気配は探れば見つけられるものだ。

「とりあえずレフ教授、こうやって冬木に参加者が全て揃ったらしいし、俺はそろそろ聖杯戦争を始めようかと思っている。いい加減ここに引きこもって鍛錬しているだけなのも飽きるしな」

「ほう、つまりどこを襲撃するか、既に当たりを付けていた、ということか」

「まあな、そういうのは現場判断が一番優秀だからってマリーちゃんが一任してくれているしな」

レフは帽子を軽く被りなおしながらふむ、と声を漏らしながら視線を巡らせてから此方へと向けなおす。

「で、どうするのか？ 個人的には一番潰しやすい間桐から攻略し、まだ不明の最後のマスターを搜索し、そしてアインツベルンを少しずつ削るのが最善だと思っっているのだが」

妥当な判断だと思う。実際間桐家のマスターである間桐雁夜は元一般人、この聖杯戦争の為にだけに寿命を削ってまで急造の魔術師として参戦してきた。そこには執念を感じさせるが——此方には関係のない事だ。相手が魔術師として初心者であれば、間違はなくサーヴァントをまともに維持する事も出来ない。ここでサクッと雁夜を倒し、その令呪を奪えば此方を強化する事が出来る為、最初のターゲットとしては申し分ない。

「だけど、

「いや、最初のターゲットは別の奴を狙う」

「なんと、それは——」

レフの言葉を引き継ぐ。

「——お前だよ」

言葉を放った直後、縮地によって踏み込んだ身体が重力を振り払ってレフの反射神経を上回って加速し、一瞬でその背後へと回り込みながら生み出された炎剣が突きと共にその心臓を貫いた。また同時に、霊体化したままのキャスターをスカサハが魔槍を二十に分身させ、それを同時に突き刺す事で一瞬で肉を貫いて抉り、霊核を一瞬で粉碎した。魔力の粒子となってキャスターがその姿を見せる前に霧散して

消えて行く。その突然の事態にレフが口から血を吐き出しながら驚愕の表情を浮かべる。

「なっ……裏……切、り……!?!」

「初手で裏切る——中々ロツクだろ?」

レフがそれ以上言葉を放つ前に炎剣を突き刺したままレフの体を振り回し、その姿を館の外へと投げ飛ばし、同時に収束させていた炎剣を解放する。剣の形で固まっていた炎剣は解放されたことよつてただの炎へと戻り、心臓を中心に血管を駆け巡り、レフの体を内部から炎で満たす。その口、目、耳、体中の穴という穴から炎を噴出させたレフが絶叫を夜の闇に響かせながら塵となつて崩れて行く。

確実に殺したことを確認する為にも塵となつた場所へと向かつて炎剣を二、三回程投げつけて爆撃し、蘇生も再生もしない事を確認してからロビーに予め置いてた聖水をレフの死んだ場所へと叩きつけ、浄化も行つておく。それを確認してよし、と呟き、スカサハへと視線を戻す。

「で——未来は変わったか?」

スカサハへと振り返りながら問うと、スカサハは頭を横に振る。

「いいや、未来は未だに焼却の運命にある。私が今見える未来はそれだけだ」

「うへえ、一番胡散臭いのレフだったからしよつぱなぶつ殺したのにもしかして違ったか……?」

「どうだろうな。ただ事実なのはキャスターは確実に殺し、レフも殺した。我々は同盟相手がもういない。そしてお主は雇い主に説明をする必要がある、という事だ」

「説明するの面倒だし説明したところで誰が信じるか——」

——未来が存在しない、何てことを。

スカサハは予知を行える。それこそ、原典ではクー・フリーンの死を知っていたように。それはどうやら魔境の智慧で千里眼を取得する事によつて得る事なのらしいが——これによつて戦いの未来を見たスカサハは未来そのものが焼却され、消えるという事を予知した。誰もそんなものは信じない。荒唐無稽すぎて信じられるわけが

ない。

「ただ俺は信じた。」

スカサハに嘘を言う理由はない。

「何よりきつと、そう信じて戦う方が楽しい。」

「同盟相手だから最後に殺すと言ったな！ アレは嘘だ、つて奴よ！

第一聖杯戦争だぜ、聖杯戦争。結局は残れるのは一組だけよ。そしてお前が見た未来が確かで、その未来に俺が存在しなかったって事は俺がどつかで死んでるって訳だ——だったら話は簡単だ」

——未来が消えるなんてイベント、聖杯以外では起こりえない。

——そして死んでいないやつが犯人なのだ。

俺が存在しない、つまりは俺が死んでいる未来。俺以外の誰かが犯人だ。だったら俺以外の全員ぶつ倒せばそれで問題解決だ。理解してもらおうとも、説明しようとも思わない。

なぜなら、

戦争とは究極の自己中心的意見の押し付けなのだから。

「さあ、聖杯戦争しようぜ、聖杯戦争！ ダチが神様がなんだ、つて迷ってたんだ。だったら答えを得られそうなもんを土産にして、そのついでに未来を救えばいいんだ。これはきつと楽しくなるぞ。なあ、スカ……ランサー！」

「その途切れ方は何か私が汚物のように聞こえるから止めろ」

夜空に笑い声を響かせ、聖杯戦争が始まる。未来は焼却される運命にあるらしい。

しかし、まだそこまでたどり着いてはいない。それに勝てば良い、勝てば良いのだ。たったそれだけの話。だから始めよう、

「聖杯戦争を」

初日――1

聖杯戦争の夜が始まった。初日の夜、連絡が五月蠅い携帯端末は既に破壊してきた、なぜかと言えば説明がめんどくさいから。それだけだ。そして聖杯戦争開戦初日の夜。こんな夜に縮こまって引きこもっているのなんて非常にもつたいない。ああ、解っている。聖杯戦争は全体の流れを見て、そして迎撃に動いた方が遥かに効率的になると。だけどそんなものはクソだ。楽しくはない。まあ、人生楽しくない事がいっぱい溢れているのは自覚しているが、実に不幸なことに、今夜に関してはエンジンが全開になっている。

体の細胞という細胞が静かに感じる闘争の気配に覚醒していた。意識が既に戦闘用のそれに切り替わっている。今はまだ聖杯戦争初日の夜。だが既に初日の夜だと言っても良い。綺麗な夜空が見えるこんな夜に、何もせず、見過ごして終われと、出方を伺って終われと言うのか。それは、“あんまり”じゃないか。何をふざけた事を言っているのだ。これは聖杯戦争だぞ。英霊がいるんだぞ、

――馬鹿野郎、それは全力を出さなきゃ失礼だというものだ。先駆者に敬意を、成し遂げた者には尊敬を。英霊は終わった存在である。彼らは駆け抜けてきたのだ、激動の時代を。自分も叶う事ならそんな時代に生まれてきたかった。そうすれば少しは違ったのだろうか。だけど今は、そんな英霊と相對できる、夢の舞台がある。同じ領域で武威をぶつけ合う事が出来るのだ。それは、なんて素敵な事なのだろうか。

自分の今までの人生が、積み上げてきたものが本当に意味があったのか、何かを成し遂げる事が出来たのだろうか、それを測るには十分すぎる。

故に、

手からサイコロが落ち、道路の上にコロコロ、と音を立てて転がり落ちた。もうすでに振り終わったサイコロに用はない。それをそのまま踏み潰す。

「――聞こえてる？　聞こえていない？　まあ、どっちでもいいさ。」

ただ事実としてはアレよ、初日の夜なのに亀ってるのはちよつと間違ってるんじゃないかお前ら？ それでも本当に英霊か？ 英霊を使役しているマスターか？ 誇りとはファック&ファックで別にいいんだけどさ、”それでいいのかよ” って話な訳よ。空を見るよ！ 綺麗な月が出てるじゃねえか！ 勿体ないだろ！」

足場になっているビルの屋上、ポケットから魔宝石を取り出し、それをじゃらじゃらと音を鳴らしながら手から落とすように零してゆく。魔宝石から魔力が解放されながら砕けて行く。それによって生み出される光がこの屋上をターゲットサイトの様に明るく照らしに行く。そう、誘蛾灯だ。ここにいろぞ、と解りやすく見せている。使い魔だつてきつとどこかで監視しているに違いない。まあ、そこは自分は詳しくはない。スカサハは直ぐ傍で奇襲警戒をしてくれている為、此方は遠慮なく準備に入れるのだ……やろう。

右手で握るのは——弓だ。白く、美しく、装飾を施されてはいないが、それでも一目で芸術品と見間違う程美しい武器。インドの寺院を出る時に譲られたものであり、礼装として加工する事によって本来の輝きを取り戻した、現在に残る”神秘の残滓”。

「という訳で、ダイスロールの結果最初の襲撃先を発表しまーす!!」

その神秘の残滓を保有する者を魔術師はこう呼ぶ——
「ゴッズホルダー
伝承保菌者、と。」

「——Aum」

マントラを口にする。魔術回路が起動する。生命力が炎の様に燃え上がりながら魔力へと変換されて行き、解放された魔力と合わさつて炎へと変質し、それが弓に合わさり——夜を照らす太陽の輝きへと変わる。弓に番えられた炎の矢は弓の影響を受けて太陽の光と熱を得る。炎は閃光と熱の塊となって輝きながら破壊性を秘め、そして魔力を吸い上げながら——放たれた。

「——【天を翔ける、太陽よ】」

神話の時代、理想王に握られた弓が現代の科学と魔術を経て再び蘇った。宝具より放たれた太陽の一矢は一瞬で音速へと到達し、視覚では捉えられない領域へと一瞬で加速し、流星の様に空間に炎を散ら

しながら、一切減退する事のない幻想を披露し、その姿は呼吸をする合間に目的地へと、

遠坂邸へと到達した。

音速を超え、そして光速へと到達した幻想は容易く物理法則を無視して着弾する。一拍遅れて閃光が夜の冬木を明るく照らす。遠坂邸のあつた場所には一瞬で炎が爆裂し、明るく住宅街を照らした。久しぶりに遠慮もなく本気で放った「天を翔ける、太陽よ」の威力に軽い爽快感を感じつつも、息を吐き、マントラの呼吸で心身を調整し、再び弓を放つ態勢へと体を移行して行く。一発一発が激しく重い。現代にはありえない幻想を振っているのだから当たり前だが——それでも事前を用意しておいた魔宝石が大量にある為、そのおかげでまだ自分の魔力それ自体はほとんど消耗していない。

「さて、早く出て来ないとお家が吹っ飛んじやうぜ時臣君。優雅にしてると遠坂・ホームレス・時臣になっちまうぜ」

マントラの呼吸で生命力と精神力を活性化させ、魔力を生成する。全身に走る痛みが生の実感を与えながら次の行動への準備を生み出す。視線の先、炎に燃える世界が見える。ピンポイントで遠坂邸を狙っているから周りには被害がないはずだが……少々飛び火しているかもしれない。まあ、それは戦争による二次被害だから仕方のない事だ。とはいえ、遠坂邸が完全には焼けている様には見えない。となると咄嗟にサーヴァントが何かをしたに違いない。少なくとも遠巻きに下見をした時には遠坂邸には「天を翔ける、太陽よ」をどうにかできるようなギミックがあつた様には見えない。まあ、サーヴァントが出て見れば解る。

「さあ、一射目行くぜ。ホームレス魔術師になるかどうか見せてもらうぜ——【天を翔ける、太陽よ】アア!!」

閃光が再びはじめて夜の闇に飲み込まれ、飲み込み、そして弾けた。遠坂邸に直撃した直後、

太陽そのものが飲み込まれるように消え去った。神話の時代、太陽の弓と謳われた幻想が一方的に敗北したその光景を見て、心が高鳴る感触に口笛を吹く。

「この感触……炎を無効化したってよりは“対太陽”なもんを取り出してきたって感じか。”経験した事ある”ぜ」

これ以上の攻撃は無駄。「天を翔ける、太陽」を背のウエポンホルダーへと装着させ、そして後ろへと大きくバックステップを取る。

直後、夜の闇を切り裂いて何かが頭の合った場所を突き抜けた。後方へと抜けて行くそれは黄金の輝きを持ちながら“凄まじい神秘を内包していた”。それこそ、宝具と呼べるクラスの神秘を保有していた。それが抜けていったのを感覚で捉えた直後、

直観が警報を鳴らす。

即座に体が加速し、見るものからすれば消えるのが見える。純粹な体術による超加速術——縮地と呼ばれる移動術の奥義、それを使つて一瞬で後方へと下がった瞬間、足場になっている屋上そのものを粉碎するかのように大量の神秘がガトリングの様に叩きつけられた。それが相手からの反撃だと理解した直後、これで終わらないのを理解し、全力で跳躍する様に加速した。隣のビルへと跳躍した直後、屋上が一気に爆ぜ、剣山のような光景が出来上がっていた。そんなビルの屋上に突き刺さっている武器の数々は間違いなく宝具級の神秘を保有している。サーヴァントの宝具が十数を超えるなんて普通はあり得ない状況に、喉の奥から笑い声が漏れ出る。

「———すげえ……！」

「馬鹿を言っていないで逃げるぞ」

隣のビルへと着地した直後、音もなく、着地の衝撃すらもなく、まるで羽の様な軽やかな動きで横へと降り立ってスカサハが腰に手を回し、動きを一切止める事無くビルから飛び下りる。その直後、再び宝具の爆撃がビルの屋上に溢れた。常識を塗り替えるような神秘、その爆撃に目を奪われつつも、手は既に「天を翔ける、太陽」を抜き、握りなおしていた。その出力は最小限の状態へと落とし、連続で太陽の矢を放つ。

ビルを“避けて”ミサイルの様に振ってくる宝具、そのうち直撃コースの物のみを即座に判断し、迎撃して弾く。神秘の内包量は相手の方が圧倒的に上で、魔力でも圧倒的に相手の方が上だ。しかし、そ

れとは別に技術とはそれに左右されない、直接当てるようにはなく、内側から反らすように矢を曲げて射れば、

ビリヤードの様に対象が勝手に他の対象とぶつかり、連鎖的に軌道が逸れる。それで十分助かる。

宝具の爆撃をかくぐる事に成功し、何十メートルという距離を落ちてアスファルトの大地の上へと衝撃を一切起こさずスカサハが着地する。それに合わせて此方も下ろされ、「天を翔ける、太陽よ」をもう一度背に戻しながら炎剣を生み出し、ビルの合間、その先へと視線を向ける。横でスカサハも顔の下半分を隠し、赤い魔槍を二本握り、同様の方向へと視線を向ける。

その先にいる圧倒的な気配を感じ取って。

「雑種——」

聞こえてくるのは男の声であり、そして見えてくるのは——黄金だった。それは黄金の“王”だった。そうとしか表現する言葉のない、圧倒的気配だった。スカサハを見た時も王という存在を感じ取った。それはまた人間とは別種の生き物であるように感じ取れたのだ。だからこそ言える。この黄金は王ではあるが、その在り方はスカサハとは全く違ふと。しかし、それでいてこの黄金はまたその名を轟かす絶対者なのであろうと。

黄金は金色の鎧を纏い、同色の髪をオールバックに纏め、赤い目をしていた。見抜くようなその鋭い視線は此方を射抜き、そしてその過去をも見ているのではないかと思わせる程強い眼力をしている。この黄金はおそらく、その存在唯一のみで完成されている。きつと自分以外の誰かを必要とはしない。そんな強さを感じる。だからこそ——面白い。そう、面白い。圧倒的だ。この黄金はまさに圧倒的な存在であり、今の一方的な防戦で実力の片鱗を見る事が出来た。こんな存在が過去にこの世に存在して、今、会う事が出来るのだ。

楽しまなくてどうする。

「——この我を前にして悦に頬を綻ばせるとは中々狂っているな——が、良い。貴様はどうやら祭りというものを理解している様だ。然り、こういう物事は“楽しんで初めて意味を見いだせる”ものでし

かない。その点、貴様は愉悦を見いだせているから及第点はくれてやろう」

黄金の背後の空間が波打つ。赤い残像と共に世界が開く。そこから出現するのは射出される準備を完了した数々の宝具の姿だった。そう、宝具だ。この黄金は狂ったことに宝具をまるで弾丸のように射出しているのだ。湯水の様に宝具を射出するその光景はとてもだが正気では見る事は出来ない。英霊の象徴ともいえるものを使い捨てにしているのだから。

「じゃあ、黄金の王様。これから盛大にナイトフィーバーする予定なんだけど……一緒に遊んでくれない?」

黄金の向ける目は厳しく、だからこそ心地が良かった。敵意や殺意は存在しない。純粹な王としての覇気だけで他者をこの黄金は威圧している。そして、その表情はまるで玩具を見つけたかのように歪み始めた。いや、実際この黄金も求めていたのだろう、この祭りで楽しめる時を。

「ハ——面白い事を考える雑種だな。良いぞ、道化め。乗ってやる——死ななければな!」

直後、宝具の豪雨が発生する。ガトリングの様に発射された宝具は一つ一つが肉体を消し飛ばすだけの破壊力を保有している。それ故に命中すればそれだけで即死できる、そういう凄まじい攻撃を放たれていた。スカサハなら耐えられるのかもしれないが、人間であるこの身には不可能な事だ。故に迷う事無く縮地で移動を開始する。

大地を踏み、膝が曲がり、力の伝達が体を駆け巡り、そして一気に体が弾けた。

前へと、

——黄金へと向かって。

その縮地の一步で黄金の懐へと踏み込むことに成功した。その速度は人間であろうとも、サーヴァントであろうとも対応の出来る領域ではない。確実に殺せる、炎剣の射程範囲内に入り、そこで黄金の無意識へと踏み込みながら無明の間を縫って炎剣を振う。

反応のできない踏み込みから反応の出来ない太刀。技術における

極限の殺技、一撃必殺の流れが完全に成功し、

——炎剣が黄金の首を薙ぎ払う瞬間に霧散した。

「戯け悪童^{雑種}、我はともかく我の財は舐めるなよ」

炎その物が無効化されたのを理解した直後、再び縮地で一気に距離を取ろうとするが、着地した足場が揺らぎ、足元から宝具が出現してくる。

それを邪魔する様に大地が砕け、空間の揺らめきが砕けて隆起した大地の中に埋もれる。それによって出現するのが一呼吸遅れたこともあり、二歩目で黄金からのカウンターを完全に回避する事が完了する。

「さーて、と……」

スカサハの横に着地する。

「戦う役目を奪って悪いな。あと援護サンキュ」

「楽しんでるのだろう？　ならばそれで良からう。どうせ次は私の番だからな」

そうスカサハが答えた直後、宝具の爆撃が間を割くように降り注ぎ、大地を一気に砕いた。回避に成功しながら相手はかなりノリ気である事に笑みを深める。

さあ、

それでは、

聖杯戦争を始めよう——皆、一緒に、楽しく。

初日―2

「は、ははは——ハーツハツハツハツハ——!! 楽しいなあ、これえ!」

連続で炎剣を振りながら襲い掛かってくる宝具の雨を弾く。壊すのではなく、流れに乗せて弾くのだ。宝具の雨は直線的な動きで放たれ、完結している。そこに細かい指示はない。故にあとは技量でどうにかできる。神秘も魔力も劣ってはいるが、縮地で接近して斬った時に黄金の技量は感じ取れた。技量だけに関しては“並の英雄”クラスしかなかった。だからこの弾丸も、その程度の技術しか盛り込まれていない。だから己はこれを捌ける。握っている炎剣と宝具がぶつけ合う時に、握っている炎剣を捻る事で一つ目の円運動を、そして手首を動かす事で二つ目の円運動を生み出し、それによって直線的な動きの衝撃を、運動量を散らし、逸らしながらエネルギーを拡散させるのだ。故に、投擲による攻撃は通じない。少なくとも秒間二十連打クラスの射出量では、

掠りすらしない。

ただ、それは、

「本気じゃないな、黄金の王! そこが悔しいなあ!」

「ハ、我の本気が欲しいのか雑種? あまり付け上がるなよ。我が貴様の思惑に乗ってやってるのはそれが正しいか正しくないのかではなく、愉しめるか否か”の問題だからだ。故に雑種、我の本気を見た」というのなら死に物狂いで謳えよ……!」

「ははは、すげえわ」

笑いながら弾かれるように距離を一気に取る。そうやって後ろへと下がった瞬間入れ替わる様に残像を残すことなく、影を駆け抜ける様にスカサハが一気に前へと出た。影の国の女王がその国で磨き上げた技術、影の国の御業とも言うべきそれはスカサハの圧倒的技量を見せて付けていた。降り注ぐ宝具に掠る事もなく、迎撃の行動をとる事もなくすり抜ける様に、速度ではなく歩法による接近を行っていた。

宝具の雨が当たる様に見える直線、常に均一の速度で動いていたスカサハの体がわずかに揺れる様にブレ、そして宝具をすり抜ける様に前進する——自分が愛用する縮地とはまた別の技術だ。見切りとも言われるその技術は最小限の動きで攻撃を完全に回避する技術だが、影の国超絶技巧を織り交ぜたスカサハの動きはまるで影その物の様に動く。技術に対する理解がある自分だからこそ解る。動きのベースは自分の良く知っている見切りと同じだ。だけどそれに独自の技術を混ぜる事でまるで違う生物の様に進化させている。

——アレが俺の目指すべき姿だ。

それをスカサハは戦場で見せてくれている。

すり抜ける様に宝具を抜けた先でスカサハの周辺には赤い魔槍が複数浮かび上がっていた。それはスカサハが武器として使っている魔槍を複製した様に全く同じ姿をしており、宝具の雨を抜けた先で黄金へと向かって一瞬で射出されて行く。反応する様に自動で大地から、そして虚空から射出された宝具がぶつかり合って相殺し、魔槍と宝具を碎き合う。が、その時間すらもスカサハは接近の為に利用していた。両腕を組んで立つ黄金の前へとゆっくりと接近する様に動き、そして魔槍が振るわれた。

「甘いわけ」

虚空から鎖が射出された。魔槍の切っ先とぶつかったそれはまるで意志を持った大蛇の様にうねり、動いた。その鎖は弾かれた衝撃のままに姿を広げ、一瞬でスカサハを囲み、その全身を捉えようとして、すり抜ける様に影になってスカサハが回避し、すれ違いざまに二本の魔槍による連撃が黄金へと向かって繰り出される。それを射出された宝具と鎖がガードし、そして連撃の終わり際に黄金がまた輝ける斧を片手に、嵐を払う様にそれを振り下ろした。

「——成程」

スカサハが魔槍を車輪の様に回し、此方が宝具を弾くときにやったように、円運動に斧を絡めるように動く事で攻撃を受け流しながら弾き、そのまま滑る様な動きで黄金の前から去り、一瞬の低空跳躍で此方の横へと戻ってくる。合わせる様に生み出した炎剣を投擲して前

方の大地へと叩きつけ、砕けたアスファルトを黄金へと向けて弾きつつも舞い上げた埃に姿を隠して、一気に距離を稼ぐように更に跳躍した。

「大体絡繰りは読めてきたな」

「マジか、俺は一切解らないわ」

「とりあえず私なら殺せぬ事はないな——相性が良い」

「——神性か」

スカサハが返答のない肯定を行い、直後共に跳躍した。埃を分断する様に放たれた宝具の豪雨が襲い掛かってきたからだ。それを回避しながら更に逃げる様に距離を作り、炎剣を投擲して舞い上がるアスファルトを弾丸代わりにして弾幕を張る。同時に横でスカサハが虚空に陣を描いて魔弾を数百と一気に生み出し、それを宝具の弾幕へと叩きつける。影の国の女王、魔術においてもその追隨許さず、と言った所だが、

本来よりも効き目が大きい、という感覚がスカサハのパスを通じて伝わってくる。スカサハは「神殺しB」のスキルを保有している。これは単純に神性を、つまりは「神性」というスキルを保有した存在を殺す事を目的としたスキルであり、「神性」を保有するサーヴァントの能力を阻害、殺し易くするというスキルだ。スカサハの反応を見るに、この黄金の王は間違いなく神性を保有した存在——しかし聖杯戦争の都合上、完全な神霊を召喚する事は不可能だ。つまりは神とのハーフ、或いはクォーターの様な存在である事になる。

スカサハなら真名を看破しているのかもしれない。何せ、彼女の観察眼は一瞬で凡才と天才を触れずとも見抜く程だからだ。だけど、それを口にするだけの余裕が今はない。スカサハの神殺しを振り払う様に黄金の背後にある空間が更に広がる様に揺らめく。今まで開いていた砲門が一度に四十程ならば、それが一気に二倍の八十へと増えた。単純にして二倍の物量が襲い掛かってくる、という姿でもある。次の瞬間発生するであろう掃射に備え、構えた瞬間、黄金の動きが止まる。

「——時臣、興の何たるを理解しない奴め」

眼前、黄金と此方の間に黒い甲冑の戦士が出現した。完全に黒一色に染め上げられたその存在はまるで闇を纏うかのように黒をその体から発し、反射的にマスター権限によるステータスを読み取ろうとした此方の読みをあつさりとは無効化した。ただ、その身に纏う狂気は鎧で身を隠そうとも消し去ることはできない。この戦士は——いや、騎士は間違はなく狂気に囚われている。即ち狂戦士、

——バーサーカーの登場だった。

「新たなお客様のエントリーかなあ！」

「どうした狂犬？ 飼い主の怨念が染みついて見えるぞ」

「A a a a a a r r r r r r——!!」

狂戦士の咆哮が夜空に響き渡るのと同時に八十を超える砲門から宝具が射出された。すかさずバックステップと迎撃の動きで距離を取る此方とは対照的に、迷う事無く狂戦士は前進し、

そしてありえない事に射出された宝具を掴んだ。

「む、見事」

スカサハが感嘆の声を漏らすのと同時に狂戦士は片手に一つずつ掴んだ黄金の砲門から放たれた宝具を掴み、己の武装の様に振り、放たれた宝具の爆撃を迎撃しながら進んで行く。衝撃に耐えきれずに自壊する宝具をそのまま握りつぶしながら弾き上げた宝具を新たに掴み、それを赤黒く、己と同じ色に染め上げて奪取し、それで迎撃しながら前進する。

その光景に隠すことなく黄金が不愉快な表情を浮かべ、

そして迷う事無く「天を翔ける、太陽よ」を狂戦士の背中へと叩き込んだ。

それに対する狂戦士の反応は素早く、予知していたのではないかという俊敏さで反応を見せながら振り返る事無く体を飛ばし、黄金と此方から距離を離すように大きく跳躍、砕かれたアスファルトの上へと着地する。流石に乱戦中は奇襲警戒しているよなあ、と少しだけ残念に思いながら「天を翔ける、太陽よ」を抜いたまま、そのまま大きく後方へと跳躍し、

そして着地した。

戦場は常に動いている。

それこそ遠坂邸へと「天を翔ける、太陽よ」による爆撃を行ってか
らずっと、移動はやめていない。宝具を回避している間も、スカサハ
と連携を取る間も、常に動く事はやめていなかった。その目的を黄金
はたやすく見破った。それだけの見識があり、そして楽しむ心がある
から話に乗った。だから黄金は戦いながら追い込む様に攻撃し
ており、それにはこちらも乗った。そして他の誰も気づかないであ
ろう間に、戦場は動き続け、そして到達した。

——アインツベルンが拠点とする森の前に。

アインツベルンの森を背に、横へと跳躍する。それと同時に放たれ
た宝具が先ほどまでいた空間を突き抜け、アインツベルンの森を蹂躪
する様に薙ぎ払い、爆裂して行く。大地を蹴り、木片を足場にして跳
躍しながら「天を翔ける、太陽よ」を放てば、鏡の様な宝具が空間の
揺らめきから出現し、太陽の一矢、その進行方向をぐにやりと真横へ
と捻じ曲げ、まっすぐにアインツベルンの森へと叩き込む。

遠坂邸とは違い、アインツベルンの森に炎に対する耐性は存在しな
かったらしい。

捻じ曲げられた「天を翔ける、太陽よ」の矢がアインツベルンで盛
大に燃え上がり、一瞬でアインツベルンの森を大火に沈めて行く。本
来は存在した境界らしきものも、既に黄金の宝具による掃射によつて
破壊されている。

「あー、ごめんね！ 超ごめんね！ 巻き込む気はなかったんだよア
インツベルン！ 嘘だけどな！ だけど、ほら、良い夜じゃねえか、引
きこもってるのは退屈だろ？ 俺が100%の善意でパーティーに
招待しに来てやったんだから一緒にサッカーでもして遊ぼうぜアイ
ンツベルン！ ボールはお前の土地な！ ホームレス遠坂は無理
だったからホームレスアインツベルン目指そうぜ！」

「まさに悪童の名に相応しい所業だな、これは」

視線を戦場全体へと向ける。黄金の王は楽しそうな気配を全身か
ら発し、狂戦士の事で多少不機嫌だったのが緩和されている様に見え
る。狂戦士自体は今までの暴れっぷりが嘘かのように視線をアイン

ツベルン一点へと向けて動きを完全停止させている。

そして、アインツベルンからは魔力の胎動を感じる。

スカサハにも、狂戦士にも、そして黄金の王にも劣らないサーヴァントがこちらへと向かってきているのを感じる。

十秒、それだけの時間を新たな役者の登場の為に待った。

——そしてそれは期待通り果たされた。

森の奥に存在する城からここまでの道のりに存在する炎、それを暴風が押し潰すように消し飛ばし、そうやって開いた道を歩いてくる姿が見える。

「全く——このやり口は祖国を襲ってきた蛮族共を思い出させて少しイラっとしますね」

少女の様な声を響かせながら登場したのは青いウオードレスと軽甲冑姿の騎士だった。そのガントレットに包まれた両手には見えな
い何か握られているようであり、そこに大量の神秘が内包されているのが見えていた。炎を押し潰した風の余波がこちらへと届き、それが頬を撫でるのを感じつつも、改めて「天を翔ける、太陽よ」を握り直し、この一戦の為に持ち込んできた魔宝石を全て消費し、魔力の充填を行う。

「役者は足りんが……初日の夜を飾るには相応しいだけの数は揃ったか」

黄金の言葉を無言で肯定し——構えた。

黄金の背後は揺らめき、百を超える砲門が開いた。

青い騎士が透明な何かを構え、踏み込みの姿を見せる。

スカサハが二本の魔槍を握り、足の踏み込みで重力を殺した。

そして、狂戦士が月に吠えた。

「A a a a a r r r ■■■——!!」

狂喜の咆哮が夜の冬木に響き渡ると同時に、全てが動き出した。

初日―3

ノリが大きいのは事実だが――それでもこの展開は理想の、そして計画された展開であると言っても良い。

そもその発端は“遠坂とアインツベルンの磐石さ”から来る話だ。

聖杯戦争が間桐、遠坂、アインツベルンの三家を主導に開催されている為、どうあつても土地と情報と、そして事前準備のアドバンテージは向こう側に存在するのだ。魔術師の工房とは時間があればあるほど強固になって行くもので、聖杯戦争の開始期間、事前準備の期間はこの三家が一番早く反応できる。実際、アニメスフィア家が準備に利用できる期間は三、四か月程だったのに対し、聖杯戦争の御三家に關しては一年ほどの準備期間が存在したらしい。ともあれ、

この時点で三家はアドバンテージを得ている。

それに加えて先に召喚するクラスの確保、触媒と英霊の選別、英霊へのコミュニケーション、時間があればあるほど有利になるのが戦争というオペレーションの常識であり、英霊と共にある時間があつたこの三家は此方よりも遥かに有利である事に間違いはない。それに付け加え、特にアインツベルンと遠坂の堅牢さが“頭がおかしい”と評価できるレベルになっている。遠坂、アインツベルン、そして間桐はそれぞれ霊脈の上に拠点を保有しており、それを利用した防備を拠点に築いている。

今回の聖杯戦争、間違いなく間桐は捨てに來ている。それは間桐雁夜という未熟すぎるマスターの参戦を見れば良く分かる。おそらくだが間桐にはこの聖杯戦争はこれで完結しないという根拠があるのかもしれないが、間桐家は今回の戦いでは話にならない。問題なのは遠坂とアインツベルンが結託していることだ。共に御三家の一角であり、聖杯戦争の完結を目指す家。強力なサーヴァントを保有しながら同盟していなくても“終盤までお互いにノータッチ”なんて暗黙の了解があつてもおかしくはない。

つまり、アインツベルンか遠坂、そのどちらかを序盤の内に叩いて

おかないと終盤に入って遠坂とアインツベルン無双が始まる。

勝つのであれば、それは絶対に回避しなくてはならない。ほかの陣営と手を組むことが可能であればともかく、そう都合よく同盟のできる陣営というのはなかなか存在しない。

だから強引にも遠坂とアインツベルンをぶつける。計画の一段目は遠坂への攻撃。これで遠坂の陣地を破壊できるなら目的達成、そのまま逃亡すればいい。陣地を無くせば自然と新しい陣地を求めし、強制的にアインツベルンを筆頭とした強力な陣営の力をそぐ必要が出てくるから争いが生まれる。これに失敗した場合、遠坂のサーヴァントを牽引する様にアインツベルンまで連れて行き、そこでアインツベルンを交えた乱戦を起こす。

どうせ戦っていればハイエナしてくる奴は出てくる。そしてその予想通り、バーサーカーが引つかかった。そのままアインツベルンの結界を破壊する事が出来たし、

理想の展開に入ってきた。

ならば、やる事は決まっている。



——迷う事無く【天を翔ける、太陽よ】をアインツベルンの城へと向けて放つ。距離的に2キロ程ありそうだが、神秘に物理法則はあったもんじやない。ちゃんと照準して放てば命中する。だから迷う事無く英霊達から視線を外して魔力の込められた、太陽弓からの一矢を城へと向かって放った。それが最速で、そして戦いにおける最初の行動だった。

「アインツベルウウウン！ いいお家だね！ 素敵だな！ ローン何年で組んだ？ 双子館よりもでけーじやんか！ だからリフォームしてやるよ！ この更地化専用の匠がなあ！」

「くっ、蛮族め……！」

「ヒヤッホオ——！」

放たれた矢が閃光を生みながら一直線に城へと向かって飛翔する。

その前に立つ様に入った騎士が透明な得物を振り、矢を叩き落とそうとした瞬間、狂戦士が吠えながら黄金と此方へと背を向け、狂気のまに騎士へと襲い掛かる。矢の迎撃の為に振られる筈だった刃は一瞬で引き戻され、自衛の為に動いた。それは狂戦士から身を守るための動きだ。だがそれは反射的な行動でもあるが故、騎士の表情に浮かんだのは後悔だった。狂戦士からの攻撃を迎撃する為に、騎士はその得物を使った防衛が不可能になったからだ。

残された道はその身自体を盾にすることだが——それすら、狂戦士の圧倒的な筋力に押し込まれる形で体を動かしてしまった為、不可能に近い。故にそれは妨害される事もなく一瞬で飛翔し、アインツベルンの拠点に衝突しようとしたところで、

「——おいおい、それはちよつとないんじゃないかあ?」

雷鳴と共に阻まれた。投擲されたおそらくは武器と矢が空中で衝突し、矢が空中で爆発しながら弾けた。無数の焰となって夜を照らしながら散る中で、空には牛によって引かれる古代の戦車が見える。その操縦者は巨大な体躯を持つ赤毛の男であり、彼が邪魔をしたのだと即座に理解する。だがそこで新たな参加者のエントリーを加えた所で、動きは止まらない。

そのまま、素早く矢を連続で放つ。先ほどの熱量は存在しないも、それでも炎上させるには十分なほどの熱量が籠った矢を。それを戦車に乗ったサーヴァントは——おそらくはライダーは空に浮かぶその戦車と共に一瞬で加速し、矢に追いつくように戦車と牽引する牛で引きつづし、矢を完全に破壊して鳴り響く雷鳴で爆炎を飲み込んだ。

「祭りの状態は悪くはないがお前さん、ちつと打算を見せたな。この祭りの主催者ってなら最後まで馬鹿を演じ続けなきゃ駄目だろう。と、いう訳で余も参戦を果たしに来た! 我が名は征服王イスカンドル、此度の聖杯戦争においてはライダーのクラスを得て現界した!」
「ぐえ……本当は俺が先にアレやりたかったけど痛いところ突かれちゃったしまあ、名乗り上げ一番槍は譲ろう……」

ちよつとした悔しさを感じつつもライダー——イスカンドルの

堂々とした名乗り上げを聞いた。その背後でイスカンドルの背中を叩く小さい姿が見えるが……それがおそらくマスターなのだろう。宝具である戦車と、そしてサーヴァントであるイスカンドルと共にいるのは少々、やり辛い。対軍宝具クラスを持ち出さないとこれは狙えないと判断し、横へ跳躍する。直後、黄金の放った宝具が大地に突き刺さって爆散する。それを回避する様に縮地で姿の残像を残しながら右へ、左へと瞬間的に移動しながら距離を取る。その合間を縫う様に連続で投擲される赤い魔槍が宝具の射出ペースを崩すように放たれてくる。圧倒的物量の弾幕が超絶技巧によって最小の労力で回避へと繋がって行く。アインツベルンの森の方から、剣戟の音が響き渡り、バーサーカーの咆哮が耳に届く。全員、視線をイスカンドルへと奪われていたが、直後の行動へと直ぐに戻り、

「ああ、待て！　こら、待たんか！　人が話をする時は最後まで話を聞けと教わらなかつたのか貴様ら。ちなみに余は今から諸君らをスカウトする気満々なのだが……どうだ、うぬらが一体どういうめぐりあわせ、どういう思想を持って聖杯を求めめるのかは知らぬが——」

「——面白い事を語るな、雑種」

そう言つて黄金が砲門をイスカンドルへと向けた。黄金の王の表情には明確な殺意が宿っていた。

「元より我の物である聖杯を求めるばかりか、この我に軍門に下れと言うのか？　無知蒙昧ここに極まれり、と来たな！　良いぞ雑種。この悪童の相手をするのはなかなか愉快だったが……この我を除いて王を名乗る者は生かしておけん。死に物狂いで足掻けよ雑念……！」

「おお、つとお！　ここで新たなチャレンジャーに黄金の王様が口ツクオンツ！　ランサーさん、ここでコメントを一言！」

「城を落とすなら今の内だな」

「じゃあそういう事で！」

「ライダアアア！　お前え！　お前えええー！」

「いやあ、ちよつとだけ余の計算違いかなあ、つて。でもほら、試さないと確率などないだろ？」

「お前ええ——!!」

夜空で漫才が開始されるが、それに気にすることなく影の国の技と、そして修行を通して体得した技術を持って一瞬で加速し、全ての反応速度を超えて一瞬で移動する。一歩目、二歩目、

——そして三步目。

「——【約束された勝利の剣】アアアアアア！」

アインツベルンの森へと踏み込むのと同時に英雄の聖剣の名が響きながら輝き、極大の閃光が破壊となって森を、大地を、そしてすべてのサーヴァントを薙ぎ払う。それは破壊の本流であり、騎士の英霊——おそらくはアーサー王が放った閃光だった。ほぼすべてのサーヴァントが一堂に会するこの瞬間、この時を置いて、対軍、対城クラスの宝具を放たない理由は存在しなかった。

「令呪を持って強化する——スカサハ……！」

閃光が放たれるのと同時に肺の底から吐き出すように言葉を叫び、令呪を消費した。

「魔境——深淵の叡智ッ！」

【魔境の智慧】を令呪で強化し、本来の、オリジナルのスカサハへとその性能が一步だけ、近づく。それによって発生するスキルの選別、発動、技術への転換がノータイムで発生し、時間を置き去りにする様な加速を持ってスカサハが閃光の間合いから抜けた。縮地を利用して加速で同時にこちらも範囲外へと抜け、

そしてバーサーカー、黄金、イスカンダルが真正面からその範囲に入る。その結末を眺める事無く炎剣を生み出し、自分の体内に残存する魔力、魔宝石で捻り出した魔力の全てを炎剣へと宿し、それを【約束された勝利の剣】を振りぬいた直後のアーサー王へとまっすぐ、突き立てる様に向け、

「梵天よ、地を覆え」ア！」

古代インドの奥義、本来は対国クラスではあるが出力と未熟が原因で“対軍程度”でしか放てないそれをアーサー王の側面から迷う事無く叩き込む。炎剣は一瞬で変化する様に放たれ、巨大なビームの様な閃光となって大地を飲み込みながら一直線に放たれて行く。それ

はアーサー王らしき騎士に命中する直前に、振り向きざまに、

「——一撃……！」

二発目の【約束された勝利の剣】が【梵天よ、地を覆え】と正面から衝突する。英雄の時代の神秘、古代戦士達の奥義。それが正面から衝突し——リソースで敗北して此方が食われる。地を覆った破壊の炎は希望を象徴する光によって碎かれ、飲み込まれて行く。その進行方向には自分の姿がある。

が、

「終わったぞ」

直撃する前にスカサハが音もなく横に立ち、体を掴み、再び音も衝撃も殺して跳躍し、一撃目よりも魔力の損耗のせいで破壊が小さくなった【約束された勝利の剣】から逃れた。跳躍、否、超跳躍とも呼べる大跳躍をスカサハが見せ、【約束された勝利の剣】の光を飛び越える様にしながら、此方を眼下が望める様に抱えていてくれた。

「それでは皆さん、夜更かしは美容の天敵だから早めに寝る事を心がけよう！ おやすみなさい！ 俺は帰る！」

宣言し、戦場から逃れる様にアインツベルンの森からほど近いビルの上へと着地した直後、スカサハが虚空を握りつぶす様に拳を作った。

「およそ私に殺せぬものなどない——無論、土地も」

刻まれた原初のルーンの効果が発動する。神話の魔術は一瞬で大地を抉り、そして近代の魔術を食い散らしながらその毒を霊脈へと突き刺し、一瞬で殺した。その結果を眺めずに背中を戦場に向け、追撃が来る前にスカサハと共に全力で戦場から離脱する為に振り替える事もなく、走り、跳躍を始める。

怒声と怒りの気配を感じるが、気にするまでもない。“大戦果”だ。その結果を後で使い魔を放つたりして調査するとして、

「帰ったら祝杯だ！」

「戦い、飲み、抱き、そして再び戦場へ。うむ、大分らしくなってきたな。懐かしい」

笑い声を響かせながら確かな成果に笑みを零す。常に全力を出し

続ける事の出来る舞台、全力の己が要求され続ける舞台——聖杯戦争。それはなんて楽しいのだろうか。だがこれで自分の危険度は全ての陣営に理解された。同盟を改めて組んでくる所もあるだろうが、こちらもちちらで、見極めは終わった。

——次の目標は既に決まっていた。

だがその前に、魔力の使い過ぎで既に目の前が真っ暗だった。今夜、酒を飲むだけの余裕が残っているかどうか、それが今はどうしようもなく不安だった。

『——ちょっとこれはどういう事よ!! ツツコミどころが多すぎてどこから何を言えばいいか私は全く分からないんだけど!! 全く分からないうんだけど! どれからはじめればいいのかよー! もー!』

シャワーを浴び終わって体はさっぱりとし、眠気も完全に洗い流した。けどそれでも体全体のだるさは消えない。祝杯を上げてから気絶する様に眠ったが、それでは魔力の回復は不完全だったようで、昨日に戦闘の代償として体が不調に陥っていた。過去の経験からすれば一日魔力を使わずに過ごせばそれとかなると言った所だろう。が、やっぱりだるい。あまり体を動かしたい気分ではないし、スピーカーモードでダイニングのテーブルの上に置いた携帯端末が五月蠅くてしょうがない。それでも一日経過したのだからやはり、連絡は入れなくてはならないのだが。

『とりあえずまず最初に応えて——貴方はアニムス私ファイアたを裏切ったの?』

「それはNO、と断言させてもらう。聖杯戦争で勝利したら聖杯をお前に渡すつもりでいるし、最初から最後までずっとそのつもりだ。俺自身にやあ聖杯なんてもん、無用の長物だからな。くれるって言われたってリサイクル屋で売るぐらいの事しかできねえわ」

「聖杯の探索者たちが卒倒しそうな発言だな」

残念ながら万能の願望器という言葉に魅力は感じないのだ。なにせ、“都合が良すぎる”のだ。殺し合いはともかく、サーヴァントを全滅させれば願いが叶うよ! なんてどう信じろと言うのだ。魔術があーだこーだ言われても、労力に対して成果が見合わない。だからどうしても自分は聖杯の機能に対して信を置く事が出来ない。だから聖杯自体に興味はないのだ。

「よっついでしょつと」

椅子に座り、両足をテーブルの上に乗せて休みながらオルガマリーとの通信を続ける。

『じゃあはつきりと聞くけど、なんでレフを裏切ったの。時計塔の方

はカンカンよ』

「アイツ、最後の最後で裏切る気配あったからな。殺される前に確実に殺せるタイミングで始末した」

『もうちよつと交渉とか様子を見るとかなかったの!?!』

「いや、アレはマスターの判断で正しい」

こちらの代わりにスカサハが言葉が挟んできた。

「ああいう輩は隙を見せればそれに食らいついてくるような者だ。怪しい、そして敵であると理解したなら殺せる時に迷う事無く殺するのが最善だ。その機会を逃せば、二度と機会がやってこない可能性も存在するのだ。だったら殺せる時に殺さぬば、此方が殺される」

『うっ——』

流石のオルガマリも大英雄の言葉には言い返す事が出来なかった。そしてその言葉にはこちらも賛同する。“あの時殺せばよかった”というのももう二度と帰ってこない話なのだ。だとしたら事前に殺すしかない。そしてレフは怪しい上に目が濁っていた。殺す直前に理解した。アレは確実に此方を裏切るつもりでいた。同じ日におそらくは洗脳か何らかの手段で。まあ、もう殺してしまっただけから関係のない話なんだが。

『うー！ じゃあ次！ 初日からの襲撃！』

「遠坂とアインツベルンが鉄壁すぎるからどつかで削っておかないと終盤はいつて相手が磐石な状態で戦えちまう。最低限遠坂かアインツベルンのどちらか一方を削っておけば中盤戦で両陣がぶつかる必要が出てくる、勝つためにはな。という訳で霊地を一か所潰した。まあ、理想から言うくと遠坂を潰すのが一番だったんだけど——」

流石にあの黄金にはビビった。というか勝てるイメージが湧かなかった。幸い、スカサハに令呪を全部ぶち込めば首を取れる“かもしれない”というレベルで勝機がある。それを合わせ、マスターである時臣を優先的に狙えば何とか倒せるかもしれない……とは思いたい。現状、正面から絶対にぶつかってはいけない相手筆頭だ。アレが存在する限りは遠坂邸への攻撃は不可能だと考えた方が良さ。

何より【天を翔ける、太陽よ】が通じないので話にすらならない。

「次善案でアインツベルンの霊地潰しだ。幸運なことに二回も宝具をぶっ放してくれたおかげで霊地潰しが更に効率的になってくれている。今頃アインツベルンのマスター——衛宮切嗣は魔力不足で苦しんでいる筈だぜ。サーヴァントの維持の為に令呪を消費するか、或いは用意していた礼装を消費して魔力にするか。どちらにしろアインツベルン相手にはアドバンテージを稼ぐ事が出来た」

無論、それで留まる訳ではない。視線をスカサハへと向ければスカサハは視線の意図を理解し、そして頷く。

「昨夜の戦場にいたサーヴァントの真名はあの狂戦士を除いて大体だが看破する事が出来た。どれも大英雄の名に相応しい英霊ばかりだ。ふ、私を殺せるかどうか、気になる所だな」

『マスターがマスターならサーヴァントもサーヴァントね！ まあ、裏切っていないって言うなら解ったわよ。完全に信じられるわけじゃないけど、現状貴方達以外に賭ける事の出来る対象もないからバツクアッパは続けるわ。ただ次からは——』

「事前に話を入れておくよ。クライアント無視すぎて首を斬られるのも嫌だしな」

『よろしい。じゃあ、こっちはこっちでモニタリングしているから、今日はしっかり休んでおくのよ。じゃあね』

五月蠅かったオルガマリイの声が携帯端末から聞こえなくなる。通話が切れたという証拠だ。はあ、めんどくさい、と息を吐きながら深く椅子に座りこみ、体を休める。昨夜魔力を完全に放出しきってしまった為、本日に関してには完全に休息を取らないといけない。【天を翔ける、太陽よ】も問題がないかどうかチェックやメンテナンスを行わなくてはいけないし、戦った後の方が面倒なのはどんな時も一緒か、と思う。

それでも、まあ、成果はあった。

「感じからしてあの騎士の宝具を間違はなく黒甲冑と黄金が避ける余裕はなかった。アーチャーに関してには宝具の詳細が不明だからどうか解らないが、バーサーカーに関してはアレから逃げる為に間違はなく令呪を1画切らせる事が出来ただろ」

「ライダーに関しては運が良かったのか寸前に回避出来たようだがな」

昨夜の戦いで得られたものは真名、宝具、詳細、そして敵の霊地と令呪の消耗だ。それに対して此方は大量の魔宝石と本日の活動停止、がコストという所だろう。やはり此方から仕掛けて良かったと思う。後手に回る所だけはある得ない。陣営として相手の方が強力なのが解っているのだから、後手に回れば後手に回るほど不利になって行く。キヤスターでもない限りそれは聖杯戦争における絶対のルールだし、キヤスターにしても対魔力スキルの存在によって圧殺できる。

昨夜の戦場は良かった。一方的にこちらの思惑と強みを押し付ける事によって有利に展開を運ぶことのできる、そういう戦場だったからだ。【天を翔ける、太陽よ】や言葉を使う事でメインの意識をスカサハではなく此方へと向け、サポートに入らせる程度に留める。そして最後の最後に仕事を完遂させるのは意識が余り行っていないスカサハの方だ。流れとしては結構綺麗に出来たと思っている。ただ、唯一不安なのが、

——衛宮切嗣の存在だ。

たぶん、昨夜のやり方を覚えられた。少なくとも俺だったら覚えておく。そもそも見た感じ、防衛というスタイルには根本からして似合わないタイプの様にあの男は思える。アインツベルンの霊地という拠点があったからこそ防衛に回っていたが、その枷がなくなれば自由に動くようになるに決まっている。少なくとも俺だったら本来の武器で戦い始める。つまりは軽いフットワーク、近代兵器、狙撃そして爆撃。本来の領域で戦えるようになったわけだ。だからこそ一番最初のターゲットを遠坂にしたのだが。

それでも霊地は潰さなくてはならなかった。そうじゃなきや再び回復された魔力で【約束された勝利の剣】を食らう事になる。いや、正直対軍、対城規模の宝具を、しかも最上級ランクのそれを二連続で放ってくる時点でだいぶ恐ろしい。これからは連続で放つようなことは不可能だろうが、ゲリラ戦術でぶっ放されてくると思うと色々恐ろしい。それにしたって間違いなく切嗣、というよりはアインツベ

ルン全体が此方を恨んでいるだろうし。

「真名の方はどうだ？」

「アーチャーもバーサーカーも悪いが読み取れなかったが、あたりはつけた。セイバーは騎士王アーサー——なぜか女だったがな。そしてそれに凄まじい執着心を見せているバーサーカーはおそらく同じ時代でアーサー王に敵対していた存在なのだろう。蛮族と呼ばれる連中が英霊になるほどの武功があるようには思えん……おそらくはカムランの丘で敵対した誰かだろうな」

「ほんとスカサハ姐さんは物知りだな」

「人よりも長く生きていれば暇な時間がある。本を読んだり思考に没頭でもしなければ廃人になるものだ」

「退屈は心を殺す、なんてことを聞いた事があるが、文字通りスカサハにとって退屈は致命傷になりえる毒なのだろう。だからこそ彼女の鍛錬は今も終わっていないのだろう。体を動かし、本を読み、武術と学問に、神話に通ずる事で退屈から逃れている。廃人になって体を放置しても死ねるわけではない。スカサハの地獄には終わりが無いのだ。」

「ともあれ、アーチャーはおそらくこの世全ての財を集めたと言われる彼の英雄王だな。そうでなくては財を湯水の如く投げ捨てる戦いは出来まい」

「英雄王……英雄王……駄目だ、知らねえわ」

「古代バビロニアの王ギルガメッシュだ。調べておけ」

スカサハに解つたと返答しつつも、頭の中で今出ているサーヴァントの情報に関して整理する。

セイバー：騎士王アーサー

アーチャー：英雄王ギルガメッシュ

ランサー：影の国の女王スカサハ

ライダー：征服王イスカンダル

アサシン：ハサン（固定）

キャスター：詳細不明、脱落済み

バーサーカー：おそらくはアーサー王と同年代、対立側の戦士

「こう並べてみると一気に情報が出てきたな。アサシンがハサンで固定されているという事は全ての陣営が把握している事だからそれは完全に開示情報だとして、キャスターの脱落もすべての陣営が知っている。ライダーがイスカンドルだという事は本人が名乗ってるから周知の事実、セイバーがアーサー王なのも宝具から簡単に解つちまうな」

「加えて言えば昨夜、おぬしが丁寧に私の名を叫んだからランサー・スカサハという情報も出ているだろうな。バーサーカーの執着を見れば情報が隠蔽されていても大体どの時代かは予想する事も出来る。……こうなつてくると今回の戦い、真名の把握具合に関してのリードはアーチャーに関する事ぐらいだけだろう」

「そのアーチャー……ギルガメッシュ王だっけか？　に関しては遠坂陣営自体が把握しているだろうし、あちらさんはこつちと全く同じように真名を把握していると考えていいな。初日ででかい花火をぶっぱなしたのはいいが——」

——全体的に劣勢なのは間違いがないな、と判断する。

そもそも遠坂とインツベルンが磐石すぎて、そこを切り崩さない限りは、外様のマスターには勝利の可能性すら存在しないのだ。だから昨夜は本当に理想的な展開を運ぶ事が出来た。それはいいのだが、だが“それだけ”だとも言える。まだアーサーは潰せていない。ギルガメッシュに関してはもはやどうやって倒せばいいのかすら解らない。インツベルンの霊地を破壊して戦力の低下を発生させる事は出来たが、

それでもサーヴァントやマスターを討てた訳ではない。

まだ遠坂はほぼ無傷だ、あそこをどうにかして削らない限りは此方の勝機が見えない。インツベルンは殴り合える領域まで引きずり落とした、次は遠坂の出番だ。

——そこで思い出すのはギルガメッシュを相手に相性の良さを発揮していたバーサーカーの存在だ。

宝具のガトリングを前に、避けるどころか迎撃しながら接近する事が出来た、あの異常な技量と宝具の篡奪能力。もし、アレに【神殺し】

を加える事が出来れば——それはギルガメッシュをもつとも効率的に殺す事が出来る毒になるのではないのだろうか？

——悪くはないかもしれないな、これ。

そんな事を思つてコーヒーでも作るか、と椅子から体を立ち上げた時、

「——マスター、空から何かが来るぞ」

「え？」

スカサハのその声を確認する為にもダイニングの窓を開け、そして空へと視線を向けた。気づけば影が差し込んでおり、太陽の光を邪魔する様に鉄塊が空から落ちて来るのが見えていた。それに爆弾が積まれている様に見え、衝撃でも喰らえば激しく爆裂する様にも見える。どうか爆発させる意志しか感じない。

人はそれを、爆弾の積み込まれたセスナ飛行機と呼ぶ。

またの名を飛行機テロとも呼ぶ。

「やられたらやりかえすつてお前正気かよ衛宮切嗣ウ——！」



そのわずか数秒後、阻まれることもなく落下したセスナが双子館へと突っ込む様に衝突し、瞬間的にセットされていた爆弾が一斉に起爆、

朝の冬木に轟音と爆炎のモーニングコールを響かせた。

「よっしや！ 解った！ お前がやる気満々なのは理解した！ だつたら俺にも考えがあるぞ衛宮切嗣!!」

「まあ、その前にサルベージだな」

燃えていた。燃え散っていた。

元エーデルフェルトの双子館、それは原型をとどめないレベルで燃え散っていた。辺りには燃え盛る炎と屑鉄が、元々は存在した館の破片で溢れかえっている。見るも無残な姿をさらしているとしたか表現のできない、凄まじく酷い惨状が出来上がっている。まあ、自分もアインツベルン城や遠坂邸に「天を翔ける、太陽よ」を叩き込めれば同じような状況を生み出していたのだから、アリと言えばアリなのだろうが、一切感知が魔術的に行えない近代科学オンリーで攻めてくるとは、流石に予想外だった。

確かに爆薬を積んでテロをすれば効率的だが……昼間の内にやるか普通？ 一応こつちだつてテロをするのには夜まで待ったのだぞ。それなのに昼間から———と思つたが衛宮切嗣とは「そういう」男だったのを思い出す。まあ、切嗣じゃしようがないよなあ、という謎の納得をさせた所で、改めても朝から炎の中心に立つ自分の姿と、周りの光景を見る。

「ひっでえもんだわ……」

幸い「天を翔ける、太陽よ」は持ち歩いていたら喪失する事も破損する事もなかった。人的被害に関しては直前に「原初のルーン」と【死翔の槍】を抜いてくれたスカサハのおかげでどうにかなった。だがそれ以外は完全に全滅している、という感じだった。実際魔術師の工房に対する最も効率的な攻略方法は「爆撃」だ。空間を守護しているならその土地を粉碎してしまえばいいのだから、割かし理に叶ったやり方だ。

……ただセスナテロは予想外だったが。

ため息を吐きながら自分にかかった埃を払う。やられた分をやり返してきただけならこれ以上の追撃はないだろう、ルールとしても非

常に微妙なラインだし。ともあれ、軽く見た感じ、地上から上にある施設は全て粉碎されている様に見える。残ったのは地下室だが……地下室自体にはものをほとんどおいていない為、無事であっても意味はない。昨夜は完全勝利と言っても良い内容だったのに、

損害と合わせるとトントン、と言った所になった。いや、拠点を失った今、魔力的に追い込まれるのは此方だ。継戦能力が落ちていると認識した方が良いだろう。

とりあえず、直ぐ近くに転がっている冷蔵庫を蹴りころがし、その蓋を開ける。無事なビール缶が一つだけあったため、それを取り出しながらふたを閉め、冷蔵庫の上に座り、ビールを飲み始める。せっかく優雅な休日を過ごそうとしたのに、こんな風に始まってしまうと。衛宮切嗣、許すまじ。まあ、ビールは飲めたから超即死から即死まで殺意を下げよう。

「とりあえず、どうすつかなあ、これ」

「土地が死んだわけではないが、拠点としての運用はもう無理だろうな」

建物の方は完全に粉碎されている為、それは当たり前だが……となると新たな拠点を得る必要が出てくる。が、そこで色々と考えが頭を駆け巡る。安定した拠点と、これからの戦いと、そして現在の状況を真剣に考える。そう、あくまでも真面目に考えるのだ。一度ゆっくりと、時間をかけて真剣に考えるからこそ好き勝手に暴れる事が出来るのだ。そういう状況を作りたいのなら冷静になって、真剣に考えなくてはならない。だから知恵を振り絞って、そして自分の経験上の事を織り交ぜながら判断する。

「……スカサハ、こういう状況、お前だったらどうする?」

「一番相手の嫌がる行動を取るな」

完全ではない答えをスカサハは返してくる。それはある意味信頼の証とも言えるのかもしれない。それともこちらの思考を理解している、のかもしれない。そこらへん、自分はあまり自惚れたくはない。だから自分が正解を考えていると仮定し、自信を持って判断を下す。

「うし——拠点の確保は諦めよう」

「良いのか？ 安定した魔力の回復は得られないぞ。こういう拠点があるからこそ昨夜は後を考えずに宝具を引つ張り出したのだろう？」

スカサハの言う通りだ。昨夜はかなり魔力とリソースを消耗した。おかげで今日は休まないといけないレベルに。逆に言えば一日休めば魔力が回復できるという環境でもあった。それを放棄するという事は今までよりも遥かに慎重に戦う必要が出てくる。

【梵天よ、地を覆え】も滅多な状況では打てなくなるし、令呪そのものを魔力コストとして消費する事も考えなくてはならない。だけどそれ以上に、今、この状況で一番嫌がられることを考えると、

拠点を持たない方が圧倒的に便利で有利なのだ。

「マントラで生命力を活性させたらそれを燃焼させれば即座に魔力に変換する事は出来る。寿命縮めるやり方だから正直手を出したくないけど、どうしようもない状況じゃあこれでなんとかする。勝ったとして聖杯使えば寿命は元通りにできるし。それにスカサハ自体魔力の消耗を意識して抑えてくれるから無駄がないしな。だから魔力の事に關しては余裕のある時に生命力を魔力に変換し、有事の際は燃焼させて確保する。とりあえずはこれでいい」

そして、

「間違いなく切嗣が此方を潰そうと動いてくる筈だ。アレは間違いなく潜んで必殺を狙ってくるタイプ——一か所に留まってるど何時の間にか殺されているタイプだ。だからターゲットを固定出来ない様になるべく人混みの中で拠点を持たずに彷徨ってるのが良い。索敵や探知の類であればランサーのクラスのスカサハの方が圧倒的にセイバーよりも勝ってる。だからこちらが紛れている間に逆に尻尾を掴んで殺す」

潜むのではなく紛れる。ああいう裏社会系の人間は隠れている人間を見つけてるのは上手だが、一般人にカモフラージュして生活しているのは少々手間取る。だからその時間を利用して一気に此方で見つけ、接近し、殺す。あのセイバーとはまともにやり合いたくないし、切嗣を殺すのが合理的だ。

「セイバーの陣営はそれで良からうが……なら他の陣営はどうする」

残ったのはライダー、アーチャー、アサシン、そしてバーサーカーだ。

「バーサーカーはとりあえず気にするだけ無駄だ。マスター個人がアーチャーのマスターに執着している様にアーチャーがぼやいていんだけど、バーサーカー自身はセイバーに執着してた。あの暴れ具合は狂化でマスターをぶつちぎってる感じがあるし、間桐雁夜が未熟なマスターで魔術師だという事を考えるとたぶん放置してても勝手に脱落するだろ」

場合によっては此方から襲撃情報をリークして鉄砲玉に利用するのも悪くはない。

「アーチャーに関してはアレは絶対に動こうとはしないわ。アレ、基本的に雑事は部下に任せるってタイプの人間でたぶん昨夜のは初日って事で暴れたかっただけ。或いは逆鱗に触れば出てきてくれるだろうけど——まあ、無駄に刺激する必要はない。遠坂時臣もアインツベルンが優勝候補からドロップアウトしたかのように見える今、自分のポジションをキープしたいし積極的に動く事はないだろ」
「ではアサシンは」

アサシン——つまり言峰綺礼とハサンの陣営だ。

「正直ここが一番怖い。ただ昨日、あの場で奇襲を仕掛ける事はなかった。つまりはアサシン組は、或いはアサシンのマスターは“そういう事”なんだろうよ」

——アサシンを使ってマスターを殺害する気がない。

聖杯戦争だからサーヴァントのみを狙えば良い、というのは魔術師の発想だ。おそらくこの聖杯戦争で正しく戦闘を理解しているマスターは三人、自分と、切嗣と、そして綺礼だけになるだろう。そのうち俺は初日の夜にアドバンテージを得る為に動いた。そして切嗣はそのカウンターを迷いなく今、叩き込んできたばかりだ。そして綺礼、言峰綺礼は動いていない。あの乱戦でも、この状況でも動いていない。そろそろ殺しに来ないか？ とは思っただけで警戒したままだが奇襲が来ない。つまりマスターを殺害するつもりはなく、アサシンを戦闘運用する事さえ考えてないのかもしれない。これはおそらく

く綺礼の意志ではなく、

遠坂時臣側の考えなのかもしれない。サーヴァントを使い魔として考え、聖杯戦争を比べ合いと考える、魔術師らしい勘違い。

——トツキーさんマジ優雅。終盤までそのままずっとボケてて。やりやすいし邪魔なんで。

「ではライダーはどうする?」

「アレはなんか……こう、考えるだけ無駄な気がするからその場のノリで」

「まあ、そういうタイプではあるな」

ライダー、つまりはイスカンダルだがああいうむちゃくちゃなタイプは時々いるのだ。たとえば自分とか、臥藤門司とか、あとはアレだ、方向性は全く違うが「魔性菩薩」も非常に似たタイプかもしれない。ルールだとか知ったこっちゃやない、俺は俺のルールで生きるぜ、それを尊重してくれとは言わないけど俺はそれで生きてるからじゃあな、つていう奴だ。一言で表現すると「キチガイ」系だ。一番馴染みが深いから逆に安心感を覚えるともう末期だ。

「まあ、つまり衛宮切嗣に集中的に嫌がらせする事を考えるだけでいいって事だ。邪魔が入りそうな気配もあるけど——タイマンだ、タイマン。男の子としちゃあその言葉に憧れるもんがある。さらに言えば相手があのアースー王だつて言うならもつと燃えるもんがある。生きている間に伝説の一つや二つに挑戦したいとは思っていたけど、いい機会だし一戦、邪魔を入れられずにやりたいなあ……」

「……マスターとサーヴァントの立場を忘れるなよ」

「ああ、解ってるよ」

アースー王、騎士王とも謳われた人物。その剣技は昨夜多少だが確認する事が出来た。まさしく天才と呼ばれる様な存在の剣技だ。きつと、戦う事は自分の人生経験を更に綺麗に彩ってくれるに違いない。まあ、同じ得物で戦闘するならともかく、

炎剣じゃ【対魔力】に消されるし、

実体剣じゃたぶん斬り合っている間に【約束された勝利の剣】に折られる。

まともに斬りあう事が出来ないのだから非常に、非常に辛い。

——こうなったらスカサハのゲイ・ボルクでも貸してもらおうか。一応槍も全く問題のないレベルまで鍛えてあるし。いや、本当は剣が良いんだけどないなら槍でも我慢しなくてはならない。うん、仕方がないよな。

チラリ、と視線をスカサハへと向ければ、ゲイ・ボルクをくるくると回してから掴み、

「貸さんぞ」

「貸してよ」

「いいや、騎士王に挑戦するのは私が先だ。私を殺せるかどうかまずは試さなくてはな」

「スカサハ、お前なんだかんだで俺と同じ属性に染まり始めていないか」

簡単に言うとは混沌・中立な感じに。良く周りからアライメント“混沌・狂じゃねーの”と言われてたりするが、失礼ながら理性は完全に残っているから問題はない。たぶん。

そこまでふぎけた所でふう、と息を吐いて空っぽになつて飲み終わった空き缶を投げ捨てる。固定の拠点は持たないが、それでも寝床はどこか確保しなくてはならない——ともあれ、とりあえずは冬木の街、切嗣が狙いにくい様に人混みの中に紛れるべきだろう。貧乏暇なしと昔誰かが言った。まさにその通りだと思う。まだ拠点があつたところは余裕があつて、暇な時間もあつたのに、財産を失つてしまえばこうだ。

「はあ、とりあえず頭を切り替えていくか。アサシンの襲撃もセイバーの追撃も来ないし、この中で適当に使えるような物を拾ったらそのまま街へ行くぞー」

「拝承した。さつさと雑用を終わらせてしまおう。警邏の者が来ないとも限らないからな」

そういえば警察も活動していたっけな、と思い出しつつ、どうやって切嗣へのカウンターを叩き込むのか。それを考えながら作業を開始する。

非常に残念な事ながら、
瀬野正広という男はすさまじく負けず嫌いであり、やられっぱなし
は嫌なのである。

集められるものだけを集めて拠点だった双子館の残骸を離れ、冬木の街の人混みに紛れる。すぐ近くでは大爆発が発生したというのに冬木の市民は慌てる事もなく自分の日常に没頭している姿が見えた。決して危機感が低い訳ではない。純粹に“興味がない”だけの話だ。それが現代人という存在だ。直接的に自分にかかわってこない限りは極限まで無関心である生き物。

「俺はそれが少し悲しい」

「そうなのか？」

スカサハと肩を並べて街中を、今夜の寢床を求めて歩いている。その中でスカサハとこの話を続ける。

「ああ、現代人は隣人に対して極限まで無関心だって言っても良い。たとえば電車乗ろうとして誰かが不幸を嘆きながらプラットフォームから飛び降りて電車に轢かれ、自殺した。目前で起きた死の光景と発生を恐れ、悔やむものが普通だよな？——だが現代は違う。サラリーマンは間違いなく“仕事に遅れて迷惑だ”としか考えないし、学生は“学校に遅れる理由が出来る”と喜ぶばかりだ」

人間という生き物は己の興味に対してのみ情熱を向けるのが常だ。「だけどその興味の対象は年々狭まって行くんだ——解るか？ 豊かになってきているんだよ、文明が。スカサハが生きていた神話や英雄の時代ではお互いに助け合わないと生きて行く事が出来なかった。助け合う事で生活を生み出していたんだけどな、俺達の時代は違う。コンビニへと向かえばメシが食える、他人の顔を覚えなくても働けば金が入る。テレビ、電話、玩具、食事、雑誌、自分を満たす為の道具で日本は溢れている」

極論、

「他人に興味を持たなくても生きていけるんだよ。一回しか行かないコンビニ店員の顔を覚えるか？ 覚えないだろ？ それと同じだよ。近くにあった事件、自分が関わったのか？ 関わらないだろ。だから興味を示さないんだよ。ここにいる連中は全員、被害が直接自分の所

へと延びるその瞬間までは決して興味を見せるような姿勢すら示さないさ。例外なのは警察ぐらいだろうな。それにしたってただの事故として処理されるさ」

証拠が残らないし、それを覚えている人間は一人もないからだ。だから誰も興味を持たない。現代社会が生み出した新たな負の側面とも言える所だ。無関心の社会とも言えるこれは自分や切嗣を動かさずして、しやすくしてくれる環境だ。まあ、それはそれとして、

「多少悲しく思える話なんだけどな。二十年前の人達はもつと互いに関心を持つてたもんさ。海外も発展していないところへ行けば互いに助け合いながら暮らす人々はあるし……俺が一時滞在していた村なんて風邪をひいたら村人総出で見舞いに来るんだぜ？ 騒がしいけど飽きない、楽しい所だったわ——」

そこを出て時計塔へと向かったのは自分の意志だから文句は言わないが、それでも嘆かわしいとは思う。究極的に自分の事しか考えていない事に。まあ、自分も人の事を言えた義理ではないが、それでも“考える”事はしている。今、ここにいる人は特に考える事もなく社会の歯車として流されるように働いているのだろう。何かに興味を持つ事もなく。

「日本という国のシステムは良く出来ているよ。出来すぎなぐらいにな。もうちよつと混沌としていた方が好みだ」

まあ、愚痴つていてもしょうがない案件だ。それこそ聖杯でも使つてシステムを根幹から変えないと意味がない話だ。そして俺にはそんな事への興味はない。聖杯へと願いをくべる興味もない。だから愚痴を言う権利もない。ウダウダと文句を言えるやつとはつまり現状をどうにかしたい奴なのだろう。それでもなければ言う権利はない。黙つて歯車となるか、黙つて抗つてろ。自分が思うのはそれぐらいの事だ。

「……なんか無駄に愚痴つたな。やっぱ体調の悪さが影響してるのかねえ。ちよつと適当な店に入ってメシにしようぜメシ。嫌な気分の際は美味しいメシを食べれば良くなってくるもんだわ。……まあ、どこが美味しいメシとか俺、一切知らないんだけどな！」

「この男は……」

スカサハの呆れたような声に、召喚した当時よりも彼女とは打ち解けてきているという自覚がある。心の中を一切合財吐き出せるような仲ではないが、それでも主従関係なく背中を預ける事が出来る程度には信頼関係があると思っている。やはり、サーヴァントに必要なのは利用し、利用される関係ではなく、戦友とも呼べる信頼関係じゃないかなあ、と思う。信用できるからこそ全力で動けるという場面は結構あると思う。

適当なレストランでも見つけて入ろう。そう思っただけで視線を巡らせたところ、街中を歩く知っている姿を発見する。

まず見えたのは長身の偉丈夫だった。赤毛を持ち、その巨体に似合う服がないのかピチピチになったシャツとズボンを装着しており、満喫しているかの様に笑い声と笑顔を響かせる男だ。もう片方はそれと比べて小柄な少年の様に見え、その偉丈夫に振り回されているようにも見える。ここまで確認してだが、一瞬でライダー・イスカンドルとそのマスターである事は解った。マスターの名は確か——そう、ウェイバー、ウェイバー・ベルベットだった筈だ。確かそんな名前が調査報告書から送られてきたはずだ。

「……」

「ふむ——」

既に気配は殺してある、というよりは気配を殺して生きる事に慣れている。だからイスカンドルとウェイバーがこちらに気付いているようなことはない様だ。これはかなり運が良い。一番どうなるか解らない組が今、目の前で、のほほんと日本を満喫しながら歩いているのだ。だったら話は簡単だ。縮地で接近し、手刀の一撃で首の骨を砕けばそれで即死させられる。あの少年が此方級の達人には見えない。此方に気が付いていない事が何よりも証拠だ。

今なら殺せる。

殺気を漏らさない様に手刀を作りつつ、殺す為の踏み込みを行おうとしたところで、

肩に手がかかった——スカサハのものだ。

「待て」

「どうした、卑怯とかつて問題じゃないだろ」

「いや、この程度を卑怯とは言わん。ゲツシユを利用してハメ殺すようなことがあるれば卑怯とは言うが、これは戦争なのだからこの程度は卑怯だとは言わん。それよりも——今、殺そうとした瞬間未来が完全に消えた」

「えっ」

スカサハのその言葉に完全に動きを停止して、人混みに紛れながら観光するライダー組主従の姿を呆然と眺める。その姿を眺めてから視線をスカサハへと戻し、そして説明を要求する。何時も通り口元を隠す様にマフラーを巻いている彼女は此方の視線に応える様に頷いた。

「今、マスターの方を殺そうとしたらどう？　そしておそらくやろうとすれば成功するだろうな。そしてそれが成功した場合、“未来が消えてなくなる”ぞ。いや、正確に言えば“私が一切先の未来が見えなくなつた”と言うべきなのだろうが、結果としては同じだ。炎に包まれて消えて行く未来がもつと早い段階で完全に消滅した」

「えー……」

つまりどういうことだ。いや、こういう事か。

「“殺すと未来が消える”……そういう奴がいるって事？」

「おそらくはな」

「やってらんねー。聖杯戦争キャンセルして時計塔に帰ろうぜ！

あ、いや、時計塔に行つてもオルガマリーがいるか。あ、影の国つて亡命を許可してる？　受け入れてる？　俺、今すぐ予定全てキャンセルして影の国に行きたいんだけど」

「落ち着け」

スカサハに言われて息を吐いて心を落ち着けようとするが、それでも簡単には落ち着く事が出来ない。なぜならこの聖杯戦争の根本が今、大幅に狂つたのだ。聖杯戦争は七つの陣営が聖杯を求めて戦う戦争だ。サーヴァント、或いはマスターを倒してサーヴァントを聖杯にくべる事で儀式が進み、最終的に残つた一陣営が聖杯を手にする。こ

こまでは良いのだ。そしてこの裏側はマキリ、アインツベルン、遠坂が結託しており、聖杯を三陣営のどれかが入手できるように戦争前に調整してある、というのもまだ良い。ここはまだ崩せる範囲だ。手段を選ばなかったりすればまだ勝てるし聖杯も強奪できる。

そしてここで自分達だけが把握している情報を見よう。

この聖杯戦争は最終的に“未来の焼却へと繋がる”という結果が見えている。これはスカサハが予知した事であり、その余地はクー・フリーンの最後を的確に見抜くだけの力がある為、精度に関しては疑う必要もないと考えられる。その未来で解る事は俺が死んでおり、そして数多くのマスターが死んでおり、“聖杯を握るべき者ではない者が握った”という結末だったことだ。

世界の焼却は俺自身の死へと直結している為、俺が死なない様に聖杯戦争を勝ち抜けばこの未来は回避できる。

——そう思っていた。

だけど、今のスカサハの話を聞いて解った事がある。

「……いるんだ。”本来は生き残るべき奴”が」

「おそらくは、な。私が見た未来はその“生き残るべき者が死んだ場合の未来”、或いは“今現実として一番発生しやすい歪んだ未来”なのかもしれないな」

「確率の話はよしてくれ、算数を習っている時に小学校はやめたから数学すらやってないんだぞ、俺は。んな事よりもこれが考えている通りの事だったらちよつとシャレにならない事実が待ってる——」

この聖杯戦争の結末は最初から決まっていたのだ。それも参加者とかサーヴァントとか、そういう意思を無視して、どこかでそういうシナリオが描かれており、そして一つの結末へと到達する様に世界が出来上がっていた。だけどどこかで異物が混入したせいで、焼却の未来が濃厚な可能性として生まれてしまったのだ。そしてその未来を回避する為には、

死なせてはいけないマスターがいるのだろう。

たとえば、あの今にも簡単にくびり殺せそうなウェイバー・ベルベットとか。

もしこの“妄想”が現実だとしたら、真実だとしたら、この聖杯はとんでもない事になる。いや、だが座から英霊を召喚したり、信じてはいないが万能の願望器という超常存在がここにはあるのだ。魔術の世界の中でも伝説とも呼ばれるものがそろっているこの状況で、ありえないという言葉こそがありえないのかもしれない。だけど、だとしたら、

「——この聖杯戦争は“絶対に勝てない”ぞ……」

結末が決まっただけで、それから外れる選択肢を選ぶと焼却の未来をたどるとというのが事実なら、本来の結末を見つけ出して、それを迎える様に動かない限りは絶対に未来は、そして自分の命は助からない。そしてその迎えるべき結末の中でそもそも自分が生きていくかどうかすらも不明だ。もし、その“正しい結末”というものがあって、

その結末では俺が死んでいたら、
未来を迎えるには俺がまず消える必要がある。

「ん？ おお！ そこにいるのはランサーとそのマスターではないか！」

「え？ ええ!? 馬鹿！ おい、馬鹿！ なんで話しかけるんだよ！
アレってセイバーにしきりに蛮族とかエイリアンって呼ばれていた奴だぞ！ 早く逃げようよ！」

「いや、しかしな坊主、余はああいう面白い発想が出来て根性のあるやつは嫌いじゃないぞ？ こういう奴こそ是非臣下に加えるべきだと余は思うんだが」

「その前に僕らが殺されるよ——!!」

イスカンドルとウェイバーに何時の間にかこちらの事が見つかって接近されていたが、今はそれに構える状況じゃなかった。この情報を、この爆弾をどうするべきか、どうやって飲み込むべきか、そしてこれから自分はどうすればいいのか、その事に全力で頭を使っていた。

もし、

もしあの衛宮切嗣が最後まで生き延びるべき対象だったとしたら、この聖杯戦争中、ずっとあのスナイパーにテロられても反撃が出来

ないという地獄絵図が出来上がる。いや、手足ぐらゐは折ってもいいのだろうが、正直騎士王を殺せる気がしないので切嗣を殺さずに無力化とか無理臭いと思っっている。

——どうするよ、俺………！

おそらく人生で久方ぶりのガチ悩みだった。

「おお、これが中華料理とやらか！　ほほう、これはどれも美味しそうだなあ！」

「なんでこんなことになってるんだ……」

目の前、中華料理を広げたテーブルの反対側にはイスカンドルとウエイバーの姿が見える。話しかけられてから再び確認したが、やはりイスカンドルとウエイバー本人だった。そんな二人を加え、今、冬木の中華料理店内にいる。お金に関しては中身をアムスファイア家が持っているカードがある為、それで支払えばいいのだから完全にこちらの奢りに確定している。ただ、まあ、メンタルをリセットする意味ではちようどよかったのかもしれないと思いつつ、少し早いランチタイムをウエイバー陣営と共に過ごしていた。自分の前にもちやんと、豚の角煮と包子のセットが置いてあり、ちぎった包子で角煮を掴みつつ、口の中へと入れる。

「征服王的にはどうなんだよ、中華料理は」

ピチピチのシャツ姿のイスカンドルはそうさなあ、と声を漏らす。

「この味の濃さと油っぽさは嫌いじゃないな！　余がこの存在を知っていたらもうちよい侵略の幅を広げたかもしれない……まあ、此度の聖杯戦争、余が勝ち抜いたならば今度はチングスナンタラに負けぬように大陸を征服しなくてはならん。何事も男であれば大きくなくてはならん。やはり目指すならばナンバーワンよ」

「以上、征服面積ナンバーツ一の男の言葉」

「余、怒るぞ」

かかってこいやあ、と叫んだら店員に注意されたので大人しく座り直す。それにしてもやはり中華は美味しいよなあ、と思いつつながら昼飯を食べる。食事は大事だ――一回ミスると今度は何時食べられるか解ったもんじやないから。食べられるときに食べておかないと、次は三日後、なんてケースもある。忘れはしない、門司と一緒に迷った冬のツンドラ地帯。迷い込んだ夏の砂漠。落ち葉の中に紛れて奇襲してくる秋の森の死徒フェスティバル。やはり、食事は大事だ。

「とうか！　なんで！　和やかに食事しているんだよお！」

「坊主、誘われたものを断ったら器が知れるってものよ」

「罨って可能性を考えないのかこいつ……！」

「そこらへん、どうなんだ？」

真横でスカサハが担々麵を食べているのを眺めつつ、口へと角煮と包子を運び、それを食べながら返答する。

「ちよつと今めちやくちや萎えてて戦う気どころか影の国へ亡命する事すら真剣に考えてる所」

「昨夜はかなり暴れまわってたクセに、なんだ、調子でも悪いのか？」

まあ、調子が悪いと言ってしまったえば正しいのかもしれない。気づきたくもない事に気付いてしまった為に、それに縛られてしまった愚か者の末路というべきか——知らないからこそそのほんとしている目の前の二人の存在が少しだけ、恨めしい。溜息を吐きながら食べ進める。やはり食べ始めると空腹を感じていたのか、ドンドンと中華料理が喉を通って体を、空腹を満たして行く。嫌な気分の方は体を一気に動かすか、食べるかに限るな、と思いつつ、視線をイスカンドルとウェイバーへと向ける。

「そっぴやあおたくら、この聖杯戦争における行動の予定とかある？」

「いや、敵にそんな事を言う——」

「まあ、とりあえず昨夜はまともに話すことすら出来なかったし、余としては聖杯に集いし英傑たちを再び一堂に集め、そして英雄としての格を競いたいと思っている。見た所、あの金ぴかなのと青いのはどちらも格のある王だ。となればそこにいる影の国の女王も混ぜ、四人で聖杯にくべる願いを、その覇道を語り合うのもまた一つの戦いとなるだろうな」

「へえ……」

内容はかなりまともなものだ。少なくとも聖杯戦争全体に対する影響はないだろうが、それでも英霊の格を決めるこの話し合いは後々、英霊達の立場とメンタルに影響してきそうなものだが——ソレよりも英霊達が、各時代を代表する王たちが集まってその覇道を、時代に賭けてきた願いを語るといってはぜびとも聞きたいものがある

る。世の歴史家が聞けばおそらく血涙を流しながら羨む光景であるに違いない。うむ、きつと楽しい事であるに違いない。

が、スカサハは参加しないだろう。

「便宜上女王とは名乗っているが、もはや生も死もない私が行っても萎えるだけだろう。願うものも私の死だけだ。となれば格もないだろう」

「む、そうか。そう言われてしまうと余としても無理強いは出来ないな。残念だ。まあ、その代わり今を存分に楽しませてもらうがな！

ところでおい、その戦士よ。お前さんはどうなんだ？」

そうだなあ、と答える。

「これから起きる殺人事件の結果だけを理解してしまった、自由に動ける、ただし邪魔をすれば俺が第一被害者になる？　って感じかなあ」

「ようは解らん」

「俺もどうしようか解ってないんだな、これが」

イスカandalに答える様に苦笑を漏らすと、ウェイバーが少しだけビクビクしていた様子を収め、不思議なものを見るような視線をこちらへと向けてくる。恐れ視線が少々、此方から減っているのが見えているのは、

「お前……なんか迷ってる……のか？」

「はは……どうなんだろうな」

——責任というものが苦手なのだ。

魔術師の家に生まれ、捨てられた自分は、責任とは無縁の人生を送ってきた。義務教育もなんてなかったし、自分で自分を生かさないと生きていけない、そういう人生だった。究極的に言えば自己責任のみの人生——他人や周りの事なんて構う事のない、そんな人生をずっと過ごしてきた。だから、結構めんどくさいと思う。他人の人生を背負うって。だって結局、未来とかの話ってそういうものではないか。いや、考えるのが面倒って話をしている訳ではない。

「知ってしまったえば回避出来ない事ってあるじゃん？　それを前にしてくると色々萎えてくる、って話だ。趣味で小説を書いている人間が商

業用に乗り換えた瞬間、一気に筆が振るわなくなるのと同じ現象だよ。やらなきゃいけない。やるべきだ。その使命感と責任感が逆に邪魔になって好きに、今まで通り動く事が出来なくなるんだよ。好きだったことが途端色あせて面倒になってくる……まあ、それが今の状態だ」

聖杯戦争、これをものすごく楽しみにしていた。だけどふたを開けてみればどうだ。パンドラの箱を開けたような気分だった。いつそ、無知なままであればどれだけ楽だったんだろうか——まあ、嘆いたところでどうしようもないのはわかつているが、それでも酒を飲みたい気分だった。店員を片手で呼び、老酒を頼む。昼間から飲むのは不衛生、なんて言ってられる心境じゃなかった。

「なあ」

ウェイバーは問う様に言葉を放ってきた。

「なんか良く分からないけど、お前のそれって本当にやらなきゃいけない事なのか？」

「……………」

勿論と答えようとしたところで、言葉に詰まる。そりゃあ未来の事を考えれば間違いなくそうするべきなのだろう。元々は死ぬことを回避する為に始めた行動だったし——ここまで面倒なら自分でやる必要があるのか、これ。改めてそう自分に問い直し、店員が持ってきた老酒を一気に飲み干し、空っぽになったボトルを返却する。ああ、そっか、そんなに難しくない内容だったよなあ、と思い直す。このインド系蛮族戦士瀬野正広は責任とは無縁の人生を送ってきた。

——なら別にこの先もそれでいいじゃねえか。

門司の様に好き勝手生きるし。体を鍛えるし。好き勝手旅をするし。この聖杯戦争だってその一環でしかない。それでいい、それだけでいいのだ——つまりはそういう事だ。

「うむ、案外お前は教育者が向いているのかもしれないな、小僧」
「えっ」

「いや、間違いなく教育者としての破格の才能を持っているだろう。鍛えればそれこそ英雄すら育て上げる事の出来る人材に」

にして整地する予定だから、今日はアインツベルン向かう予定があるなら全力で避けるべし、だ。英霊格付けチエックするなら別の会場を探せよな」

「えー、でも余はあそこの庭園で飲むことが出来ればものすごく美味しいと思うんだが」

「イスカンドル君は凄い我がままだなあ」

「お前ら二人頭おかしいよ」

ウェイバーの冷静なツツコミが突き刺さるが、それをガン無視してイスカンドルとじゃんけんをする。お互い、動体視力が良い為に完全に手を出す前に三回ぐらい出すものを切り替えてフェイントを入れないと勝負にならない訳だが、あいこが六回続いたところでイスカンドルの幸運に敗北、アインツベルン城を舞台に英霊格付けチエックが優先されることになった。

「と、いう訳で余の勝利だ。今夜は余が酒を持参してアインツベルン城へと向かう」

「じゃあ俺言峰綺礼の拠点を今から爆撃するわ。聖堂教会？ 冬木教会？ かたっぱしから消し飛ばせばいいよな」

「おい、お前のマスターだろ！ こいつ止めろよ！ いや、笑ってないで止めろよ!!」

無駄だ、スカサハは基本的にヒントしか出さない女で、答えや正解を出そうとはしない。だから一度決めた選択に対して反対を出す事もない——それが個人の意思の尊重であり、そして決定なのだから。こう言つてはアレだが、神話の話として聞くスカサハは凄まじくヤンデレ属性が強かったので色々と恐ろしい部分があったのだが、そんな様子はなんてことはない、

自分にも他人にもスパルタな教育者で、支配者なのだ。

まあ、それはともあれ、

「うっし、ウェイバー。今回の事は本当に恩に着る。これから二日間、お前達に対しては一切殴りかからないから安心して眠ってくれ」

「それって初期の計画だと殴りかかってきたって意味だよな」

ツツコミのキレが良いのは遠慮がなくなってきたてきているだろうか。

“結末”において生き残るべき人物の一人、それがウエイバーなんだ。だつたらきつと、俺が死ななければまた会う事も出来るだろう。

カードを取り出して支払いを済ませ、席から立ち上がる。イスカンドルが中華をまだ堪能するつもりだから店から出る予定はないらしい。此方に負けず劣らずマイペースだなあ、と思いつつ、

「うっし、牛乳買いに行くぞスカサハ！」

「それは何故？」

「出撃ついたら牛乳なんだよ」

非常に晴れ晴れとした気分だった。さつきまでの鬱蒼としていた気分が嘘みたいだ。間違いない、今なら冬木を笑顔のまま火の海に沈められそうな気分だった。

「さあ、出撃だスカサハ！ 拠点がなくなつたから基本はテロだ。次にもテロだ。誤報を流して更にテロだ！ 未来とか知つたこつちやねえって精神で行くぞ！」

「ふふ、拝承した」

さあ——聖杯戦争二日目の開幕だ。

「ふいー、テロの前はワクワクするなあ」

「それはお主だけだろうよ」

ウェイバーの一件があり、未来に対する配慮が完全にZEROと
なってしまった今、気分は清々しいものになっていた。既に空には月
が、夜空が浮かび上がっていた。夜、それはすなわち聖杯戦争の時間
だった。仮の拠点として使っていたラブホテルは既に引き払ってお
り、今夜の闘争の為の準備は全て完了していた。というのも、昼間の
時間が全て準備に利用できるといふのなら割と余裕があるという事
だ。魔術を使えばごまかす事も可能だし。ともあれ、そうやって昼間
の間に気配を殺しつつ作業は全て終わらせ、

双子館跡地にほどなく近い、冬木教会へとやってきていた。聖堂教
会の管理地であるここは中立の立場である場所でありながら、聖堂教
会のマスターである言峰綺礼の拠点でもある。ちよくちよくと遠坂
邸へと向かっていたのは開戦前から知っていた事だが、昨晚から一度
も遠坂邸へと向かう所は少なくともスカサハの放った使い魔には観
測されていない。

なぜか？

簡単な話、昨晚の襲撃によって同盟関係が暴露する可能性が出てき
たからだ。

一緒に行動したくても行動出来ない。それが連中の状況だ。

——だから叩く。

「ふう、ま、こんなもんだろ」

冬木教会の前で立ち、足を止める。教会としてはそれなりの規模を
持つこの教会、きつと更地にしたら文句を言われるんだけど楽しいだ
ろうなあ、と思う。まあ、配慮ZEROになっち待ったのだ、そこら
辺はぜひともウェイバー君を恨んでほしい。此方は討伐されないギ
リギリのラインで聖杯戦争という行動そのものを楽しむつもりなの
だから。だから口を開け、大きく息を吸い込み、

「こおーとおーみいーねえーくうーん！ あっそびーまげほお、ぐ

ふお、ごほつごほつ……ちよつと噎せた」

大丈夫か、と言わんばかりの視線がスカサハから此方へと向けられる。が、大丈夫だ、と片手でサムズアップを向けながらポケットの中に突っ込んでおいたのど飴を取り出し、それを舐めながら視線を冬木教会の方へと向ける。やがて、その扉を開けて出てくるのは黒いカソック姿の一人の神父だった。首から十字架のペンダントをぶら下げる聖職者の姿こそが言峰綺礼というマスターであり、元代行者の姿だった。

「よう、言峰。良い夜だと思わないか？　ん？　良い夜と悪い夜の違いが判らないか？　なら教えてやろう——ヒヤッハーできそうなのが良い夜で、出来なさそうなのが悪い夜だ。オーケイ？」

「昨夜を思い出して返答するが、貴様は狂人の類のようだな」

「同類、同輩に言われたくはない」

綺礼の切り返しに対して即座に言葉を返す。それに対して綺礼は軽く眉を顰めながら言葉を返してくる。

「どういう事だ」

「ん？　なんかおかしなことを言ったか？　俺を狂人だと言ったら間違いないお前も同類や同輩の類だろ？　別に人間観察が優れている訳じゃないけど俺にだって解るぜ、お前俺達狂人と同じ種別のもんだろ。経歴とかは無視してこうやって会った感覚で話をさせて貰うとお前、ものすごく合うぜ？」

「戯言を漏らすな。私と貴様が同種の存在であるか？　信仰の道を歩き、そして生きるこの私ができるような訳はなからう」

「まあ、そう思うんならそれでいいんだけどさ。こういうのって早めに目を覚まして自覚した方が今後の人生が楽しくなるもんだしなあ……まあいいか。とりあえずアレよ、聖杯戦争しようぜ聖杯戦争。これだけありやあアサシンを配置するのには十分すぎる時間だったろうし、聖杯戦争しようぜ」

左腰から昼間の間にアニメスフィア家から送ってもらった霊剣を抜く。西洋のロングソードを聖別したものであり、霊体そのものへとダメージを通す事の出来る汎用礼装だ。これであれば人体だけでは

なく、【対魔力】等を無視して英霊へとダメージを与える事も出来る。つまり、これ一本でアサシンと綺礼の両者に対応できるという訳だ。まあ、耐久度はそこまで高くはないからまともに攻撃を受け止めれば折れるのだが。そこら辺は技量次第だ。

そして、右手でロングソードを握りつつ、左手をポケットの中に入れて、一つの機械を取り出す。それを見て綺礼が軽く、警戒する様な姿を見せるが、それで大体正確だと思う。

「えー、今朝のセスナテロを経験して思ったんだけど、純粋な科学によるテロって魔術じゃ察知し辛いし、霊的なものが一切ないから魔術じゃ防御し辛いんだよな。質量の塊で勝負している訳だし。というわけでタンクローリーに爆薬を詰め込んでセットしました。俺がこのボタンを押せば止める事の出来ない暴走タンクローリーが一瞬で遠坂邸へと向かって爆走するよ——ここまで言えば何が良いのかはわかるよな……!」

笑顔で綺礼にそう言うと、綺礼が言葉を吐き出した。

「人質のつもりか」

「いやテロ予告。ポチつとな」

「!?」

迷う事無く押した。今頃、暴走タンクローリーが全速力で遠坂邸へと向かって突進しているだろう。迎撃しても爆発するから足掻いても被害は出る。やはりテロは良い、確実に敵を削る攻撃手段となってくる。無言になって呆然とする言峰綺礼の姿を眺め、そしてサムズアップを向ける。

「これから君の師匠、そして同盟相手が理不尽なテロ行為に合う訳だけど今どんな気持ち!? なあ! どんな気持ちよ! あ、今すぐアサシン送れば助けられるかもしれないね! それはそれとして全力で今から戦うつもりなんだけどな!」

「ぐ——アサシン、行けッ!」
「殺った」

綺礼が言葉を放った瞬間、一瞬だけだが意識がこちら側から割かれた。故に縮地で一瞬で綺礼の背後へと移動するのと同時に、揺らいだ

意識、此方へと向けている警戒心の隙間を、死角を、反応が絶対になできない領域へと滑り込む様に動き、斬撃を通す。呼吸と呼吸の合間に発生する無意識に斬撃を通す。鋼の剣は綺礼に意識される事もなく背後からその首を跳ね飛ばす為に軌跡を描き、

——その間に入り込んだ黒衣の首に突き刺さる事によって刹那の妨害が発生する。

呼吸が終わる前に首をそのまま跳ね飛ばし、二撃目を素早く発生させるが、それに綺礼が反応する。踏み込みからの発勁で衝撃を生み出して体を後ろへと押し込もうとする。が、黒衣の消えゆく体を蹴りあげて発勁に対する壁にし、呼吸を混ぜた斬鉄の一撃を素早く、動体を両断する様に繰り出す。

キーン、と金属が弾かれる様な音に黒衣の胴体を両断したところで刃は弾かれ、続いて発生する掌底による一撃を素早く縮地によって五歩後ろへと移動する事によって回避する。着地し、前方へと視線を向ければ黒衣の姿が魔力になって溶けて消えるのが見える。つまりは今のがサーヴァントだった様だが、

——サーヴァントの気配そのものはまだ存在する。それも一体や二体ではなく、複数。

「……厄介なサーヴァントを持っている様だなあ、おい。それにかなり功夫の練られてる硬気功じゃねえか。お前、本当に真つ当な神父かよ」

「私の様な敬虔な信徒を捕まえておいてそのような物言いは些か失礼ではないか？ が……これで形成逆転だな」

「ちなみに間に合うとは言ったな……アレは嘘だ。即座に突っ込んで爆発するからどうあがいてもホームレス遠坂の爆誕だああ——!!!」

「貴様は……!」

何を迷っているかはわからないがどこかで誰かがこいつの心を揺さぶったおかげで、綺礼の意識の隙間へと凄まじく入りやすくなっている。殺し易い。そう判断するが、それを遮る様に更に黒衣の姿が出現する。今度は三体。そしてどれも同じような仮面を装着している。つまり、その正体は——アサシンだ。おそらくは宝具か何かで分身

しているのだろうか、斬り殺した感触は非常に脆かった。

それこそスカサハやギルガメッシュとは比べ物にならないレベルで。こいつは戦闘力に秀でていない——アサシンである事を考えれば当たり前だが、

「ちと勿体ねえな。俺の所に来れば活躍させてやったんだけどなあ——」

左手のスイッチを握りつぶす様に破壊しながら炎剣を生み出し、同時に投擲された三十を超えるスローイングナイフを両手の剣を振う事で完全に弾き飛ばす。瞬間、踏み込んでくる綺礼の掌底が抉りこんでくるように叩き込まれてくる。それに対し、息を呑んだ。

「——Au^{オー}m^ム」

マントラで肉体を、そして生命力を活性化させながら急速燃焼させ、寿命を魔力へと変換させる。そのまま炎剣を攻撃を放った綺礼へと向かって振り下ろす。攻撃後の反動を受け流しながら滑る様にその姿が横へとズレるが、おかげで射線が開く。

「梵^{ブラフ}天^{マース}よ、地を覆え」——！」

綺礼が射線から退いた事によって冬木教会までの射線が完全にクリアになり、遠慮なく対軍級の奥義が放たれる。解放された炎剣はそのまま閃光となって一直線に大地を破壊しながら突き進み、綺礼の拠点へと向かって直進し、

「令呪を持って命ずる、防げアサシン！」

綺礼が迷う事無くアサシンに対して肉壁になる事を命じた。それに反応する様に令呪の魔力が弾け、アサシンの存在が対軍奥義の前へと召喚される。その数は軽く十を超え、そして一瞬で飲み込まれながら消滅し、威力を減衰させる。それでも殺しきれなかった威力は教会へと衝突し、僅かにそれを揺るがしながら霊的防御によって防がれた。その結果を見るまでもなく綺礼が追撃を叩き込んでくる。二撃目の掌底が内臓を破壊する為に放たれる。その手に握られている黒鍵はおそらくそのまま体を破壊する為のものだろうか、

それに反応する様に呼吸を整え、放たれる掌底を切り払った。

切る、払う、突く。八極のみ習う全ての武術に通ずる奥義とも言え

る動き。“突き”に分類される掌底を切り払いによって流せば、即座に次の攻撃がやってくる。基本は極めれば極める程、次への動作が繋がり、隙がなくなり、そして連携してくる。達人とも言える領域——たとえば神槍なんて呼ばれるものであれば、3動作、この三つをつなげるだけで相手を確実に殺せるだろう。

だが綺礼はその領域にはなく、純粋な技量で言えば此方の方が上回っている。誰かは知らないが、精神的なものが重石の様に引っかかっている。故に切り払いと突きから次への動作——それは此方の方が早い。刃を連動させる動きで戻せば、そのまま綺礼の首へと刃がかかり——回避される。その動作から指の動きのみで黒鍵が放たれてくる。

それをスウエーを合わせたバックステップで回避し、マントラの呼吸で生命力を活性化、燃焼、寿命という概念を魔力へと変換させる。

「これで終わりだ——」

炎剣を生み出し、魔力の高ぶりを生み出した此方の行動を察して綺礼が踏み込んでくる。加速する様な動きにこちらも対応する様に素早く綺礼の攻撃を切り払った瞬間、

——土地から魔力が喪失する。

反応するのと同時に強撃を綺礼へと仕掛ける。手が痺れる程に強く放たれた斬撃は綺礼の握った黒鍵と弾き合いながら互いを押し返す様に距離を生み、そして着地させる。そのまま更に縮地で後ろへと飛び、綺礼が一呼吸間では踏み込めない距離にまで後退する。

「持久戦しようぜ!! ただし霊地なしでな!!」

「貴様——」

「これで二か所目……いやあ、魔力が回復し辛いのもって辛いよな?」

お前も寿命を魔力に変換させて維持するのをお勧めするよ。それじゃあホームレストッキー君に俺からよろしく言っておいてくれ!! あばよ!」

横へと瞬間的に出現したスカサハが綺礼が踏み込む前にこちらの体を背後から抱き、そのまま跳躍して夜の闇へと共に消えて行く。

これでまた一つ、冬木における霊地を破壊した。これで綺礼は遠坂

時臣と合流しなくてはならなくなる。一つは被害状況の確認の為に。もう一つは同盟、続行の為に。遠坂陣営と言峰陣営が同盟しているの目に見える形で確認すれば、間桐陣営は間違いなく言峰陣営にも噛みつくし、アインツベルンでも数と、そして超級の英霊に加えて偵察と暗殺まで兼ね備えた同盟陣営を目に見える形で警戒しなくてはならなくなる。

「いやあ、盛り上がってきたねえ」

聖杯戦争はまだまだ始まったばかりだ——つまり、まだまだ盛り上がる。

今夜の様に。

「――おえ」

朝起きてまず感じたものは吐き気であり、洗面所へと駆け込んでみれば見慣れた赤い色が口の中から吐き出されるのが見えた。一通り血を吐き出し終わったところで、昨晚喰らった綺礼の一撃を思い出し、あの時に内臓をやられていたか、と思い出す。生命力を一気に燃焼し過ぎたのかそのせいである一撃の通りが良かったのかもしれない。今朝は回復に集中するとして、無茶な活動は控えるようにするか、と決める。とりあえずマントラを魔術と織り交ぜて、肉体と生命の活性化にリソースを割く。回復するのが優先だ。最悪、魔力がなくても戦う事は出来るし、【魔境の智慧】で【単独行動】を取得すればそれでスカサハは魔力を極力消費せずに活動できるのだ。

「ふう、俺も修行が足りないなあ」

「その歳でそれだけ出来るのなら十分英雄の素質はあると思うがな」洗面所から出た所、ソファに寛ぐ様にスカサハが深く座り込んでいる。今、宿として利用しているのは冬木の市内にあるラブホテルの一つだ。昨日使っていた場所とは勿論違う。同じ場所を毎日利用していれば間違いなく切嗣に見つかるからだ。だから毎回違うラブホテルを利用してはいるのだが、そういう雰囲気には一切ならない。まあ、当たり前の話だがスカサハにはクー・フリーンという想い人がいるのだし。

俺も、そこまで性欲に関しては興味はない。そこら辺は全部戦闘の方へ流れ込んでる。

ベッドの端へと座り込む様に腰を下ろし、ポケットの中からくしゃやくしゃになった煙草の箱を取り出し、煙草を加え、マッチで火をつける。煙が軽く沁みるのだが、それを無視して煙草で体に負荷をかける。こういうものはそうやって楽しむんだと個人的には考えている。煙を口から吐き出しながら視線を改めてスカサハへと向けなおす。

「俺が英雄、ねえ」

「実力だけを見るならばな。人格に関しては言う必要はないだろう」

「俺がキチガイだつてのは俺が一番理解しているけど……俺、そこまで強いなあ？」

首を傾げながらそう思う。自分が所謂強者の部類である事は疑問なく認めている。自己評価を間違える事は死に繋がるのだから、そこから辺は絶対に間違えたりはしない。だから死徒だつて殺せるし、魔術師も殺した。怪異や妖怪みたいなのも斬ったし、修行や人生経験の為に色々と戦つたのは憶えている。だけど今の自分を見て、英雄級か？

と考えると首を傾げざるを得ない。何より勝てない相手がこの聖杯戦争は多すぎる。

「それは純粹に生まれた時代の不幸だ。お主が或いは私と同じ時代に生まれていれば、生きていけば間違いなく我らが得た神秘をその身に宿す事が出来ただろうな。惜しむべきはこの時代は神秘が死に行くばかりの事よ。この時代は小さなことを成し遂げるだけで世界を救える。そのせいで試練がない。神秘がない。英雄を生み出す為の土台が存在しない」

スカサハはため息を吐く。

「その歳でそれだけの技量を積み重ねるだけの才があるのだ、ちゃんとした時代に生まれていけば魔力なぞなくとも神秘を持って奥義を奇跡へと昇華できていたかもしれないな。或いは手持ちの武装が宝具へと昇格していたかもしれない。その肉体そのものが時代の神秘を持って英雄に相応しい成長を遂げたかもしれない。ただそれが今の時代では不可能な事を考える……ため息が出るばかりだな。我が国

——影の国へと来ればお主もまた、真の英雄へとその身を昇華させることが可能かもしれない」

「つまり研鑽が足りない、と」

「なぜそのような結論になる」

「時代だとか試練が足りないとかを言い訳に英雄級にはなれないって言い訳するのはかつこ悪いだろ？」

笑顔でそう言つてのけると、スカサハが驚いたような表情を浮かべ、そこから笑みを作る様な気配を見せる。それを見ていて思った。あのマスク、邪魔だな、と。

「令呪を持って命ずる、顔を隠すのは少なくとも俺の前ではやめろ。美人が台無しだろ」

「——」
直後、スカサハが私服時はいつも口元を隠す様に巻いているマフラーが滑り落ちる様に口元から外れ、その顔が完全に露わになる。突然の事にスカサハは今度こそ完全に動きを停止して驚いたような表情を浮かべ、そして信じられないものを見るような目で此方へと言葉を放ってくる。

「——お主はアレか、馬鹿か。阿呆の類か。いや、そうだったな」
「おうよ、俺は馬鹿だぜ。馬鹿だけど聖杯戦争で勝つつもりでいるぜ」
「せっかく顔を隠していたというのに……全く、お主と来たら」

それぐらいいいじゃねえか、とは思う。まあ、令呪使ったのは流石にやり過ぎかもしれないけど、令呪なんてものは次はマスターから強奪すればいいのだから、それでチャラにする。今度マスターを殺す時は花火にならないように気を付けないといけない。花火にしてしまうと令呪の回収が不可能になってしまう。それは回避したい。そう思ったところで、内臓に軽い痛みを感じる。やはり昨晚の綺札戦での一撃が響いているらしい。

「元代行者とは聞いていたけど、天才の類だとは思いましなかったわ。功夫の練りが凄まじすぎて刃弾かれるのとか初めての経験だわ」
「アレか、他の大陸には随分と面白い技があるのだな。そういえばお主の使っているいくつかの技も面白いものがあつたが——あの歩法と太刀は見事だな。完成されている技だと表現しても良い。私から見ても満点をくれてやれるぞ」
「おお、そりゃあ高評価で有難いな。しかし……縮地と無明の太刀の事か」

あー、と唸りながら天井を見つめ、数秒後、視線を再びスカサハの方へと戻す。

「アレな、やり方と名前だけは教わったのを何年間も繰り返してきたな、ここ数年やっと完成して来た技術だよ。とはいえ、極めるとか完全に完成とかいうと限界を決めちゃうから絶対に完成つては言わな

いんだけどさ」

「ほう、師がいたのか」

いや、それはどうなんだろうとは思う。あの人は、

「偶然、仕事でバツティングしちやっただけの人だったよ。なんだっけなあ、名前。黄理……だっけか？ まあ、まだ日本にいた頃の話なんだけどなあ、これが——」

まだ日本にいた頃、がむしやらに生きて、お金を集め、出来る事を探していた頃。必死に生きていたばかりの頃、お金を得る為だったら大体何でもやるといふ勢いだった。その中には殺人が紛れ込んでおり、それに知らない間に自分は参加してしまい、そしてそこで出会ったのがあの男、黄理だった。その一回しか会う事はなかったが、それでもその時の男の動きは芸術的の一言に尽きた。太鼓の撥の様な武器で綺麗に人間を解体するのだ、それを芸術的だと言わずにいったい何を芸術的だと表現するのだろうか。

「まあ、そんなわけで当時クソガキだった俺を黄理のオッサンは見て何を思ったのか知らないけど、自分の技術とは違うが相性が良いから頑張ってみろ、って理論だけ投げつけてきたんだよ。なんだこいつ……って思ったりもしたけど、結局誰かから教えてもらうって経験自体割と初めてでなあ。それからずっと。形になるまで毎日練習して、形になってもひたすら続けてるわ。懐かしいなあ……オッサン、今もどっかで元気にやってるかねえ……俺もオッサンに近い年齢になってきたけど」

そう、思えばもう既に二十も後半に入り始めている年齢なのだ。この聖杯戦争のマスターを見ても年上のジャンルに入るぐらいは歳をとってしまった。恋愛とか良く分からないから助けた女に恋愛されてもすまないかと断って、剣を振うだけの人生だった。今頃彼はどうしているのだろうか？ 自分の様に修羅道を今も進んでいるのだろうか。或いは妻を娶り、子供を作り、静かに暮らしているのだろうか。あの時黄理は自分を暗殺者だと言っていたし、ああいう稼業は長く続かないものだと思っている。だからきつと、今は引退してどこかで静かに暮らしているだろうとは思う。

まあ、無事を祈るだけならタダなのだ。

と、そういえば技術とか武術の話だったなあ、と思い出す。

「まあ、知つての通り俺のこの動きは“暗殺者に近い”もんだよ。元が暗殺者のオツサンに教えて貰ったもんだしな。縮地は体重と負荷を殺す瞬間加速歩法、対応が不可能なレベルで加速する特殊な歩法だ。俺様のメインウェポンその一だが——まあ、調べてみるとこれ、魔術を使わないのは完全に不完全らしいな」

「そうなのか？」

らしい、と言うのは自分が本物を見たことがないからだ。

「本物の縮地とは術なんだってよ。神仙が場所から場所へと転移する為の術、或いは移動手段を縮地法と呼んだらしく、それを真似て、人間が行えるように技術の粋に落とされたのが俺の縮地法。つまりは模倣された劣化ではあるんだが——まあ、見る側からも使う側からしてもほとんど瞬間移動とはかわんねえーな、これ。便利だし奇襲と離脱によく使つてるわ」

動きの基本だと言っても良い。縮地法を利用した場合、動きに瞬間的な超加速が発生し、一瞬でトップスピードに乗る。その為、この状態から突きを繰り出したりした場合、凄まじい威力が乗ったりするのだ。まあ、己の場合はここから斬撃へと——つまりは無明の太刀へと繋げている。この無明の太刀は縮地法よりももつとめんどくさい内容だった。

「無明の太刀は人間が持つ意識の死角である無意識、反射的に動いてしまう反射行動、そして呼吸と呼吸の間に発生する間のどれかを理解する事で成立する。人間は誰しも意識していながら意識していない所が、そして絶対に反応できない瞬間が脳と人体の都合で発生するらしい。それをまず頭に叩き込んで、相手を観察しながらその瞬間を見極めて、斬るつて技術。人体構造上知覚できないという領域に踏み込んでいるからカウンターを放つ事が出来ない一撃必殺の対人魔剣つて感じかねえ」

成程、とスカサハが声を零す。

「合理と感性の両方が要求されるのか」

「正解。感覚だけでやってる奴には無理だし、頭でっかちにも無理。感覚に身を委ねながらそれを冷静に思考する事が出来なきや駄目、つて奴。正直覚えるのに超苦労したぞ、これ」

二十年だ。二十年近くずっと鍛錬を続けて、漸く必殺と言える領域に持っていけるようになったのだ。技術を二つ完成させるのに二十年もかかった——これから先、新しいものを学ぶとして、いったいどれだけの年月が必要となってくるのだろうか。【梵天よ、地を覆え】だって完全に放てている訳じゃない。それを完全な形で放てるようには魔力が不足している為、さらなる研鑽が必要となってくる。

スカサハの言う通り、神秘で溢れている時代であればそんな魔力関係なく神秘の法則によって成し遂げられたのかもしれない。だけど今、現実としてそれは不可能なのだ。

——やっぱり、

「……出来るならお前と同じ時代に生まれたかったよ。今の時代は俺にはちよつと狭すぎる」

実戦経験を求める為に敵を求めれば、戦えるのは死徒やキメラ、魔術師ばかりだ。英雄と戦う事が出来ない。ドラゴンやワイバーンの様な幻想種だって戦う事が出来ない。神秘が死んでゆくこの時代で、強さを求めようとしてもまともに強さを求める事が出来ない。人も神話の時代に比べてはるかに弱くなっている。だから限界を追求しようとしても、時代がそれを許さない。

なんて悲しい時代なのだろう。戦士に優しくない。

全世界が幻想で溢れて滅びそうになるようなイベントはないのだろうか。こう、七つの時代で聖杯戦争とか。

ないか。あるわけないか。

「ならば戦いが終わった後で我が国へ来ると良い。生ある限り武を極め続ける事が出来る。我が国に新たな戦士が来るのも数千年以来だ。本体の私も試練を乗り越えて到達できる者であれば盛大に歓迎しよう」

「そうだなあ……影の国で修行も悪くはなさそうだなあ——」

まあ、日本で修行するよりは間違いなく成果があるとは思う。が、その前にはまずこの聖杯戦争を生き抜かないといけない。そして生き抜くためには、この戦いで勝利しないといけない。敵はどれも強力だが、勝てない訳ではない。ならば、全力で殺しに行くだけだ。

アインツベルンの霊地は機能不全に陥っているおかげでアインツベルンは拠点の防衛力と回復力を失った。

同様の結果を言峰陣営も受けており、遠坂陣営との共生的な合流が発生した。

遠坂陣営も屋敷が吹き飛んだ——こればかりは酒盛りをイスカンドルがアインツベルン城で行っていたのが幸いだった。おかげでギルガメツシュに阻まれることなく破壊に成功した。その為、遠坂陣営はセーフハウス、或いは霊地のないサブ拠点へと移動させられた。

間桐はまだノータッチだが間桐雁夜の自滅は見えている。

そしてライダーは——その場のノリでどうにかしよう。

聖杯戦争三日目。

「今脱落しているのは俺が殺したレフとキャスターだけだ。——三日目で一人ボツチも寂しそうだし、煉獄に仲間を追加してあげねえとな」

「やる気だな」

「当然」

ならば、とスカサハが言う。

「私にも存分に槍を振う機会をくれるのだろうか？ そろそろ私も命を削る様な戦いを味わいたいのだが」

スカサハの好戦的な視線に苦笑を零し、答える。

「——今夜、マスターを一人殺して、歩みを進めよう」

冬の寒さは嫌いではない。

その寒さは生きている実感でもあるのだから。

「――うっし、メシでも食いに行きながら場所を変えるか」

駄弁って休憩をとっているだけだが、十分長い時間をラブホテルで過ごした。そろそろ場所を変えた方が良さだろうという判断でチエックアウトを行い、ラブホテルを出る。ラブホテルを出て感じる太陽の光の眩しさを感じつつ、そのまま迷う事無く大通りの方へと向かう。極力人混みに紛れて生活している方が標的の場合、殺すのが面倒になってくる。特に聖杯戦争というルールが存在している今、昼間の間、一般人を巻き込むようには行動できない。そして夜の間は襲撃の為に超高速で移動すればいいのだ。

第一今は防衛力の減った遠坂時臣がいる。そちらを狙うので忙しいだろう。寧ろ殺してくれ、そろそろ参加者を減らして戦いやすくしたいのだから。まあ、雁夜が勝手に襲い掛かっているだろうとは思いう。その為の拠点テロだ。弱ったところをハイエナするのは戦術の基本だ。その機会を他の陣営に与えているのだから感謝されるべきだろう。

うん、そうだな。

一人で納得しておきつつ、大通りの流れに紛れ込んで歩く。スカサハの姿はすぐ横にある。基本的にサーヴァントは情報流出を回避する為にも霊体化しているものだが、ダメージを受けていないし、そもそも見破られたり情報を得られてもクー・フリーン呼んで来いともいうこの英霊は、隠すだけ意味がない存在だ。

なおクー・フリーンが来たら来たで喜ぶ。無論俺を含めて。新たな殺戮者のエントリーである。

「たまにゃあジャンクフードでも食べるか」

「というちツップスの類か」

「嫌そうな表情を浮かべるなよ……時計塔のクソメシとは違うから」

スカサハにそう言いながら適当のバーガーチェーン店を見繕う。

最近是比较的健康に良い物ばかり食べていたが、やはり偶にはジャンクフードを食べたくなる時がある。あの無駄に油っぽく、そして味がでたらめな感覚、中毒的ではないが、調子が悪いときだからこそ食べたくない、そういう魅力がある様な気がする。今日の昼間はずっと静養の予定なのだ、調査とか準備も捨てて大人しくしていよう。そう思いながら見つけたバーガー店に入ろうとした瞬間、

——直観的に危機を感じた。

意識的に後ろへと一步、滑る様に下がった瞬間、何かが高速度で飛来し、入ろうと思っていたバーガー店の扉を突き抜けながら粉碎し、突き刺さった。突き刺さった飛来物はそのまま店内を蹂躞する様に悲鳴を生み出し、血肉をばら撒きながら地獄絵図を作り上げた。その光景を見て、真つ先に襲撃者から切嗣の線を消す。こんなスマートではないやり方はあの男のスタイルではない。となると、それ以外の襲撃者になるが、

切嗣以外で昼間の襲撃者は思い至らない。

「——さて、と——」

息を吐いた瞬間に悲鳴と人混みが一齐にパニックに陥る。だがそれと同時に黒い影が一瞬で屋上から跳躍する様に落ち、ビルの壁面を蹴りながら一気に接近してくる。その姿に対して左手をポケットの中に忍ばせつつ、右手を背面、そこに背負っている大きなカバンに当てる。昼間の間は「天を翔ける、太陽よ」もロングソードも全部しまっている。だから動きはそのまま、

「ぽんぽん痛いから頼んだぞ、スカサハ」

「良かろう。力を示すが良い、このスカサハに——！」

落ちてくる黒い影に一瞬でスカサハが跳躍する様に接近し、ビルの壁へと槍を突き刺し、それを起点に体を回転させるように力を込めて、影を路地裏へと蹴り飛ばし、自らも其方へと向かって跳躍した。その姿を追いかける様に歩いて、魔宝石を取り出し、砕きながら路地裏の中へと入れば、そこには影と対峙するスカサハの姿が見える。赤い二本の魔槍を握るスカサハの正面に相對するのは文字通り“影”の存在だった。

ただシルエットを見る限り、その服装はアジア系——いや、武器が薙刀である事を確認すると日系の存在に見える。完全に影で構成されたその存在は薙刀を真っ直ぐ、突きつける様にスカサハへと向け、それに対応する様にスカサハが魔槍の構えを深くする。

「こやつ——格は落ちるがサーヴァントの類だな」
「マジか」

言葉を放った瞬間、影の英霊が踏み込んだ、反応する様に前進したスカサハが薙刀の振り下ろしを魔槍で受け流し——その手から魔槍は消失し、影の英霊の脇に、奪われたように出現した。影の英霊は弾かれた薙刀から片手のみを解放しながら魔槍を掴み、それをスカサハへと向けて突き刺してくる。

「ふむ、武器を奪う能力か。まあ、悪くはない——」

魔槍と魔槍がぶつかり合い、スカサハの両手から完全に武器が消失——そして真紅の魔槍が再び、スカサハの手の中に出現する。そこからスカサハと影の英霊が奪った魔槍がぶつかり合い、同時に破壊される。同質、或いは同じ武器を力いっぱい叩きつければ当然の結果として発生する武器破壊。だがそれに異にすることなくスカサハも、影の英霊も戦闘を続行する。スカサハは新たに魔槍を取り出し、そして影の英霊はそれを奪いながら破壊し、両者共に一歩も動くことなくその場で連続で攻撃を続行する。

が、

「——私が相手では相性が悪かったな」

二十八合目、スカサハと影の英霊が保有する槍が砕けた瞬間、虚空から出現した真紅の魔槍が降り注ぐ様に影の英霊を串刺しにし、それでもなお動こうとするその膝を物理的に破壊し、立つのを不可能にしてから、スカサハ自身が新たに握った槍でその頭を貫き、潰す。

「ふむ、出来る事ならば本来の格を相手にしたかった相手ではあるな。武器を奪い、そして奪い取った武器を初見ながら十全に振う技量、見事。しかし、己を偽っている限りはどうあがいても私には届かん。次があるなら偽らざる己としてかかって来い」

スカサハの言葉と共に影で構成された英霊らしき者は霧散し、まる

で最初からそこに存在しなかったかのように一切の痕跡を残す事もなく消滅した。しまった、記録を残せていないな、と少しだけ嘆く。この白昼堂々発生した魔術のテロがもし、己だけの事だったら責任を押し付けられてしまうかもしれない。それは、ものすごくヤバイ、というか納得いかない。

「うっし、予定変更だ。人が集まる前にソツコで逃げるぞ」
「拝承した」

スカサハと共に気配を殺しながら跳躍し、一気に近くの建造物の屋根の上へと着地し、そこから全力で逃亡を開始する。今のところ判明しているサーヴァントは全てだ。全てのサーヴァントの真名がスカサハによつて看破されている。そして自分が把握している限り、こんな行動、こんな効果を生み出せるような英霊は一人として存在しない。だから、この疑問に答えてくれそうな場所へと、迷う事無く向かう。

——冬木教会だ。



「いやあ、昨夜ぶりだなあ。まさかテロった場所に戻ってくることになるとは思ってもいなかっただわ」

「だけどそれ以上に、

「流石に俺、更地にまではしてねえんだけど」

冬木教会が更地になっていた。いや、正確に言えば崩壊していた。目の前に広がっている冬木教会はアサシンのマスターである言峰綺礼の拠点だったのだが、昨晚見事に霊地破壊に成功したために拠点としての全ての価値を失い、脱落したマスターが逃げ込む為の場所となっていた。それが今、目の前で完全に破壊された姿を見せている。その光景に軽く頭を掻き、移動している間は霊体化させていたスカサハを出現させる。

「ちと調べる、警戒頼む」

「任された」

スカサハが警戒を担当してくれる中で教会へと近づき、そしてその様子を確認する。

それはまるで圧倒的な暴力によって叩き潰された光景だった。いや、個人の暴力と言うよりは数の暴力かもしれない。襲撃の跡には数が見える。少なくともここに襲撃に来ていた犯人は一人や二人という規模ではなく、十や二十と言う規模だった。……或いは多脚の人外生物。少なくともその線が強い。何せ、足跡が人間の形をしていないのだから。痕跡を消せるほど脳はない、と判断したところで崩れた教会の中へと進んでゆく。

その中に見えたのは言峰璃正の死体だった。その姿を確認してあちやあ、と声を漏らし、直ぐに腕を確認する——しかし、そこに存在するはずの預託令呪どころか腕その物がなかった。つまりは令呪そのものが全部持っていかれた——それが目的だったのかもしれない。単純に令呪はサーヴァントへの絶対行使権限ではなく、強化や触媒にも使えるミニ聖杯とも呼べるものだ。とオルガマリイは言っていた、それを全部丸ごと奪われたとなると、少々笑えない話になってくる。

携帯端末を取り出し、即座にメッセージをオルガマリイへと入れる。

「璃正が死んで令呪は丸ごと奪われましたよ、つと。ま、こんなもんだろ。これ以上調査しても何かが出てくるとは思えないし——」

魔術的な襲撃なのだから痕跡が残る訳もない。これが普通のテロリストだつたら薬莢とかが残っているのだが、そんな訳はない。だからとりあえず、この璃正殺害犯を影の英霊だと判断しておく。

……誰が放った？

間違いなく今の参加者達でこんな手段を取る様な馬鹿はいない。態々敵を作って死にたがるようなやり方だ——やつても勝てるという確証が存在しない限りは。だけど現在の聖杯戦争の参加者、そこまで自信を持って勝機を持てる奴は存在しない。俺でさえタイミングを間違えれば無駄に敵を作って圧殺されるだけだ。その為、同盟が成立しない様にヘイトの調整を行っているのだ。だからこの局面、誰

が動けるかと考えると、

「——レフか？ いや、でもしつかりと斬り殺した感触あるしな
な」

レフ・ライノール・フラウロスは確実に殺した。心臓を貫いたうえで肉体を破壊し、浄化と焼却を同時に行った。たとえ再生、蘇生能力持ちだったとしても蘇る事が出来ない様に消滅させたのだから、あの男は確実に死んでいる。少なくともアレで殺せなかったのなら他に殺す手段が解らない。そしてレフのキャスターに関してても詳細は不明だったが、スカサハが確実に霊核を破壊していると言っている。彼女の実力を疑う必要はない、自分よりも上なのだから。

「……考えていても解らねえな、これ」

まだ自分が知らないもう一人のプレイヤーが存在するのかもしれない。或いは八人目のマスターなんてものが存在するのかもしれない、と考えるおくべきなのかもしれない。

そしてそんな裏技が出来るような相手は実に限られている。

「今夜は襲撃をキャンセルして、シャドウサーヴァントに関する調査に回るか——」

犯人はある程度絞り込む事が出来る。まだ妄想の領域でしかないが、八人目のマスターが存在し、それがいきなり参戦する事が出来る状況があるのだとすれば、それは間違いなく聖杯戦争というシステムそのものの根本に関わっている存在であるに違いない。だからまず第一の容疑者はアインツベルン。聖杯そのものを作り出し、提供している陣営だが——切嗣が姿を隠している間はどうしようもない。アインツベルン城を調べる程度の手段しかないが、こうなると確実に切嗣と生きるか死ぬかの戦いになる。だからここは後回しだ。

第二容疑者の時臣は個人的な感想からするとありえないになる。この男は魔術師らしい魔術師だが、昼間に堂々とテロを許す程外道には染まってはいない筈だ。何より土地の管理者でありながら一般人に被害を出すようなことは許さないだろう。そこらへんを考えると切嗣も可能性は低くなってくる。となると、容疑者は一つに収束する。

間桐家。

いや、間桐雁夜にそんな事をするだけの余裕はないし、頭もない。未熟者の魔術師ではバーサーカーに食われない様に何とか生き残ろうとするだけで限界だろう。だとしたら、彼をこんな事態へと追い込んだ、そんな存在がいるはずだ。

五百年の妄執を抱いても未だに生き続ける化け物が。

「一番の容疑者は間桐臓硯——いや、マキリ・ゾオルケンか。オルガマリーから話半分で聞いておいてよかったな……アイツ、プライドむつちや高いけど優秀だわ」

もう一度、プランを修正する必要があるなあ、とぼやきながらあごを掻く。軽い髭の感触に、そろそろ剃るべきかと判断し、璃正の死体へと背を向ける。元々今日は時臣を殺して、一番厄介なギルガメッシュを聖杯戦争から脱落させる予定だったが、こうなつてくると話は別だ。

「スカサハ！ 行くぞ」

「ほう、どこへだ」

声と共に横へと出現するスカサハへと答える。

「間桐だ——五百年の妄執が今回の件に絡んでるかどうか、爆撃してから考えるぞ！」

「おいおい、俺より前に襲撃を仕掛けたキチガイはどこだよ」

視線を住宅の屋根の上から真っ直ぐと間桐邸へと向ける。距離がかなり離れてはいるが、「魔境の智慧】を通して【千里眼】をスカサハから受け取っている。そのおかげで距離があってもまるですぐそばにあるかのように見える。ただ【天を翔ける、太陽よ】を握りながら確認するその場所は、既に襲撃を受けたかのようなぼろさを見せ、それでいて異様な静けさを放っていた。ここまで距離が離れると人の気配を確認する事は流石に出来ない。だから息を呑み、マントラの呼吸で生命活性と肉体活性を行う。

「スカサハ、霊体化していつでも奇襲出来る様に傍で待機していきなれ。調べる」

『拝承した』

言葉と共に屋根の上から上を跳躍して移動する。まだ三日しかスカサハとは過ごしていないが、それでも彼女の体の動かし方は何度も目撃しており――基礎が出来上がっているなら技術の模倣はそう難しくはない。重力を感じさせない、音も衝撃も生み出さない跳躍術、おそらくは影の国の試練を抜ける為に編み出されたの動きを真似て、屋根から屋根の上へと一切衝撃を生み出さず跳躍して移動して行く。その間、警戒を完全にスカサハに任せる事はなく、自分もシャドウサーヴァントや、他の参加者達からの襲撃に備えて警戒を行うが、そんな事も発生せずに、あっさりと同桐邸へと到着する。

外側から確認する間桐邸は間違いなく戦闘があつた形跡を見せている。壁には穴が開き、玄関の扉も吹き飛んでいる。完全に更地になつていない事を確認すると、おそらくは中の者をピンポイントで殺す為の襲撃だったかもしれないのだが――えらく非効率的だな、とは思ふ。しかし間桐雁夜を殺そうとする節穴アイの持ち主がこの聖杯戦争に存在したのだろうか？ そう考えながら【天を翔ける、太陽よ】を背中 ウェポンホルダーへと戻し、取り回しやすいダガーをベルトから抜いて手に取る。剣よりは遥かに軽いが、

狭い閉鎖空間ならこちらの方が断然有利に動ける。

ともあれ、開けっ放しの玄関を抜けて中に入ってみれば、

「あ———そうか、死んだのかお前」

白髪の男の死体が———写真で確認した事のあるその男の姿は、間桐雁夜のものであった。まるで飾られているかのように壁に横たわり、胸、心臓がある筈の部分を綺麗に食われて、穴をあけた状態で死んでいた。相当苦しんだのか、絶叫する様な苦悶の表情がその顔には浮かんでいた。絶叫する様なその表情を確認し、軽く気配を探って毘がないのを確認しつつ、片手で両眼を閉じた。

「……内から外へと伸びる様に食いちぎられてるな。つーことは元々体内に合ったもんが食い破って出てきた形か。これは……シヤドウサーヴァントか、或いは八人目の仕業か？ んー……やっぱ令呪が消えてるか。まあ、仕方がねえつつたら仕方がねえけどな」

令呪は聖杯へと還元されてしまったか、と少々残念に思いながら雁夜の冥福を祈る。この男がどんな思い、どんな願いを抱いてこの聖杯戦争へと参加したかはわからないが、それでもその願いが叶う事は絶対にならないだろう。彼は敗北者なのだから。そして敗北者の願いは叶わない———それは勝負の共通のルールなのだ。絶対はない。雁夜は敗北した。

「さて……進むか」

警戒を強めながら間桐邸の中へと踏み込む。しつかりと気配を察知すれば、間桐邸の奥に人の気配が存在するのを感じられる。まるで待っているかのように此方を待ち受けているその気配は動く事がない。いや、おそらくは此方の存在を待っているのだらうとは思う。となると此方の動きを読んでいる者が相手である可能性がある———色々と辛い。

まあ、それはともかく、相手の予定に付き合う必要はない。敵がいるのを確認した、このまま【天を翔ける、太陽よ】で一気に更地に———。

『———した場合、一切相手の情報が入らぬぞ？』

それは辛いなあ、と思う。別に殺すのは問題はない。だが相手を確

認せずに殺すのは此方の情報が減ってしまう所がある。面倒だなあ、と思いつつ足は奥へと、間桐邸の気配のある場所へと向かって進んで行く。徐々に、壁の破損具合が酷くなってくる。奥へ行けばいくほど、激しい戦闘があつたのが解るが、具体的な凶器の類が一切見えないう。となるとやはり英霊、或いは魔術の類で破壊したのだろうか。魔術への警戒を重点だな、と考えた所で、

間桐邸の奥へと到着した。

そこだけは、なぜか扉が無事だった。

しかしその奥からは妙に感覚に訴えるような不吉な予感がしており、強敵がいる事を感じさせていた。悪の組織の親玉の様に、誰かが待つてくれているんだらうなあ、と心を弾ませながら扉を蹴りぬいた。

「お邪魔しまあーす！」

蹴り破れた扉がすぐ横でばたり、と落ちるのを知覚しながら目の前、暗い空間にギチギチと音を立てながら満たされる醜悪な気配を感じ、何よりも早く、炎剣を生み出してそれを眼前に床へと突き刺した。燃えていても散らない炎の塊は床に突き刺さったまま、照明としての役割を果たし、目の前の光景を見せる。

それは一言で説明するなら下衆と、或いは外道とも呼べる光景だった。

その空間は蟲で満たされていた。蟲で空間が満たされており、そしてその中央でまだ幼い幼女が全身を無表情のまま、犯されていた。そしてその向こう側で、青い髪の毛の二十台頃の男が右手の上に空間の揺らめきを浮かべながら立っていた。それを目撃した瞬間に判断する。いや、理解した。

こいつは悪だ、と。

目視の成功した瞬間には既に動きは終わっていた。縮地で正面から姿をけし、炎を放出しながら蟲を焼き、踏み殺し、握ったダガーを問答無用で無明の領域へと滑らせ、その一撃で言葉をしゃべらせる、反応すらさせる前に首を跳ね飛ばした。が、跳ね飛ばした首の感触は軽く、肉を切断したような感触がないのを即座に知覚した。同時に、

足元の蟲が呻きながらギチギチと刃を磨き、這ってくるのが見えた。即座に蟲では絶対に追いつけない速度で再び入口まで戻り、炎剣を更に三本生成し、それを壁を作る様に自分の前に突き刺し、蟲が寄ってこない様にする。

「……」

無言で、無表情のまま、幼女は反応せず蟲に犯されている。その光景の向こう側に、蟲達が集まりながら一つの形を作る様な光景が見える。足、動体、腕、頭と徐々に人の形を生み出し、最終的には首を跳ね飛ばした男と寸分の狂いもない姿を生み出した。蟲全てが体で、命なのか。そう判断したところで迷う事無くダガーを捨てて「天を翔ける、太陽よ」を抜く。対軍級の太陽の宝具であれば逃げる時間も無く一瞬で蒸発させられる。

「天を翔ける、太陽よ」を構えたこちらに対して、コートを着た青髪オールバックの男は口を開いた。

「——来たか、忌々しい■■■の狗め」

「悪のボス宜しく囀るつもりはある、と——誰だてめえ」

その問いに男は答えた。

「私はマキリ・ゾオルケン。此度の聖杯戦争が本来とは大きく乖離している最大の原因だ」

瞬間、「天を翔ける、太陽よ」を放つ為に一気に生命力を燃烧させて魔力を稼ぐ。こいつはここで確実に殺すべきだ、と直感的に判断する。が、同時に相手が逃げも隠れもしようとしないこの状況の異様さに、矢を放つ動きが一瞬だけ遅れる。

「ここでそれを放つても意味はないぞ。此方の手には聖杯があるからな」

「——」

動きを止める。殺せない理由がそこにはあつた。聖杯がどれだけの強度を持っているかは解らないが、それでもたった今、ゾオルケンと名乗った男がその空間の揺らめきから黄金の器を取り出したのだ。それはまるで神話から呼び出されたような美しさを持ったものであり、そしてこの時代ではありえない神秘、そして魔力を秘めていた。

スカサハに聞くまでもない。アレは間違いなく聖杯だ。それも完成された聖杯だ。聖杯戦争を完結させる事で出現する筈のそれが、なぜかその男の手に合った。

出現の時期にはまだ早い。落ちているのはキャスターとバーサーカーだけだ。となると正規の手段で聖杯を手にしたようには思えない。

得体の知れなさに動くに動けない——何より少女が人質の様に囚われている。

『無論、群体の殺し方は心得ている。体の一部にでも触れていればそれを通して全体を自滅させることは出来よう——だがあの聖杯を握っている限りはまともに通じるかどうかはわからない。調べる時間くれ』

「で、だ。ゾオルケンさんよ。あの鬱陶しい影のお友達はあるのか」
時間を稼ぐ。スカサハであれば俺には無理でも何か、打開策をひらめく事がでいるだろうとは思うが——この男の視線、スカサハのいる虚空を片目で捉えている。今までにない、異質な感覚を覚える。

「是だ。アレは或いは可能性。ありえた存在。或いはどこかで敗北した影。過去の残滓。即ち英霊の影、その認識で一切問題はない」

「じゃあ質問その二——目的はなにかな？」

「人類の救済」

「……は？」

考えていた事とあまりに違う事に素っ頓狂な声が漏れてしまったが、マキリ・ゾオルケンは至極真つ当な表情を浮かべたまま、話を続ける。

「私はあまねく人々の救済を望んだ——が、無駄だ。無為だと理解してしまった。世界は絶対に救われたいという事実がある。私も未来の果てにはその願いをかなえる事もなく命を散らすだろう。そういう運命が、歴史の流れが出来上がっている。故に私は試みた。ああ、そして失敗した。無為だったのだと改めて理解させられ——人々の生きるはずの世界は焼却が決まってしまった。もはや私にできる事は何もない」

「だったら聖杯を此方へとよこせ。それで回避するから」

「それは不可能だ。全ては未到達のままに滅びる」

こいつが焼却の未来を引き寄せた最大の原因である事は理解した
—— だけどどうやってやったのか、そしてその回避手段が一切見えない。上手い、と思う。殺す事が出来ても、殺す事の出来ない理由を作り上げたタイプだ。所謂謀略と言う奴なのだろうが、敵であることには間違いはない。

「で、どうして俺にこうやって会おうと思ったんだ？」

「勧誘だよ」

あまりにも普通な内容にまた首を傾げそうになるが、次にゾオルケ
ンが発した言葉によって納得せざるを得なかった。

「ランサーのマスターケイネス・エルメロイ・アーチボルトは聖杯戦争
を死によつて終了させた。代役である槍のマスターである君は——
」

「—— 本来と同じ流れを迎える為には生きていてはいけない、つて
事か」

「是、だ。この世界の歴史、この聖杯戦争の流れは私とレフ・ライノー
ルによつてゆがめられたのは事実だが、そこに君が代役として選ばれ
たのは間違いなく■■■■の意志によるものだろう。おそらくは全て
を解決させた所で代役らしく、本来の役者と同じような結末を与える
事で便利に使いたいつもりなのだろうが—— 無論、私にはその運命
を覆すものがある」

聖杯をゾオルケンは見せる。

「此方側へ来るが良い。貴様は未来を守る様な者ではないだろう？
欲望のまま、衝動のまま、責任を背負う事もなく、己の思うが儘、自
由に生きる事を好む存在だ。故に私はそれを保証する。今、その前に
広がっているのは死の運命ではあるが、此方側へと来ればそれを回避
できる」

「……成程、割とまともな勧誘だった事にびつくりだわ」

もつとこう、世界をくれてやる！ とか相手側には魅力的に見えて
もこちらに対して一切魅力を感じない、そういう古典的な交渉をして

くると思ったのだが、的確にこちらの欲しいものをゾオルケンが提供してくる、というか本気でするつもりらしい。少なくともゾオルケンが嘘をついていないのは声で判断できる。言葉の真贋を見抜ける程度には人生経験を積んでいる。だから正直、これは悪くはない交渉だと思っっている。

むしろ、絶対に死ななきやいけない事を考えれば受けてもいいだろう。

「どうする?」

「悪い話じゃないな」

「そうか」

「だけどお前と喋る事に飽きたし喋り方がうぜえんだよ!! 我慢でき

ねえ! 自爆テロだ!!」

「——は?」

迷う事無く、この場所の中心点へと向かって最大出力の【天を翔ける、太陽よ】を叩き込んだ。

「アアアアイ！ アアアアアム！ チャンピオオオオン！！ 気持ちいいいい！」

拳を振り上げながら瓦礫を弾き飛ばして復活する。直前にマントラで生命力を一気に燃焼させた魔力で【魔力放出(炎)】の真似事を行い、それで何とか爆破の衝撃に抗ったり、体を強化したりで耐えきろうと思っただが、やっぱり色々は無謀だったらしい。拳を振り上げながらも体の所々が焦げているし、傷だらけになっている。この状況で戦えと言われても正直な話、絶対に無理だ。と言うか立っているだけでも限界なのだが、そこら辺は長年の経験が利いてくる。たとえば体が限界を迎えていようとも、まるで日常の様に動かす事程度は出来る。

「ふう、いい感じに更地に変えられたな——無事か、スカサハ」

「まあ、私は、な。来るのは解っていたから回避出来た」

流石スカサハだ、良くパートナーの事を理解している。が、彼女は、という事はそれ以外は駄目だったという事だろうか？ 視線を自分のいる場所へと向ける。そこに存在したはずの間桐邸は完全に【天を翔ける、太陽よ】の一撃によって瓦礫の山と化していた。出力が甘かったのか、或いは途中でガードが入ったのかどうかはわからないが、完全に蒸発させるには至らなかったようだ——いや、その場合は自分もたぶん死んでいたのだろうか。しかし、

マキリ・ゾオルケンと会っていた蟲の部屋は跡形もなく蒸発していた。

無論、そこにいた人質の様な、蟲に犯されていた少女の姿は肉の一片たりとも存在していない。間違いなく蒸発したのだろう。少々後味は悪いが、それでもあの少女を殺す事は躊躇ってはいけなかった。助けた所で背中を刺しに来るかもしれない相手をのんびりと救出するつもりはないし、あの状況を見ている感じ、既に心は死んでいた。だったらさっさと殺して、この世界の苦痛から解放してしまった方が間違いなく幸福だろう。

「と、ころでお主よ、ここで悪い知らせが二つほどあるが」

「なにかな」

「まあ、一つ目は既に分かっているかもしれないが——あの蟲男を逃した。痕跡はある程度は追えるが、手傷程度しか刻む事は出来なかつたようだ。まあ、それでも聖杯を使わせる事には成功した。おかげで追跡は出来るから嘆く程の事ではない」

「マジかあ……」

まあ、それは予想していた事だ。これで殺せるようなら暗躍などしていないし、マキリ・ゾオルケンと言えば500年を生きる怪物だ。単純に得た年月が神秘へと直結されるこの世界の法則において、500年という年月を生きる存在は化け物としか表現のしようがない。間違いなく俺よりも強い、完成された化け物であると評価する事が出来る。実際、あの蟲の群れは俺では完全消滅させることはできない。一か所に集めた所で【天を翔ける、太陽よ】を叩き込む事が出来ればいいのだが、そうやって一か所に集める方法がない。やはりスカサハに自滅因子を打ち込んでもらうのが一番の攻略方法なのだと思う。「では二つ目だが——たった今、未来の焼却が確定し、この世界が特異点へと変貌した。喜べ、おぬしはたった今、世界の破壊者となったのだ」

そう言つてスカサハは天に向かって指を向けた。それに従う様に視線を天へと持つて行けば、そこには冬木の青い空が広がっている——が、同時に巨大な光輪も見える。まるで空を囲むかのように広がる光輪は牢獄の様にさえ見える。それが生み出された事によって、明らかに終末感が心の中で漂い始めてきた。

「俺、死んだら反英霊として座に登録されないよな？ バーサーカー辺りで。スキルに、こう、【時代の破壊者】みたいなものを持つて」

「世界が滅べば座も残つておるまい——それに私も影の国の気配を感じる事が出来ない。この時代、この時が、どうやら完全に隔離されて焼却が進められている様だぞ」

「マジかあ……あの嬢ちゃんがトリガーかあ……」

「だったのだろうな。相手が一枚上手だった」

おそらくは初手で爆撃するか、或いは交渉が決裂するのを既に理解

していた為、向こうも罫を仕込んだのだ。未来焼却のトリガーとなる、生きてはいないといけない存在を爆弾の様に設置したのだ。助けが鈍るならよし、砲撃した際に巻き込まれて死ぬならそれもよし。交渉が成功、失敗、どちらであったとしても一切問題がない様に構えていたわけだ。流星、知恵は回るといふ事なのだろうか。めんどくさい相手だ。

「スカサハ、この状況をどうにかする方法はあるか？」

視線をスカサハへと向ける。それに対してスカサハは溜息を吐く。

「さて、な。私も未来を救うなんて経験はない。だが今、この都市は世界の他の部分と隔離されている様に感じる。おそらく未来を焼却する前段階として時代の隔離が始まったのだろうか——」

「巻いてー」

「……つまり特異点になるにはそれだけの原因がある。それを排除すれば世界の修正力が時代を正しい形へと戻すだろう」

「幼女を跡形もなく蒸発させたのには？」

「それが世界の力だ——どうやら聖杯によって今は封じ込められている様だがな」

今ほど、スカサハを召喚しておいてよかったと思う。自分の様な半端な魔術師ではこのような考えは浮かび上がらない。今も影の国に君臨する女王、スカサハ。彼女の知識と実力がなければ間違いなくこの状況を、そしてその対処法を察知する事は不可能だっただろう。故に、スカサハを召喚する事に決定した己の選択に感謝し、そして彼女と出会えた運命に感謝する。たとえば、この戦いの先で、

自分が死ななくてはならないのだとしても。

「つーことは、あのクソ蟲爺、あの聖杯——そして俺を始末すればこの状況は解除されるって事か」

「あの者の言葉を素直に受け取るならな」

「嘘をついている気配は一切なかった。信じていいと思うぜ。まあ、全てをしゃべった訳じゃないだろうけどな。とりあえず聖杯戦争はやめだ、やめ。やっちまったことを悔いてもしょうがねえし、未来を焼却させたままにするのも非常に気持ちが悪い。俺は一日一回は才

ルガマリーを苛めない気が済まないんだ——そしてマリーちゃんに連絡を入れられないならこの状況は非常に俺の精神衛生上悪い。という訳である。蟲爺をハントしてぶっ殺して特異点化を解除するぞ」

まあ、未来を救うとかそういう高尚な理由ではなく、やられたらやり返すと言っただけのシンプルな話である。やられっぱなしは個人的に許せない、それだけの話だ。だから見つけて、殺して、そして勝利する。それだけの話。

「で、これからの行動はどうするのだ？ まさか今から追うのか？」

「いや、さすがにもう体が限界にきている。いい加減に本格的な休息と回復を行わないとパフォーマンスに支障が——」

言葉を放った途中で、この空間に入り込んでくる気配を感じた。目の端に映る黒い影を認識した瞬間、縮地により瞬間加速で動きつつ、マントラで損傷した肉体の補強、呼吸の確保、そして生命の活性化を行い、一息もかけずに生み出した炎剣を瞬間的に居合の様に放つ。叩き込む相手は——完全に影のみで構成されたバーサーカーの、あの黒甲冑の姿だった。狂戦士でありながら縮地に武芸者として反応し、即座に黒く染まったパイプでガードに入るが、

「——【貫き穿つ死翔の槍】ゲイ・ボルク・オルタナティブ」

即座に連携された二本の魔槍が必中の幾何学模様を描きながらバーサーカーのシャドウサーヴァントに突き刺さり、一瞬でその姿を消滅させた。自分も同時に炎剣を消滅させながら呼吸を少しだけ荒くし、そして何とか落ち着かそうとする。

「——出るから、とつとと隠れられる場所へ行こう。これ以上戦いたくはない」

英霊の影であるせいか、本来のバーサーカーよりも弱いな、と確信しつつよろよろと体を揺らし、武器をしまおう。流石にこれ以上は辛い。やはり休息が必要だと判断し、

「そうだな。運ぶから捕まると良い」

遠慮なくスカサハへと近づき、倒れこむ。

そのまま、目を瞑る。

——夢を見ている。

彼女はまさしく天才だった。その時代においても天才と表現して良かった。もとより全ての存在が未来よりも遥かに優れている、そんな神話の時代であつても天才と表現できるだけの才能を持ち、そして努力をするだけの人格も兼ね備えていた。それだけにのみならず、女は生まれた時から他者を率いる事の出来るカリスマ性をも保有していた。女は王者だった。女は支配者だった。女は戦士だった。故に全力を尽くそうと、女は努力をし続けてきた。その女の終わりのない一生を見ている。おそらく、それは悲劇と呼ぶにふさわしいものだった。

努力を続け、才能を伸ばし、そして極みと呼ばれる領域に踏み込んでも研鑽をあきらめず、やがて神域に触れた。その結果として神々の怒りを受け、死を剥奪されてしまった彼女は、永遠の牢獄を彷徨う様になってしまった。それでも彼女は多くの試練を生み出し、そして門番として、女王として挑戦者達を迎えた。弟子たちに彼女の技を教え、そして神話に名を残す稀代の師として名声を手にする事が出来た。

男に抱かれ、刹那の快楽に溺れど、それでも終われば夢から覚めるような残酷さが待っている。

その果てで、心を許せる相手を見つけようとも、未来は残酷な運命を絶対に見える。そう、時は不変であり、平等だ——彼女以外に對して。死を剥奪された彼女は決して老いる事も、劣化する事もなく、不変の王国に君臨する。たとえそこに訪れる存在がなくなろうとも、その領地にいる者たちが全て死滅しようとも、女王である以上、彼女は王国の門番として永遠に牢獄に縛られる。それは神々の与えた残酷な刑だった。

彼女は技を教え、導いた。

だが弟子たちは死ぬ。戦いで、そして寿命で。

彼女は誰かを愛した。

だが彼もまた死んだ。裏切られ、追い詰められ、世の理を守る様に。彼女には未来が最初から存在していなかった。未来の焼却のあるなし等関係なく、最初から未来が存在しない存在だった。死こそが人間の、そして生物の到達する事の出来る未来であり、生物としての特権だと言っても良い事だ。だけどそれを奪われた女は未来と言う者を完全に失ってしまった。技術と、魔術と、知恵を、それでも研鑽をあきらめずに未来を求めても、

彼女がどこかへと行き着く事は永遠にありえない。影の国の女王の未来は呪われた瞬間に消滅したのだから。彼女は生きているのも死んでもいない。その狭間の存在となってしまうているのだから。明日もなく、昨日もなく、現在しか存在しない。

その呪われた身でも、未だに祈り続ける。

いつか己を殺しに来るものが、与えた赤い魔槍を持って殺してくれと。

それが絶対^{、、、}にありえない^{、、、}という真実でありながら、乙女のように夢を忘れられず、死を祈る。

もはやその願いだけが彼女の安息であり、そして残されたものだった。彼女はこの世で誰よりも命の重さを理解し、そしてそれを欲している。死を奪われたことによって人間以下の存在となってしまう事、そこから人間に成りたがっている。

故に、希望へと手を伸ばした。

それはか細い呼びかけだった。特殊な術を用いて干渉し、そして呼び出す儀式。本来のそれとは大きく異なるが、彼女の所へと届いた。それだけで称賛に値する事だった。故に彼女はそれに触れ、読み取り、そして戦場からの呼びかけを理解し——思考するまでもなく応えた。

彼女は影の国の女王。死を想う女王。死のない永遠の王。

死のない王、それは即ち神と同じに他ならない。

それでも彼女は人を羨み、求め、戻りたがり、手を伸ばす。真にそれが万能であるなら、神から剥奪された死を取り戻してくれるはずだと。きつと己を殺してくれる筈だと、どこかで叶わないと思いつつながら

手を伸ばす。

召喚の呼びかけに答えながら女は思う——まるで少女のようだと。

そして女は参戦した、聖杯の戦いに。そして未熟な男と出会った。その苛烈さ、凶暴さ、自分勝手さは間違いなく、遠い、神話の時代の日々、鍛え上げた弟子たちの姿を思い出させる。笑い、叫び、怒り、そして自分勝手にふるまいながら戦場へと突撃し、暴れまわっては酒を飲む日常。まだ騒がしく豊かだった時代の姿を思い出させ、

——夢は終わった。

特異点X日目――1

目が覚めた背に感じるのは柔らかい感触からだった。気配を巡らせながら起き上がったところ、直ぐ近くにスカサハのものを感ぜられる。だがそれとは別に感じる複数の気配もある。これは憶えがある。目を開けながら口を開く。

「……スカサハ、俺、どれぐらい寝てたか？」

「二刻程だな」

「となると四時間ほどか……」

上半身を持ち上げながら周りの状況を確認する。視界に入ってくるのは普通の部屋の姿だった。机があり、ベッドがあり、タンスが置いてあるという一般家庭の一室、そういう光景であり、その部屋に設置してあるベッドに自分は寝かされていた。どうやら寝ている間に服をはがれたようで、上半身は裸、下半身の方もパンツ一枚という状況になっていた。そんな己の体には自爆の影響で刻み込まれた火傷の跡が色濃く残っている。が、回復の途中か、出来たばかりの醜さは存在しない様に見える。

まだ完全回復はしていないな、と確認したところで、

「おーい、お前のマスターは起きたか？　つてあ、起きたんだ」

「ウェイバー・ベルベット……」

「うん、そうだよ」

扉を開けて部屋の様子を確認するウェイバーの姿が見えた。感知した通り、ここはどうやらウェイバーとイスカandalが拠点に使っている建造物らしい。息を吐きながら敵のいない事に軽く安堵し、そして視線をウェイバーへと向けた。

「助けて貰ったのはいいんだけど……なんで助けた」

「んー……ライダーの奴が乗り気だったのと……悪い奴には見えなかったから？」

毒気の抜けるウェイバーの答えに溜息を吐くと、軽くにらまれる様になんだよ、と言われる。いや、ウェイバーに關してはそれでいいと思う。たぶんこの男は普通に聖杯戦争で戦い、普通に負け、そして普

通に生き残るのだろう。たぶん、そういう星の下にいる。だから自然とこちらも苦笑が漏れてしまう。こいつに関しては戦う気が一切起きない、そういう不思議な気持ちがあった。

「いんや、ホント助かったわ……だろ、スカサハ」

「ああ、安全な拠点は欲しかったしな。協力者がいる方が今の状況は心強い——」

そう言ってスカサハは横へ、窓の外へと指を向けた。窓の外へと視線を向ければ、そこには夜の冬木が広がっているのが見えた。しかしそんな夜の闇の中でも天に輝く光輪は消えず、輝き続けている。それだけではなく、夜になっていっているのもおかしい。時間はまだ四時間しか経過していないはずだ。その程度の時間では夕暮れにだって到達しないはずだ。となると、今、外が暗くなっているのはおかしい。

「綺麗な夜空ですね！」

「そうだな」

一拍の無言、ツツコミを入れる様にウェイバーの声が響く。

「いや、そんなのんきに言える事じゃないから！ 未来の焼却ってなんだよ!!」

——あ、ウェイバー君も知ったんだ。俺がやらかしたの。

そう思いつつも軽く息を吐き出して、マントラの呼吸を意識的に発動させ、生命力と肉体の活性を再開する。どうやら寝ている間に結構治療されていたようだが、これに合わせてマントラの呼吸を続ければ回復も加速するだろうと判断する。まあ、今すぐ動かなくても大丈夫の様な気配もするし、動く前にしっかりと回復しておきたいが、

「……腹減った。テロった後は美味しい飯が食いたくなる」

ウェイバーの呆然とする表情に対し、小さく笑い声を零したスカサハが立ちがる。現代風の衣装に包まれた彼女はまあ待て、と言葉を置きながら背を向けた。

「何か作ってやろう。怪我人を働かせるのも心が痛むしな。お主はそこで少々待っている」

スカサハのその言葉にウェイバーと視線を合わせ、彼女の放った言葉を理解して飲み込むのに数秒かかった。

「めっちゃ美味え」

「そうかそうか」

二階建ての住宅の一階、ダイニングでスカサハの作った肉料理を一気に口の中へと叩き込んで行き、噛み千切りながら飲み込んで行く。見た事のない、食べた事もない、不思議な料理の数々だ。まるで絵本や神話に出てくるような、イメージのみの料理。それが現実として目の前には存在しており、味わったことのない美味に味覚が痺れかけていた。アレか、武術や学問ではなく花嫁修業とかまでやっていたのだろうか、

「その先を考えたら殺すぞ?」

「ウツス。あ、イスカンダルのオツサン、これ美味いぞ、マジで」

「まことか! お、確かにこちらも良い味をしているではないか!

うーん、器量よし、戦闘よし、見た目よし、完璧だな! どうだ、余の嫁にならんか? ならない? じゃあ部下は? ダメ? ダメかあー……仕方がないなあー……んむ、美味い」

「お前が慣れ過ぎなんだよライダー!!」

食卓にはなぜかイスカンダルまでが参加しており、胃を痛めるかのようにウェイバーが抑えている。いや、まあ、ここまでフリーダムな英霊も珍しい? のだろうが、ウェイバーはウェイバーでそろそろ慣れるべきじゃないのかな、と三日目なのだから思う。それはともかく、スカサハの作ったメシを堪能し、骨付き肉をしゃぶりながら椅子に深く座り込み、確認する。

「——現在残っている正規マスターは俺、ウェイバー・ベルベット、衛宮切嗣、そして言峰綺礼の四人のみなんだな?」

「うん。遠坂時臣は衛宮切嗣に狙撃されて死んだよ。そしてあのアーチャーは契約をアサシンのマスターに乗り換えた」

「ちなみにアサシンに関しては余の宝具で既に粉碎してあるゆえ、これ以上の心配をする必要はないぞ」

「ここぞ動いている間にそっちはそっちで結構状況が動いてたかあ……」

しかし遠坂時臣が衛宮切嗣に殺されたか。アレはギルガメッシュに処刑されるもんだと思っていたが、どうやらこの混乱に乗じて殺すのに成功して……ギルガメッシュもまだ消えるつもりはないから綺礼と再契約したという形だろうか。アーチャーには【単独行動】スキルがあるし、マスターがいなくなっても数日程度なら普通に活動してそうだなあ、とは思う。まあ、遠坂家はお疲れ様。参戦したお前が悪いよ。安らかに死んでおけ。

ともあれ、残されたマスターは四人だ。それに対して相対するのはマキリ・ゾオルケン一人。未来焼却のトリガーとなったのはあの聖杯とゾオルケンなのだから、あの二つと俺さえ死ねばこの事態はどうか乗り越えられる——まあ、ちよつと引つかかる事はあるが、やらかした事のツケは払わなきゃいけない。それは大人として極々普通、当たり前前のルールだ。だからこの状況をどうにかして乗り越える事をまずは考える。そしてそれを判断する上で必要になってくるのは——数だ。

「今外にはシャドウサーヴァントがうろついているんだよな？」

「あとは竜牙兵共に死んだ住民がゾンビやスケルトンとしても蘇っておるな」

「この世の地獄かよ……まあ、魔力リソースも限界があるし、やっぱり数は集めておきたいよな、ここは」

此方が一騎当千の英霊を味方に行っているとはいえ、魔力と言うリソースを代償にしている分、戦える時間にはどうしても限界が存在する。その上、相手が聖杯を保有し、それを使用していることを考えると、実質的に無限の動力を得たと考えても間違いはないと思う。だから量を潰す為にはそれに対抗できるだけの量を質で集めたい。そうなってくると、

「アインツベルンと聖堂教会——つまりは衛宮切嗣と言峰綺礼との協力が不可欠になってくる。」

「英雄王ギルガメッシュと、騎士王アーサー……二人とも仲間になっ

てくれれば間違いなく戦力になる。切嗣も綺礼もマスターとしては破格の戦闘能力を持っている、間違いなく戦闘を優位に進められるだろうけど——」

「——あいつら、協力するの？　というかその言い方、最初から僕らが協力者としてカウントされてる感じなんだけど」

「えっ」

「えっ」

「えっ？　余達は助けんのか？」

「いや、助け合わないとどうしようもないのはわかるけどさ……」

ウェイバーのその態度に小さく苦笑する。そういう、素直じゃない態度は見ているとオルガマリーの存在を思い出す。彼女も酷い頑固、というか素直じゃないタイプの人間で“違うわよ！　勘違いしないでね！”なんて平然な顔で言うてるから非常に面白い。まあ、そのオルガマリーに関しては今声すら聴けないので寂しさを感じるのだが。

「まあ、とりあえず勧誘するとして問題がまずないのが切嗣&アサーのコンビだ。切嗣に関しては俺を撃ち殺したい程の殺意があるだろうけど、決して馬鹿な男じゃない。アサー王は根っからの善人だ、間違いなくこの状況の打破に協力するだろうし、切嗣も何よりも本来の聖杯戦争の再開を求めるだろうから簡単に乗っかると思う」

だから問題は、

「——神父の方ではなく英雄王ギルガメッシュの方だな？」

イスカンダルの言葉に頷く。問題は綺礼ではなくギルガメッシュだ。アレとは一回戦闘を通してその心の在り方に触れているから理解できるものがある。つまりは暴君であるのだ。自分にとってそれが面白いのであれば、迷う事無く認める。逆に見苦しいのであればその場で迷う事もなく殺す。そういう存在なのだ。究極的に自己中心で、それでいて勝手。だけどそれは彼の場合にのみ、許される。彼は人類最古の王で、そして英雄王という存在なのだから。

誰も彼を咎める事は出来ない。

それはたとえ、全能の神々であっても、だ。

「ギルガメッシュは十中八九動かない。あの王様の事だから」良い、許す。世界が終焉を迎えるのであればそれもまた良からう。我は特等席にて眺めさせて貰おう」とか言つて絶対観客に回るぜ、アレ」

「うっわ、声が想像できる」

「実際その可能性が高そうだなあ……おい、ランサーのマスター。お前さん、現状の装備とかはどんな感じだ」

イスカンドルに対してそうだなあ、と答える。

「太陽弓はちよいメンテナンスしておきたい、魔力は大分損耗してる、肉体的には後数時間眠つて完全回復したい、つて所かね。まあ、完全回復つてはいかないけど本来のスペックで体を動かす分にはそれだけ時間があれば十分だわ。あとは鉄剣の類が圧倒的に足りねーわ。ちなみに令呪は2画使った」

「こっちは坊主が全く戦闘のアテにはならんが令呪は3画残ってるのが幸いだな」

「消耗はこっちの方が結構重い感じだな……基本的にこちらの宝具や武装が対人クラス想定だったのも問題だけど——」

「そこらへんに関しては余に任せい。余の宝具であれば大群を相手にしようとも揺るがんわ。逆に大群の中からピンポイントで親玉だけを選別して隔離する事も出来るぞ」

「そりゃあ便利だな。結界の類か？ ……詮索するのはマナー違反だな、こりゃ。とりあえず聖杯ブーストによってこちらが仕掛けた妨害の類は全て破壊されると想定して相手を令呪3画のブーストで拘束できる時間は何秒ぐらいだ？」

「まあ、一発叩き込む程度の時間であれば余も何とかするだろうな——
——逆に言えばお前さんらの方が火力不足ではないかどうかが不安だが」

「安心しろ征服王。私の宝具は心臓を貫いて殺すのを目的としているが、そこにルーンを刻めば特攻効果程度簡単に付与できる。最後の令呪で私の宝具を強化して放てば、おそらくは殺せるだろうな」

イスカンドル、スカサハと三人で戦術について話し合っていると、完全に仲間外れにされたウェイバーが少しだけ寂しそうな表情を浮

かべるので、イスカンドルとスカサハの会話から抜け出し、ウェイバーの背後へと周りこんでその背中を大きく叩く。

「痛っあ！ 何するんだよ！」

瞬間、怒りを向けてくるウェイバーの姿に笑う。

「なあに落ち込んでるんだよ。俺、これから爆睡して回復しなきゃいけないんだから、お前も出来ることあるだろ？ 礼装の作成とか、アインツベルンに使い魔を送って情報の交換とかさ」

「あ……」

「じゃ、俺はもう一度寝るからな」

続けられる言葉を聞く前にそのままウェイバーから離れ、再びベツドルームへと向かう。らしくない事をやっているなあ、と思いつつも思い出すのは門司の言葉、そして積み重ねてきた教えによる考え。

「——出来事には神様も運命も関係なく、間の問題か。生も死も、そんなもんなのかねえ、門司」

眩きながら、自分の未来はどうするか。そんな事を適当に考えながら眠る為に足を前へと運ぶ。

特異点X日目―2

少しボロボロになってダメージジーンズ風になったものを下に履き、上半身には梵字によって魔術的防御力を付与された布を包帯の様に胸回りを――心臓を守る様に巻きつけ、スポーツテーピングの様に両手にも巻いておく。これで心臓、両腕を狙われたとしても、或いはガードに使ったとしても刹那の瞬間、即死する前に時間を生み出せる。これだけの時間があれば縮地で移動なりカウンターを叩き込むなり、十分な行動はとれる。その為、割と防御力と言う者は重要だったりする。一応、フルアーマーでも通常と全く変わらない様に動けるようには訓練してあるが、そういう装備に関しては今回はなしである為、一切考える必要はない。そもそも鎧自体、インドで着てから一切使っていないのだから。

そのまま、体に呪布を巻いた状態、素肌の上からパーカー付きのジャケットを着る。ジャケットはシンプルに見えつつも、細かいポケットが見にくいように存在し、武器を隠しておくには便利だったりする。着替えが完了したところで軽く拳を握り、足を持ち上げて蹴りと繰り出し、そして調子を確かめる。完治……とはいかない。だが動くには十分なレベルには回復している。痛みを無視すればいつも通り動く事も出来る。ならこれで戦うには十分な筈だ。そう判断しながらジーンズのベルトにポーチとウェポンホルダーを装着する。ホルダーに「天を翔ける、太陽よ」を装着し、ナイフを装着する。ベルトと重ねる様に鞆を装着してその中にロングソードを収め、パーカーのポケットに魔宝石を収納する。

これで一先ずは着替えと準備が完了した。コンバットブーツは玄関にあるからそれはそれでいいとして、

「――装備完了だな」

確認を終えてからリビングルーム、他の三人と合流する。イスカandalもスカサハも既に現代風の衣装ではなく、召喚された時の戦闘装束へとその姿を変えている。それも当然だ。これからこの家の外へ――怪物とシャドウサーヴァントが跋扈する空間へと出るのだ、そ

んなところを抜けるのだから戦闘の準備をするに決まっている。

「じゃあブリーフィング……じゃねえな、目標と目的の再確認を行う。俺達の目標はアインツベルン城であり、そして目的は衛宮切嗣との接触だ。このまま、この状況を乗り越えるまでの短期的同盟を結成し、合流する事。既にウェイバーが使い魔を通して連絡を入れ、了承を得ているからあとは設備の整っている向こうへと行くだけ——オーケイ?」

「なんかお前、手慣れているな」

ウェイバーの言葉にまあ、そりゃあ、と答える。こうやってブリーフィング、或いは事前の打ち合わせするのは初めてではない。仕事で魔術師の工房を潰したり、逃げたキメラを始末したり等、そういう事も何度か経験している。だから割と慣れているもんなのだ、こういうのも。

「今回は目立つからオツサンには悪いけど——」

「余の宝具はなしであるな。宝具が取り柄のライダーから宝具を奪ってどうするんだという話だがな」

「その代り私が露払いを果たそう」

「俺はまだ完治している訳じゃないからサポートに徹するから、今までの様に動けるとは思わないでくれよ———そんなじゃあ移動を開始しますか」

全員、移動に対して一切問題が無い様なので家の外へとさっさと移動してしまい、そのまま移動を開始する。空を見上げれば夜空が広がっているのに、そこには不気味に輝く光輪が見える。アレは邪魔だなあ、と思いつつも視線を夜空から外し、闇に包まれている冬木の住宅街へと向ける。壁蹴りや屋上を伝った移動は早い反面物凄く目立つ———少なくとも一般人にとってはそうではないが、一般の領域を超えた者からすれば非常に目立つ動きなのだ。だから奇襲に対する警戒を行いつつも、普通に道路の上を駆け足で移動する。あまり速く走るとウェイバーがどうしても遅れてしまう為、スカサハとイスカandalを先頭に、ウェイバーを中央に、そして後方警戒に自分が並んで進む。

それにしても何故だろう、ウェイバーが英霊達と揃っているとそのうち“計略だ”なんて言いそうな気がするの。

変な電波を拾った気がする。

しつかりしろよ俺———そう思った直後、前方から迫ってくる敵の気配を察知する。素早く【天を翔ける、太陽よ】を持ち上げて構えるのと同時に正面、交差点を曲がってくるように出現する六体のスケルトンと一体のシャドウサーヴァントが見えた。そのシャドウサーヴァントはあまりにも見覚えのあるサーヴァントの姿をしていた。

脱落した、アサシンの姿だ。

その姿が視界に入ると同時に先制を奪う様に最少出力で太陽弓から矢を放った。閃光の炎は素早く放たれるのと同時に敵の集団の前で弾け、火花の様に輝きながらチャフとなって相手の視覚、そしてエーテルの流れを乱す。一瞬だけ意識を奪う事に成功した瞬間、スカサハとイスカンドルが既に前に出ていた。普通の人間にはありえない速度を英霊という身だけで完結させ、一瞬で集団へと接近する。

次の瞬間、スカサハの槍とイスカンドルの剣が集団を割った。骨を砕き、アサシンの首を飛ばし、そして残骸を砕いた。一瞬で総勢七体の姿が魔力の塵となって消えて行く。後方と周囲からの援軍や奇襲がない事をチェックしながらイスカンドルとスカサハにサインを出す。それを受け取った二人が再び真っ直ぐ前へと、目的地へと受かつて進み始める。現在の冬木は敵で溢れている為、無論警戒を怠る事はなく進む。

最初は不安そうに警戒しているウェイバーも、自分がそうするだけ無駄だと悟ったのか、途中からだんだんと無駄な力が抜け始める———とはいえ、恐怖を感じていることには変わりがない様だが。だが恐怖は良い。アレは臆病にしてくれる。完全に恐怖を殺すと咄嗟の襲撃に反応できなくなる時がある。だからある程度は恐怖を保ったままなのが“健全”な人間というものだ。だからそのままできてくれ、とは思う。

そう思っただけ進んでいると、更に敵の気配を察知する。

やる事は一緒だ。先制を奪い、隙を作り、そして切り込ませる。ス

ケルトンやゾンビ、シャドウサーヴァントの中でスカサハやイスカナルに勝利できるだけの化け物は存在しない。戦いとなれば蹂躪と表現できるレベルになる。ゆえに問題はどれだけ魔力の消耗を抑え、そして戦闘時の音を生み出さないか、と言うだけになる。そこら辺は完全に二人の英霊の技量任せになる。

が、

ここで初めて、英霊が前で、マスターが後ろと言う普通のサーヴァントとマスターの戦闘風景になっている事に、少しだけ苦笑を零した。この聖杯戦争で、もつともマスターらしくないよなあ、俺、と思いながら前へ、敵の残骸を踏み越えながら更に奥へ——アインツベルンの森へと向かって突き進んで行く。



合計七度のエンカウントを経験するが、少しだけ魔力を消耗した以外の損害は皆無でアインツベルンの森へと到着する。霊地へのダイレクトアタックで霊地としての防衛能力は失われているが、その代わりに簡易的な結界が張り直されていた。無論、それをすり抜けて侵入するのは魔術に関する津知恵がある者であればそう難しくはない。霊地を破壊してしまった為、大掛かりな魔術を維持できないのだろう。だから到着したことを知らせる意味でも対策もせずに入れば、アインツベルンに到着のサインが送られる。そこで足を止める事もなく、森の古城へと向かって歩いて行く。

が、やがて森の中に気配を感じ始める。気配のする方角は丁度アインツベルン城へと向かう途中にもある為、回避する事もなく真っ直ぐ気配へと向かって進めば、森の中にある、不自然に開けた場所へと出てくる。

その向こう側に、青いウオードレスに身を包んだ金髪の騎士王の姿が見える。こうやってその姿をしっかりと確認すれば、骨格と肉付きからして女性であるというのがしっかりと理解できる。身長は低い、年齢は十四ぐらいだろうか？ 物語のアーサー王は男であり、そして

成人した男性だった筈だ。となるとアレか、過去のブリテンは相当目が腐つてたのか、或いは中性的な美少年美少女の類が多かったのだろうか。

まあ、それはともかく、間違いなく節穴アイだったよな、とは思う。魔術で隠蔽していたのなら話は別なのだが。まあ、今はどうでもいい話だ。

「ようこそ来てくれました。もう既に相對した事もあるのでわかっていると思いますが、私がインツベルンのサーヴァント——セイバーです。マスターは残念ながら顔を見せるつもりは一切ないらしく、彼の言葉は私が代弁させてもらいます」

「ま、あの性格からして予想出来た事か」

事態が解決したらまとめ始めて始末する——なんて事を考えているのかもしれない。ただ今はそれを疑っていてもどうしようもない話だ。マキリ・ゾオルケンを殺す為には間違いなく全戦力を投入する必要がある。ギルガメッシュに関しては諦めているが、アーサー王が加入してくれるのであれば何よりも心強い。その伝説は現代においても数多くの人間が知っている。

星の聖剣エクスカリバー、

世界を繋ぎとめる聖槍ロンゴミニアド、

あらゆる害から守った聖剣の鞘。

アーサー王伝説に登場する数々の新具の持ち主が目の前に存在するのだ。今の所確認できている宝具はエクスカリバー一つだけだが、それだけでも十分すぎる破壊力を持っている。それに伝説と同一人物なら、0%の勝率の中から1%を生み出す程度の事はやってのけるだろう。これで戦力アップだな、と頭の中で計算しているとは、とアーサー王が口を開く。

「インツベルン城へと案内します——ただしピクト人、貴様は駄目だ」

「俺は日本生まれだつーの!」

「……本当か？ 本当はピクト人の両親を持っていないか？ 或いは魂を継承していないか？」

「なんでそこまで疑うんだよッ！」

「貴様の数々の行いは切嗣に——マスターに似ているがどこか愉快、犯の側面がある。それはどうしても祖国を落とさんと音速で飛来し襲い掛かってくるあの蛮族の姿を思い出す。貴様も音速で動けるだろう?。」

「現代人にいったい何を期待してるんだこいつ」

この騎士王の蛮族に対する疑り深さと言うか殺意の高さは一体何なんだろうか。目の前で疑うような視線を叩きつけてくる様子を横でイスカンドルが笑いながら見ている。

「……仕方がありませんね。少なくとも見た目はこの国の者の様ですし……あの蛮族どもの縁者だったら迷う事無くこの聖剣で薙ぎ払ったんですが」

「殺意高くない?。」

「当時は聖剣を放つだけの仕事とガウエインに表現されましたが、ぶっちゃけた話をしますと聖剣をぶっ放さないかどうかにもならない蛮族だったと表現するのが正しいと言いますか……一応、円卓に集った騎士達は一騎当千の猛者であり、それらを集めて殲滅にあたったのに全滅させることは出来ず、また数を揃えて襲い掛かってきましたからね。同じ人類かどうかすら疑いましたよ」

「過去の蛮族ってすげえ……」

ウェイバーが恐怖の視線を此方へと向けてくるが蛮族イコール俺と言う図式を勝手に結びつけるんじゃない。自分はもつとヒヤッハー系であつて違うと思う。伝説の騎士王にエイリアン扱いは流石にちよつと心が傷つく。

「まあ、そう落ち込むな。お前は蛮族と言うよりはケルト寄りだ」

「それ褒めてねえから。結局ウォーモンガー扱いって事だから」

「……何かいけないのか?。」

アーサーもそこでああ、ケルトの方ですか、とか妙な納得もしているし、後でスカサハには文句を言っておこう。なんか空気が変にぐだぐだし始めているし、森がアインツベルンの領域とはいえ、シャドウサーヴァントならば何時入り込んでもおかしくはないのだ、さつさと

設備の整っている城の方へと移動しておきたい。その意志を伝えるとアーサーがああすいません、と言葉を置く。

「それでは拠点の方へと案内します。正確な情報の交換と作戦の立案はそちらの方で行いましょう。この状況に関する詳しい情報も欲しいですし」

空を見上げれば光輪が見える。まるで冬木を捉え、隔離しているかのように浮かびあがる光輪。それを眺めてからアーサーへと視線を戻し、その先導の下にアインツベルン城へと向かって進んで行く。

騎士王アーサーつて意外と愉快なキャラしてたんだなあ、と思いなから。

特異点X日目―3

アインツベルン場内は美しかった。

外観は西洋風の古城だが、内装に関しては完全に最新の城のものになっていく。アンティークなテイストの調度品の数々は魔術的な意味を持ち、この城の防衛力を上げているのだろう。正直、カメラの一つでも持ち込んでおけばよかった、と後悔するぐらいには美しい城で——これ、テロで破壊したらさぞや爽快なんだろうなあ、と思ってしまうあたり、蛮族根性が染みついているのかもしれない。

そのままアーサーに案内されて城の中を進めば、やがて応接室の様な部屋へと到着する。数人で囲む事の出来るテーブルの向こう側には白髪、赤目の女性の姿と、使用人の様に傍に立つ黒髪の女が立っている。白髪の女の方がおそらくはアイリスフィール——アインツベルンが用意した聖杯だ。オルガマリーの用意した資料には確か聖杯戦争の進行と共に人としての機能をそぎ落とされて行き——確かか五体目のサーヴァントが脱落する事で小聖杯が完成する、だったか。残酷な事をアインツベルンもやるものだ。ホムンクルスの運命である短命を助けるためには聖杯を使うしかない。

聖杯を使うにはアイリスフィールは死ぬしかない。

アイリスフィールを生かすためには聖杯を捨てるしかない。

聖杯を捨てる事には願いを捨てるしかない。

どうなのだろう——衛宮切嗣は彼女を愛しているのだろうか？こんな状況、俺だったら間違いないアインツベルンへ反逆のテロリズムを掲げるのだが。まあ、深く知りもしない相手の心情を察するのは不可能だし、こうやって戦う事が確定している以上、想像するのも失礼と言う話だ。切嗣には切嗣の、アイリスフィールにはアイリスフィールの、それぞれの覚悟が存在する。安易に何故やらなかったと言うのは失礼である上に、その選択肢に唾を吐くようなことだ。

俺は個人の選択を尊重する——世の中、何事も自己責任だ。

「つつーわけで、騎兵隊参上！ とりあえず失われた未来を取り戻し

に来たぜ」

——ちなみに失った原因は俺だ。って言ったら今すぐ切嗣に殺されそうだなあ。黙っておこう。

心の中でこの空の真実を黙ってしまいこんでおく。口に出すだけ馬鹿を見る。そう思いながら視線をアイリスフィールへと向けると、彼女は人間らしくくすりと笑い、そして椅子に座る様に手で柔らかく示しながら、言葉を向けてくる。

「なんだか子供っぽいんですね、貴方は」

「英雄王には悪童って呼ばれるぐらいには少年心のままかなあ」

「お前さん、それ、褒められてないぞ」

イスカandalにうるせえ、と答えながらアーサーを見れば、頷いて納得している姿が見える。解ったわ、こいつ敵だ。いつか音速で接近しながら煽るだけ煽って逃げるから待っているよ、と心の中で強く誓いながら椅子に座る。それぞれが己のサーヴァントの横に座る様に着席し、アーサーはまるで騎士の様にアイリスフィールの横に立った。その姿を見て完全に気を抜くわけではないが、少しだけ安らげると思った。そこでそれじゃあ、とアイリスフィールが言葉を置く。

「この事態について詳細な情報がアインツベルンとしては欲しいんだけど——いいかしら？」

視線は外様である己とウェイバーへと視線は向けられるが、ウェイバーもこちらへと説明する様に、と視線を向けてくる。となると説明するのは自分か。あんまり知的な行動はイメージが崩れるからやりたくないんだがなあ、と思いつつも説明の準備を始める。



「——つまり世界は滅んでいる、って認識すればいいのね……」

「まあ、概ねは」

基本的に知っている情報を共有した。その内容は大雑把に言えば、焼却の未来の予知について、マキリ・ゾオルケンの存在に関して、第二の聖杯に関して、そしてゾオルケンと聖杯を破壊しない限りは元に

戻らない、という事実だ。ここであえて、アイリスフィールに対する説明には自分の死が必要である部分には伏せた。そもそも人に言う事でもないし。それにウェイバーのリアクションからするとそのことは知らないようだし、情報に関してはこちらがリード、という所だろう。「先に忠告しておくが、その聖杯で願いをかなえる事とかはやめた方が賢明だな。アレは確かに万能の願望器としての機能を見事に果たしてはいる——」が、それもこの特異点にある間だけだ。この特異点が解除される、或いは持ちだせば即座にその機能を失うだろう。万能ではあるが、世界を焼却する為だけに生み出された兵器だ。無駄な欲をかかない方が良いだろう」

その言葉にビクリ、とイスカンダルが体を震わせる。

「……受肉とかダメか」

「使っても特異点が破壊されれば歴史の修正力が本来の流れへと戻ろうとするだろうな。故に使うだけ無駄だ。どうせ覚えていられないだろうしな——」

スカサハの最後の言葉は隣にいる己にのみ聞こえる程度の、小さな声だった。そうか、と思い出す。イレギュラーが消失——それを生み出していた聖杯が消えれば歴史は本来の流れに戻るのだ。そうしたら本来の役者ではない自分も消えるのだろう。死ぬだけでは飽き足らず、存在そのものがいなかった事になるのか。それは——少し、寂しいな。

まあ、なる様になるだろ。

「とりあえず、俺達のこの状況における共通の認識としてゾオルケンの撃破及び第二聖杯の破壊、ってのはいいよな？」

「私に異存はありません」

「ほ、僕にもないよー」

アイリスフィールに遅れる様にウェイバーが言葉を放った。その言葉によってここに存在する三つの陣営の代表者が共に戦う事に同意した。これによって三陣営の大同盟が結成された——おそらく、長い聖杯戦争の歴史の中でも三陣営が同盟し、一つの陣営に対して協力して当たる事はこれが初めてだろうとは思う。悪くはない気分だ、

何せ、歴史にのみ残る英雄達と肩を並べて戦う事が出来る事なんてま
ず存在しない。今、自分はあり得ない経験を得ているのだから。

「……………そうだな。」

頭の中で考えを決めつつ、一息入れる。とりあえず同盟のとりま
め、その話は完了した。となると問題はここからだ。

「……………どうやって倒すか、だけど……………」

視線をスカサハへと向ける。視線を受け取ってそうだな、とスカサ
ハが言う。

「場所に関しては特定している。冬木市の西の方に山があるな？ あ
ちらの方で動きを止めてからは一切移動していない故、アレが目的地
なのだろうな。とりあえず、私に解るのは聖杯の破壊は持ち主を殺さ
ない限りは不可能であり——正直、この数でも運に頼った部分は出
るだろうという事だな」

「……………相手はそこまでですか」

アーサーの言葉にスカサハが頷く。一応は宝具で言う対軍級の
一撃を無傷で切り抜けた相手なのだ。強いのはわかるが——そこま
で恐ろしいものなのだろうか、という所まで考えるとスカサハが考え
を呼んだかのように言葉を放つ。

「アレは人の形をしておるが、もはや中身は完全に人ではない。無数
の入れ替えられる蟲を肉体として、核をどこかに隠して生きている。
たとえ核以外が破壊されようとも、新たに犠牲者を生んで蘇る、それ
だけの存在だ。それに、後天的になにかを植え付けられている。正直
私でも見抜けぬような者には軽い恐ろしさと興奮を覚えるよ」

「完成された聖杯、死なない敵、滅びる世界、未知の力——こりやあ
難敵だな！」

イスカンドルの声は暗い物ではなく、笑い声だった。それに釣られ
る様に笑みを浮かべるのは己と、スカサハと、そしてアーサーだった。
それを見ていたアイリスフィールが軽い、呆れの溜息を吐き、そして
ウェイバーが聞こえる声で呟く。

「……………頭おかしい」

「はっはっはっは！ 然り！ 然りだ坊主！ いいか、我々英霊とい

う生き物は座に登録されるだけの理由を生み出した存在だ。そしてその理由、或いは偉業というものは基本的に普通ではないものだ。そして普通ではない事を普通の者が成せると思うか？ 否、だ。我々英霊という生き物はどこか、普通から外れてしまった存在だ。人格者であり、善人であつても、それは普通の善人とは全く違う、異次元の生物だと思っておけ。それにしてもそつちの兄ちゃんは色々つぶつ飛んでるがな」

「ピクト人ですからね」

「おう、どうしても俺をピクト認定したい様だな、この騎士王様は」

「正直認定したら強くなりそうなので恐る恐るという感じですが、認定したら認定したで個人的に凄く剣が軽くなるので戦うとしたらまらずピクト認定したいところですね」

「お前、表に出ろ」

中指をアーサーへと向けるが、アーサーが笑顔で首を掻く切る動作を繰り返す。お前そこまでピクト人が嫌いだったのか、と、なんだか伝説にもない、個人としてのアーサー王を見た感じで、ちよつとだけ得をした気分だった。

「ああ、もう、セイバー！ 同盟するのにそんな態度じゃ駄目よ。……まあ、話もキリのいいところだし、一旦休憩を入れましょうか？ あまりウロウロしすぎないと助かるわ」

「あいよ……つとそうだ、煙草を吸いたいんだけど——」

「二階の奥からバルコニーに出る事が出来るわ」

「ありがとうよ、ミセス・アイリスフィール」



霊体化したスカサハを伴ってそそくさとバルコニーの方へと移動する。特に迷う事もなくアインツベルンの森を一望できるそのバルコニーでポケットから煙草の箱を取り出し、もう数本しか残っていない煙草を一本、取り出す。それを口にくわえると、横に現れたスカサハが指の先に炎を灯してくる。こりゃいいや、とそれに口元を寄せ、

煙草に火をつけた。

ゆつくりと煙を吸い、転がし、そして吐き出した。

「ふうー——酒でもあれば最高なんだけどな。まあ、なかったことになるとはいえ、略奪とかは流石に主義に反するからな」

「ほう、意外と優しいな」

スカサハの声にそれはそうよ、と答える。

「敵に容赦する必要はないし、殺すなら全力で殺しに行くのが礼儀というもんだ。まあ、相手が戦士であるかどうかは別の話として、持てる力の全て、手段の全てを駆使しながら確実に全力を発揮して殺す——それが戦士の流儀って奴だろ。まあ、それでも人質とか略奪とかは絶対にしないのはそれが戦士の流儀に反するからだな。あとは……」

そうだな、

「——男らしくない」

「それだけか？」

「ああ、それだけだ」

どこまでも、ストイックに自分らしく、馬鹿らしく生きて行こう。そういう人生だ、そういう人生を送ってきた。旅をして、世界を見て、いろんな宗教や人の生活を、文化を見てきた。そしてその結果、いろんなことを学んできた。臥藤門司との出会いもその産物の一つで、アイツは今、世界が無事だったとしたら、どこで何をやっているのだろうかと悩むものはある。また会って、馬鹿が出来たら楽しいだろうなあ、と思う。

「俺さ、運命つてのが大っ嫌いだわ。何かをさせられる事とかもさ。でもさ、インドで修行している時に教えられたんだけど俺の起源？

ってなんか破壊らしいね。もつと闘争とか、戦士とか、そういうらへんだと思ってたんだけど。だから【梵天ブラフマーよ、地マーストラを覆え】をこの若さで覚えられたらしいね——純粹に貫いて破壊する奥義だから」

だから、まあ、何というか。

「やっぱ運命つてあるんかねえ、と思う所があるんだわ。この聖杯戦争中にさ。でもさ、門司の言葉を借りればこれは運命じゃなくて間の

悪さなんだろうな。或いは乗せられてるんだよ、間抜けだからさ。……大体ここまできりゃあ俺にだってオチは見えてくるさ、千里眼なんてなくてもな」

スカサハに言葉を放つ。それは自分の予想の言葉だ。自分がなんであり、そして今、何をめざし、どこへ行くのか。それを予想した言葉をスカサハへと放てば、それを彼女は無言で肯定した。その瞬間、自分が辿る未来が見えた。ああ、やっぱり、というどこか納得できるものがあつた。だけどそれは同時に怒りでもあつた。

「どうなんだろうなあ。予言を受けた英雄とかつてこういう気分だったのかねえ。どんなに全力で戦って、死力を尽くして結果を出しても、結局は敷かれたレールの上を全力疾走しているだけだった、っての——ま、終わる前にする話じゃねえな」

無言で話を聞いてくれているスカサハへと視線を向ける。

「スカサハ」

「なんだ」

これがたぶん、スカサハとゆっくりと喋る事の出来る最後の時だ。だから言わなくてはならない。

「俺さ」

「ああ」

そして、その言葉をスカサハへ放つた。

特異点X日目―4

スカサハへと言葉を放った直後、

――爆音が響いた。

視線をスカサハから外して音源へと向ければ、アインツベルン城のホールがあるべき場所から煙が上がっているのが見えた。それは間違いなく襲撃の証だった。それを確認すると同時に、言葉をかけあう必要もなく、一瞬でスカサハを真似て覚えた鮭跳びの術を持って跳躍し、ホール横の外壁、襲撃によつて開いた穴の向こう側からホール内へと視線を向けた。ホール中央には侵入者の姿があり、ホール奥側にある階段の上には他のマスター達が、そしてその姿を守る様に二体のサーヴァントが立っていた。しかし、問題なのは、侵入者の姿だった。

「お前――」

「――ええ、久しぶりです」

その男は緑色のスーツに帽子をかぶった似非紳士風の男――殺したはずのマスター、レフ・ライノール・フラウロスの姿だった。帽子を取り、綺麗にお辞儀を取って頭を下げた瞬間、

縮地で大地を蹴って加速した。

同時に魔力を放出しながら加速した青が存在し、

影の動きで瞬間的に移動した紫もいた。

三つの違う技術、三つの姿――それでも狙う事、目的とすることは同じであり、そしてその為の判断は素早い。即ち接近しての即殺。襲撃者であれば言葉を聞く前に殺して完全に排除する。相手が隙を見せたならそれは十分すぎる間だ。一瞬の接近と共にロングソードを居合の要領で抜き放って首を跳ね飛ばし、アーサーの刃が体を両断し、そしてスカサハの槍が的確に心臓を貫いて殺した。イスカンドルが護衛対象の前から動かさず守護しているのを確認しつつ、直観的に、三人同時に飛び退いた。

「ああ、酷いではないかア――」

綺麗に解体されていたレフの体がまるで時間を逆行させているか

の様に再生を始めていた。無言でそうやって首を、体を、そして心臓を元通りの状態へと再生させるレフの姿を場にいる全員が無言で眺めていた。あまりにも異様すぎるその姿、サーヴァントたちが武器を無言で構えるのに合わせ、援護に入れるように弓を構え、後ろへと一歩だけ下がる。

「紳士的に応対を求めてみればまるで話にならないか！ はは！ 所詮は劣等か」

「おいおい、英国紳士はどうしたレフ。テメエの事はキツチリ墓場へと叩き込んだはずなんだがなあ」

ぐるり、と首だけを回してレフがこちらへと顔を向けてくる。まだ完全に癒着していなかった首がぐずり、と音を立てながら血が飛び散り、その光景にアイリスフィールが小さな悲鳴を零した。血走った、しかし理性のある瞳でレフはおお、そうだった、と声をかけてくる。

「そう、そうだったのだよ。アレは痛かったぞ。まさかあの時点で殺されるとは欠片も思いはしなかった！ 聖水まで用意して完全に殺しに来るその用意周到さには呆れ果てるしかなかったが無駄だ無駄！ 所詮人間如きではどうにもならない——聖杯がある限りは」

「成程、聖杯の力で蘇生されましたか。となるとこの蘇生能力も魔力的な能力ですね」

「散らせば消えて死ぬ、と。殺し続ければ問題なさそうだな——【原初のルーン】よ」

「ふ、ふははははは！ そうか、まだやる気か？ いいぞ、相手をしてやろう！ どうせすべては無駄なのだからなあ！ 短い生を楽しむむが良いい！」

「お前、そんなキャラだったのか。心底握手しなくてよかったと思うわ」

言葉を吐き捨てた瞬間、スカサハとアーサーが一瞬で加速した。殺意を武器に込めながら一瞬で得た加速をレフへと向かって殺す為に放つ。再び心臓と顔を両断する為の一撃を放とうとした瞬間、レフが閃光に包まれながら魔槍と聖剣の一撃を一瞬で弾いた。その中から何が出現するのが見えるが——出現させるのを待つほど悠長な

事はやらない。

「スカサハ！」

「セイバー！」

「ライダー！」

マスターの声にこたえる様に魔力の消耗が行われ、スカサハが跳躍しながら魔槍を足の甲にのせ——アーサーが両手で握った聖剣に破壊と希望の閃光を集め——そしてイスカンダルが雷鳴を纏いながら雷牛を戦車を引きながら走らせた。

そして、まったく同じタイミングに放たれた。

三方向からの同時攻撃——宝具による超狭み撃ち攻撃が輝くレフの体へと吸い込まれるように叩きつけられる。仲間への余波などを考えれば多少威力が下がっていることは否めないが、それでも宝具という時点で凄まじい破壊力を保有しているそれが一齐に叩きつけられる状況は神話でもない限り早々見る事の出来ない光景だ。しかし、攻撃を一点に集中させられたレフの姿は輝き——そしてはじけた。

「なんと、これはまさに奥様もウツトリな……」

「ライダー——！！」

光を弾いて出現したのは黒い柱の獣だった。黒く、生物の様に脈打つ肉を持った、獣の柱。いたるところ赤い目玉を持ち、そして大地と癒着したような姿を見せる。それはあまりにも冒瀆的で、そして人間としては、生物としてはありえない、あつてはならない存在の姿だった。その存在から感じさせる“悪”はマキリ・ゾオルケンが放つていた感触と全く同じものであり、同種の存在であるようにさえ感じさせる。だがそんな考案よりも、今は目の前に敵がいる事が重要だ。故に迷う事無く宝具による攻撃が終わった瞬間、反動の時間を埋める様に、

「——【天を翔ける、太陽よ】ッ！」

太陽弓からの一撃を放った。一瞬で閃光と化した太陽の一撃が燐光をまき散らしながら出現した怪物に衝突し、炎で包みあげながら爆炎を生み出すことなく熱によって焼いて行く。が、そのむき出しの目

玉は焼かれた次の瞬間には即座に再生し、そして無事な姿を見せていた。

「無敵なのは卑怯だと思います!!」

「無敵ではない——質量が凄まじすぎて削り切れていないだけだ」
言葉と共に三十近い真紅の魔槍が一気にレフの体に突き刺さり、爆裂する。同時に叩き込まれた聖剣が一気に体を両断する様に魔力が抜けて行くが、その傷口も即座に再生する。まるで努力を嘲笑うかのように出現した怪物は君臨し、反撃すらせずにその視線だけで笑っていた。此方が困っているのを理解して見下している——殺したい。激しく殺したいこいつ。だけどその圧倒的な質量を一瞬で削り取れるだけの武器がない。

「めんどくせえなこいつ!」

バックステップで距離を生んだ瞬間、レフの邪眼が輝く。精神の間をぬったモラルを砕こうとする精神破壊の光がその光景を見ていた者たちの中へと侵入し破壊しようとする。迷う事無く精神への干渉をインドの修行で習得した透化技術によつてあつさりと受け流しつつ、生命力を燃焼させたスカサハに対する魔力供給を増やす。アイリスフィールやウェイバーへと意識を割くだけの余裕はない。此方も全力でレフの殺害に力を入れないと殺されるからだ。

「[原初のルーン]よ! 刻めッ!」

投擲された真紅の魔槍が幾何学模様を描くように飛翔し、自動的に突き抜けながら何度も刺さる。そのたびに新たな魔槍をスカサハが生み出し、投擲しながらも接近、車輪の様に回転させながら深々と斬撃を刻んで行く。アーサーと連携する様に、攻撃の流れが尽きない様に動くスカサハの攻撃を確認しつつ、レフの目に光が宿るのを見る。

「そこだ——」

動きの合間を縫う様に太陽の矢を放ち、瞬間的に目玉を四つ、連続で貫いて潰す。放たれるはずだった閃光はそれによつて一定の範囲を捉える事が出来なくなり、スカサハ、アーサー、イスカンドルのいる空間が攻撃のない安全地帯と化す。それに合わせる様に聖剣と魔槍が輝き、瞬間的に薙ぎ払う出力で放たれる。赤い閃光と希望の光が

アインツベルン城を破壊しながら突き抜けて行き、レフの全身を飲み込んだ。

しかし、攻撃を食らっても、レフの姿は消える事がない。

「これは……少々厄介ですね。ロンゴミニアドを持っていれば多少は楽でしたが——」

アーサーの言葉を嘲笑うかのように獣の鳴き声の様な、心を蝕む音が響いてくる。それが醜悪な怪物の姿をしたレフから放たれたものであると気付くには数瞬必要とし、怒りで頭の中が支配されそうになるのを堪え、太陽弓を構え直す。相手が凄まじい質量を兼ね備え、削っても削っても意味がない、そんな強大な相手に相対してしまった場合、

「——まともに相手にならない敵が現れた場合はどうする！」

答えは雷鳴だった。何時の間にか俺を除いたマスターのそばに着地していたイスカンドルは雷牛とそれに牽引させている戦車の上に載っており、ウエイバーとアイリスフィール、その護衛を戦車の上に乗せていた。

「まともに相手をせん事だな！」

大正解。

こういうのは相手にするだけで負けなのだ。なのでまず相手にしてはいけない。少なくとも軍略を手にし、王の地位にある程の賢人であればその程度は余裕で解るだろう。という訳で、これ以上レフの相手をまともにするつもりは自分も、無論英霊達も一切存在しなかった。イスカンドルが天井を粉碎しながらアインツベルン城から離脱して行く。それを確認しつつもアーサーが聖剣を輝かせ、それを振り下ろす。

聖剣の輝きがまるで壁の様に面を覆い尽くし、スカサハ、自分と、そしてアーサーを隔てる。

「ばあーか！ ばあーか！ お前出落ちした癖に偉そうなんだよばあーか！ エセ紳士ー！ やーいやーい、お前目玉だらけー！」

「下らんことを言っていないで離脱するぞ」

スカサハが素早くアーサーを掴み、跳躍するのに合わせて此方も大

きく、イスカンドルが貫いた天井から逃げる様に跳躍する。逃がす気が一切ないレフが追撃の様に目を光らせ、漆黒の霧が追いかけてくるように邪眼から放たれる眼光がもはやレーザーの様に襲い掛かってくる。が、振り返りながら太陽弓から閃光を放ち、空中で迎撃しつつその爆風に乗って更に高く跳躍し、上空で待機していた戦車の端にかまると。

「これ、元々余を含めて二人乗りだから定員オーバーなんだが」

「ちよ、ちよつとお牛さん疲れてる表情を浮かべていないかしら」

「高度！ 高度を上げろー！」

騒がしくなってきたなあ、と思いつつも一発矢を放ち、生命燃焼しながら追撃を迎撃する。合わせる様に召喚された無数の真紅の魔槍が檻の様に重ねられ、壁となつて攻撃を阻み、

「む、来るぞ」

スカサハの言葉に首を傾げ、

「あ、切嗣がこれから城を爆破するって」

アイリスフィールの言葉にあつ、と声を零して、

——少しずつアインツベルン城から離れながら、その光景を眺めた。

一瞬で閃光に飲み込まれ、大爆発と共に炎と土砂を巻き上げるアインツベルン城の姿を。おそらくは支柱や土台部分にまで爆薬をかませていたのか、大地がひっくり返る様にアインツベルン城は大爆発を起こしながら爆炎に飲み込まれて崩壊をはじめ、レフの姿を一瞬で飲み込みながら逃げ場のない災害を生み出していた。中にいる存在を絶対に外に逃がさず、爆殺しながら生き埋めにするというコンセプトの匠の技を感じさせる見事な爆破解体だった。

自分でも拠点テロをこなしてきたが、ここまで芸術的なものはなかなかお目にかかれない。

やはり衛宮切嗣——我がライバル。テロリスト的な意味で。

スカサハが場所を作る為に霊体化しているが、それでも戦車の上はギリギリという状況だった。アーサー、お前も霊体化しろとは思っても、やらないという事は出来ない理由があるのだらうと思ってお

く。ともあれ、その為引き続き戦車の端から片手でぶら下がるとい
状況を継続しつつ、アインツベルン城跡からレフの姿が出現しないの
をしつかりと、【魔境の智慧】で拝借中の【千里眼】を通して確認する。
「また出オチしやがったなあ、あのエセ紳士は……まあいいや」

ため息を吐きながら戦車が徐々に、徐々に高度を落としてゆく。そ
の先に見えるのはアインツベルンの森の広場——アーサーが迎え
に来てくれた地点だ。

その中央には待ち構える様に黒いロングコート姿の男が立ってい
た。

衛宮切嗣、聖杯戦争が始まって以来、一度も目撃する事のなかった
男だ。

殺す為には手段を選ばず、同盟の時でさえ姿を現さない暗殺者が、
漸くその姿を現した。

森の広場に到着すれば衛宮切嗣の姿がそこには見えた。オルガマリーの資料で確認した通りの男の姿だった。その片手が油断なくコートの中の銃を握っていることを確認し、やっぱり此方側の人間である事を再認識し、息を吐きながら生命の活性化を、そして精神を整える。戦車から降りて振り返ったところで、もはやアインツベルン城の姿は跡形もなく見えなくなっていた。

「派手にやったなあ」

「記憶は残らないんだろ？ それにここで何をやろうとも聖杯に届かないんだったら隠すのも殺すのも無駄だ。さっさとこのバカげた事態を終わらせて元の聖杯戦争に戻った方が遥かに有意義だ……違うか？」

「違わないな」

切嗣のスタンスを確認し終わる。切嗣としてはさっさとこの状況を終わらせ、本来の聖杯戦争に戻りたい、という所なのだろう。それに関しては否定するところは一切ない、むしろ応援しているし協力だってする。だが問題となるのは敵の存在についてだ。

「アレに関しては心配する必要はない。何であるかは解らないが、陣取っている場所は大聖杯の安置されている大空洞だ。この聖杯戦争のシステムの根本と言っても良い場所だ——この状況の解除がリセットへと繋がるといふのなら大聖杯そのものを超高出力の魔力で破壊する。計算が正しければ冬木そのものを消し飛ばすだけの魔力が貯蔵されている筈だ。それでこちらもろとも相手を吹き飛ばして全てをリセットする」

「耐えられた場合は？」

「令呪を使って未来へと攻撃を叩き込めば良い。これで倒せないといふのならもはや勝ち目はないと思うがな」

切嗣に発案は実に合理的だった。この状況をクリアする事によって元の歴史へ、正しい状態へと回帰するといふのであれば、どんな無茶無謀、無理をこなそうとも正しい状態へと戻るといふ事を示してい

る。たとえば、それが聖杯戦争の根幹のシステムである大聖杯への干渉であろうとも、特異点が消失すれば元の状態へと戻る。英霊や人間、幻想種であろうとも絶対に耐える事の出来ない大聖杯の爆弾、それを使って冬木ごと目標を全て消し飛ばせば、後は歴史が元に戻るだけ、実に合理的なやり方だ。しかも俺好みのやり方だ。

「あの……それって、僕達消し飛ばない……?」

「……? 今はそうかもしれないが状況が解決すれば元に戻るんだろう? だったら問題はないはずだ」

「……」

合理的ではあるが——狂った人間にのみ取れる行動ではある。つまり、ウェイバーの様に比較的普通の感性を保有する者からすれば恐怖の手段でしかない。状況が終了してから蘇るから——なんて事を言われても恐怖を感じない訳がない。死、という感覚に対して恐怖を感じても動じないのは戦士として訓練された者か、或いは生粋のキチガイぐらいなものだ。英霊達は良い。アイリスフィールも聖杯として生まれる運命だったから恐怖の色はない。その護衛もそのようだ。俺も、スカサハも、アーサーもイスカンドルも切嗣も恐怖の色は見せない。生きる事とは死と向き合う事ではあるからだ。

だけどこの少年、ウェイバー・ベルベットはそういう世界とは比較的無縁な様だ。だからその考えに明らかに怯えているのが見える。だからと言うべきか、戦車の宝具を消したイスカンドルが口を開く。「あー……その、なんだ。余の宝具は固有結界であり、その中にその大聖杯と敵を取り込めば良からう。無限に広がる荒野であれば被害もなく見事に破壊する事も可能であると余は思うんだが?」

「ならその案で良い。むしろ逃げ場がないからそっちの方が良いな」

「という事でお会い頭に大聖杯ごとゾオルケンを固有結界に取り込んで大聖杯テロって事で?」

「ああ、それで行く」

そこで話を決め、軽く戦術に関して同意する。が、それを話しながらも不安に感じる事がある為、片手を切嗣に見える様に動かせば、向こうもそれに反応する様に軽く目を広げ、そして素早く手の動きで、

無音で返答してくる。その手の動きを見て、ああ、やっぱり理解できるのか、と納得する。まあ、特殊部隊とかは必須の技術だし、戦争に慣れている人間なら当たり前の様に覚えているか、と周りが怪訝な視線を向けているのを無視しながら軽く、切嗣とだけ、手の動きでやり取りを数秒間行い、会話を完了させる。

「お主ら何をやってるんだ」

「新世代のインドカラテ」

「なんと、東洋とアジアの神秘の融合か……！」

「ライダー、お前実は理解しててわざと言つてない？」

イスカンドルが誤魔化す様に豪快な笑い声を上げ、それを聞いていたアーサーが呆れるような視線を作りつつも、視線を全体へと向ける。

「いい加減、動き出しましょう。刺客を送り込まれたという事は此方の動きが把握されているという事です。経験上、こういう状況は時間を掛ければ掛ける程後手に回るのみ——早く拠点に踏み込んで大元を潰すのが一番の対処法です。そうしない限り此方がジリジリ潰されて行くものです……ええ、非常に懐かしい話ですが」

「おう、喧嘩売ってるなら買うぞ貧乳」

中指を此方へと視線を向けているアーサーへと向ける。何時か、どこかで、絶対にケリを付けるから待っているよコンチクショウ、と思いつつもイスカンドルがウェイバーを掴み、そしてその姿を己の肩の上へと乗せる。その行動にウェイバーが文句を言い始めているが——その姿は本気で怒っているようには見えない。なんというか、じやれあつているとでもいうのが正しい様な、そんな感じがある。イスカンドルに対して心が近づいているとも表現できる。

たぶん、最初にあつた頃のウェイバーでは一緒に戦場に行くことなんて考えようともしなかっただろう。そう考えると誰もがずっと、そのままでいられるわけではないのだと、そう思わされる。自分も、この聖杯戦争中に色々気づかされ——そして変わっているものがある。間違いなくこれから向かう先、これが最後の戦いとなる。油断も、容赦も出来ない。まだ残っている英雄王ギルガメッシュと言峰綺

礼の存在があるが——あの二人が来ることは絶対ないだろう。だから他に心配する事はない。あとはこの最後の令呪、この切りどころを判断するだけだ。

「さて、もう準備がいいなら目的地へと向かうけど……どうする？」

切嗣の言葉に反対する者はいない。もはや時間は味方ではなく敵だった。整える、なんて悠長なこととは言っていられず、即座に行動を開始する必要があった。故に迷う事無くここから移動を開始した。



アイリスフィールとその護衛を置いて、マスターとサーヴァント達だけのパーティーで真っ直ぐ、大聖杯が存在するという大空洞へと向かって移動する。その移動方法もはや選ばず、直進、屋根の上を平気で移動する様になる。最初は警戒していたが、レフがこちらの事を見つけたという事は、どっちにしろバレているという事なのだ。シャドウサーヴァントが迷う事無く此方へと向かって直進する姿を確認する限り、もはや排除する為に動いていると表現しても良い。故にこちらも少しづつ、消費魔力は増えていた。宝具解放の直後からの連続戦闘だが——英霊達の戦闘はまるで、不利である事に慣れている様な、そんな華麗さがあった。

いや、見た目そのものは全盛期だが、目の前にいる英霊達はその人生の経験を引っ提げてこの場に登場しているのだ。その結末までも理解し、そして戦ってる——故に不利な状況程度戦い慣れている。物量と言う地獄の前に宝具の解放を行わず、そのまま正面から殺しに行く。シャドウサーヴァントが六体一気に出現しようとも、その動きには淀みはなく、アーサーは一撃で体を両断し、スカサハは一撃で霊核を貫き、そしてイस्कन्दルは頭を叩き割る。クラスが、歴史が、そして時代が違ってても、英霊が英霊である事に違いはない。

どんな劣勢であろうとも、最強の幻想である事に違いはないのだ。故にウェイバーと切嗣と言う接近戦においては足手まといになりかねない者を連れていようとも、大聖杯の存在する大空洞へと向かう

足は衰えず、敵を蹴散らしながら確かに前進していた。

その結果、大空洞付近に到達するまでの時間はそうかかりはしなかった。そもそも英霊という人間を遙かに超えたスペックを持つ存在の基本的なスピードで移動し続けたのだ、冬木市内であればどこへだろうとも短時間で到達できる。

それでも、まるで動きを邪魔するかのようには、シャドウサーヴァントが襲い掛かってくる。

それらを一蹴し、そのまま見えた大空洞の入口へと飛び込む。

「スカサハ」

「心得た」

名を呼ぶだけで此方の意図をくみ取り、スカサハが反応する。素早く魔槍を何本も生み出したスカサハがそれを檻の様に交差させ、大空洞へと入る為の入口を塞ぎ、追加する様に「原初のルーン」を発動させる。魔槍と組み合わせさせたルーンの効果により、結界が出来上がり、侵入と逃亡を閉ざす壁となる。結界の向こう側からシャドウサーヴァントがガンガンと力の限り叩いてくるが、それを無視して大空洞の奥へと、ゾオルケンが待ち受けているであろう場所へと向かって直進する。

その進路上には再びシャドウサーヴァントやスケルトンの類が出現するが——まるで損耗を狙うかのように放たれる雑魚程度では止まる事さえもなく、そのまま一気にダンジョンの様に続く大空洞の通路を抜けて行き、

そして、そこへと到達する。

到達した冬木の大空洞最深部、大聖杯があるという場所は——一言で表現するなら気持ち悪いという言葉が一番しっくり来る。広い大空洞の奥には目に見える程巨大な巨大な魔力の塊が存在していた。いや、そうとしか表現が出来なかった。そもそもからして聖杯と言う形さえしていなかった。大聖杯と言う言葉はただの記号でしかなく、目の前に見えているのは黒い泥——ひたすら濁った魔力と泥だった。赤く、そして黒く、考えられる限りの悪意と憎悪を、悪を感じさせる、そういう魔力の塊だった。目撃するのと同時に理解させられ

る。

これが聖杯の本質だと。

そしてこれが本質であるが故に、聖杯は絶対に正しく使えない、と。それを見た直後、崩れ落ちる音がした。視線を横へと向ければ、そこには膝を折る切嗣の姿があった。その口の中では馬鹿な、という言葉葉が零れる——どうやら聖杯に対する願いは強く、そして切望していたらしい。それだけに今、目撃してしまった光景に深い絶望を抱いた。その気持ちは理解できないも、感じられる驚愕は理解できる。今、目の前に存在するこの光景は、あつてはならない類のものだ。明確に、存在してはならないと断言する事の出来る絶対悪。

それが、今、目の前にある大聖杯の感想だった。

「——好奇心、猫を殺すとはよく言ったものだ。知らなければ絶望する事もなかったのに、好奇心を働かせたばかりにいらぬものまで知ってしまう。救世を求めても世の中にはどうしようもない事がある。たとえば、今の様に、な」

大聖杯の前の空間に、ゾオルケンが立っていた。その表情に浮かんでいるのは同情の色であり、そして悲しみの感情だった。そう、彼は今、心の底から此方の存在を憐れんでいるのだ。

「大聖杯の真実を知り、ここで大聖杯を破壊しよう。私を殺そう。私の持っている聖杯を破壊し、この特異点を突破しよう。それは幸福な結末の样に見えて違う。既に結末は選択されているのだから、回避のしようはない。この状況を完璧に切り抜けてもこの特異点での記憶は全て喪失されるのが世界の法則だ。■■■■も■■■■も、本来の歴史と乖離する様な流れは好まないだろう。聖杯の干渉がなくなれば元の流れに戻り——全てを忘却する」

まるで道化の様だ、とゾオルケンは表現する。

「救いがたい。余りにも救いがたい。断言しようこの場にいる者の願いは一つも叶わない、と」

それはゾオルケンから放たれる偽りのない真実だった。本人が心の底から信じている言葉だった。

「この聖杯に万人を救う事は不可能だ。なぜならばこれは破壊と殺戮

でしか願いを叶える事が出来ない。この聖杯で祖国を救う事は出来ない。それはただ新たな人理定礎の崩壊を生み、そして特異点を生み、世界の未来を滅ぼす一端にしかならないからだ。この聖杯で運命を覆す事は出来ない。なぜならこの聖杯にはそんな能力はないからだ。受肉？ したければするが良い。ただし、この溢れだす怨念を乗り越えるだけの自我と狂気を持っているならばな。正道を、そして王道を歩むものにこの泥は絶対飲み干せない。或いは彼の英雄王であれば話は違うだろうが——純粹な人間には不可能だ」

故に、ゾオルケンは答える。

「——願いを捨てろ。ここを乗り越えても冬木は滅び、人の未来は潰える。お前たちの願いは絶対に叶わない」

それは絶対の真実であり、宣言だった。だから答える。

「——3画目の令呪を持って命ずる——」

最後の令呪で宣言する、

「全ての制限を振り払い、全力を持って敵を滅しろ、スカサハ！」

スカサハに課せられた心理的、肉体的リミッターの解除を。そして全力で眼前に敵を滅ぼすという事を。それに応える様にスカサハの姿に、薄いベールが頭から被る様に追加される。美しさの中に凜としたかつこよさがあるその姿を晒しつつ、スカサハが二本の魔槍を構える。

「任せろ勇士よ——このスカサハ、死を知らぬ。故に敗北はないツ！」

「抗うか。それもいいだろう。所詮は泡沫の夢だ。私にとって、そして無論——お前にとつても、だ」

この場で誰よりも救いが無いのは俺だって理解している。自覚している。だけどそれでも、

死に場所を選べるほど上等な生き物になつたつもりはない——それに簡単に終わりを迎えるつもりもない。聖杯が目の前にあるのだ。それを使えばまだ、どうにかなるのかもしれないなんてこともある。だから、教える。

「折れた心はもう折れないってもんさ。覚悟なんてものもなければ別

に信念も誇りつてもものもないさ。蛮族上等——でも、最低限、やら
かした事のツケは払わないとな」

「天を翔ける、太陽よ」を構える。その動きに合わせる様にイスカ
ンダルが剣を抜き、そして戦車を呼び出した。それに騎乗しながら横
へと、前衛へと出る。ウエイバーは後ろの方で大聖杯の気に当てられ
たのか、まともに動けないようだったが、

「まあ、此度の聖杯戦争では割と満足するぐらいには楽しませて貰っ
たからな——この程度で引いておつては征服王として情けなさす
ぎるわ。無論、余も加勢しよう。その為の同盟であり、戦友であろう」
イスカンドルの言葉に笑みを浮かべ、ゾオルケンへと視線を向け
る。その姿は徐々に、徐々に光に包まれて行く——あのレフと同
じ、怪物へと変化する時の前兆だ。故にこれから、ゾオルケンもまた
姿を変化させるのだと認識し、

聖杯戦争、最後の戦いを始める。

特異点X日目―6

「――我が無双の軍勢を見よ！ 肉は滅び、魂は召上げられ！ それでもなお余に忠義する伝説の勇者達よ！」

大空洞の領域が一瞬で変化する。ひたすら邪悪さと息苦しさを覚える空間はイスカンドルを中心に変化してゆく。青空の見える、無限の荒野へ。その心の故郷、その大地へと変わって行く。大聖杯を、その泥を、醜悪な怪物へと変貌するゾオルケンを、自分を、仲間を飲み込んで無限の荒野を生み出す。そこに、彼方から参陣する様に出現する姿がある。

「時空を超えて我が召喚に応じる永遠の友達よ！ 今こそ全力を尽くす時！ この一戦に世界の興廃あり！ アイオニオン・ヘタイロイ【王の軍勢】よ！ 今こそ絶望を征服ぞ……！」

イスカンドルの咆哮の様な呼びかけに、王の――朋友の呼びかけに臣下が応えた。爆裂する様な歓声、そして歓迎の声、歓喜の声が荒野と大砂漠に熱風と共に突き抜ける。スカサハでさえ苦笑を漏らすほどの熱狂がイスカンドルを呼び込んだ。イスカンドルの声に応える様に咆哮が響き渡り、その号令に従ってイスカンドルの武勇すらも超えるような戦士が、知力の主が、魔術の使い手が、かつてイスカンドルと絆を結んだ永遠の朋友達が参戦し――突撃する。

誰もが一人一人、英霊としての格を保有する者達に合わせ、自分とスカサハも前へと出る。戦いと言う規模を超えて、イスカンドルが呼んだ勇者達と合わせれば――戦争が開始した。大地を蹂躪する様に疾走する絆の勇者達と共に、大地に出現した醜悪な柱の怪物へとめがけ、武器を握りながら全速力で突貫する。無論己も、太陽弓を手に、縮地で一気に踏み込む。ここで後ろへと下がるなんて選択肢はなかった。

「一番槍は貰った！」

「なんの、我こそが一番槍！」

「一番槍をいただく！」

「一番槍は私のものだあ――！！」

十人ほどの勇士が軍団を突き抜けて槍を手に一気に前へと突き進む。それぞれが瞬間移動に近い超高速移動技術を保有しており、一番槍を名乗り上げるにふさわしいだけの速度を一瞬で見せ、ゾオルケンへと向かって一直線に跳びかかる様に突き進む。それに負けぬ様に己も、縮地で移動しながら横切りつつも、矢を放ち、その巨大な姿を焼く。そして、槍がその胴体に突き刺さると同時に、

大地が鳴動する。

鳴動しながら黒い風がゾオルケンの周囲を包み込む様に発生し、一番槍を名乗り上げた勇士達を飲み込み——その姿を一瞬で骨のみに変えて、消滅させた。ゾオルケンはレフとは違う。一片の慢心も油断もなく、慈悲として殺そうと本気で戦っている。故に繰り出す攻撃は必殺級で、そして最善の攻撃で殺しに来る。レフとは違い、待つなんて愚かな行動には出ない——完全に殺す気で襲い掛かってきているのだ。それでも、

「おい、馬鹿が死んだぞー！」

「一番槍なんかにこだわってるのが馬鹿なんだけど……なあ？」

「——応、馬鹿との分まで頑張らにやあならんなあ！」

そんな絶望的な破壊力を目撃したとしても、戦意を喪失する存在なんてものは一人として存在しなかった。そもそも、この場にいるイスカンドルの友達全てが英霊であり、その呼びかけに答えてやってきた存在なのだ——逆境の中でこそ、その魂は何よりも輝く。であるなら、

世界の終焉、その舞台でこそ英雄の魂は最も輝くに違いない。

故に号砲を響かせながら死へと向かって突撃が発生する。圧倒的な質量に対して圧倒的な物量を叩きつける、という先ほどまでのシャドウサーヴァント戦とは全く逆の立場の出来事が発生していた。だけどそれを気にする存在などはいなく、熱狂のままに血液を沸騰させ、経験を通して冷静に思考を澄ませ、そして持てる力の限りで前進する。槍を、剣を、矢を放つ姿がドンドンと巨大なゾオルケンの姿へと向かって直進する。

反応する様にキュイイ、と獣の鳴き声が響き渡る。地響きとともに

空間を砕かんとする衝撃が走り、振り払う様に黒い風が襲い掛かってくる。飲み込まれてしまえば絶死の風、その前に動きは怯む事もなく、直進し、飲み込まれながらも英霊達は腕一本になった状態でも武器を巨大な異形の姿へと突き刺す。ゾオルケンの姿に穴が、傷が、攻撃が叩き込まれる。クラスが付与されていない無色の英雄達の攻撃は宝具のランクには届かない。が、それでもゾオルケンの姿に触れ、傷つけている姿は英雄のものでしかない。

が、直後、薙ぎ払われる。黒い風が平等に死を生んで存在を飲み込む。数十の英霊が一瞬で飲み込まれ——数百の姿が殺す為に一斉に押し寄せる。それを再び潰す様に、邪眼から放たれる邪光が見た者全てを精神から焼き殺さんとする。精神的な防御手段を持たぬものが一瞬でその全てを焼き尽くされ、形すら残さずに蒸発して行く。だがそれを持つ者にとっては、

黒い風が来ない、風の時でもあった。

「原初のルーン」よ——！」

魔力の塊がルーンと組み合わせ失われし時代の魔術を描く。それによってスカサハが呼び出すのは赤色の魔槍と黄色の魔槍だった——ルーンを通して契約してある、或いはストックしてある英霊の武装をピンポイントで呼び出し、限定的に支配する。或いはその技術の、神話の祖であるからこそ許される横暴。赤の魔槍と黄色の魔槍、魔道破壊と不治の呪いを持った魔槍が弾丸の様に放たれ、深々と怪物の体に突き刺さる。途端に生み出される直前だった黒い風が全て霧散し、消える。その光景に合わせる様にゾオルケンの口もないその体から悲鳴のような冒濺的な鳴き声が溢れだす。二種の魔槍の内、片方は再生と共に徐々に押し出されつつあるが、もう片方の魔槍は突き刺さったまま一切の変化を見せない——再生が始まらない。

それを勝機とみて、英霊達が突き進む。

「遥かなる蹂躞制覇」オ——！！

英霊の集団に交じる様にイスカandalもまた雷鳴を響かせながら集団に交じり、先頭を突き抜ける様にゾオルケンへと向かって特攻して行く。

傷口を広げる様に、抉る様に、潰して広げる様に雷鳴が響き——
ゾオルケンの肉を貫いた。抉り、焼き、そして更に奥に不治の呪いを
持った魔槍を突き刺した。奥へ、奥へと抉りこまれる魔槍の呪いが全
体へとルーンの力によって浸透し、やがて、その体そのものから再生
能力を奪って行く。魔術師殺しの槍がその体から抜けても、一気に逆
転した形成を押し切る為にも英霊達の攻勢は更に苛烈なものとなっ
て蹂躪して行く。

英霊達の合間を縫う様に自分も無論攻撃を放つが——規模が違
いすぎる。

それは何年、何十年、そして生涯を戦争に捧げた戦士達の戦いだっ
た。何十、何百、何千、何万にも及ぶ戦士達が二つの陣営に分かれ、連
携しながら敵を殺すという歴史の中、それをずっと戦い、経験し、そ
して支え続けた人生を送った者達の戦争。遠距離から一気に火力で
殺す現代の戦争事情ではたとえ紛争地域で死んだとしても絶対に経
験のできない、濃密な接近の死を理解する、戦争の勇士達の戦い。

それは、自分が今までの人生で経験した事とは次元の違う戦いだっ
た。

仲間が目の前で骨になって消えても、それでも前進しながら武器を
体に突き刺す熱狂、狂気。正気でありながら絆を持って勝利を信じ、
次に託す。仲間を託す。正しく勇者と呼ぶのにふさわしい英霊達の
戦場だった。笑い、怒鳴り、そして突撃する。ただそれだけが繰り返
返された闘争の日々によって培われてきた経験は現代の人間が経験
できるそれとはまったく違う、異質なものになる。

故に、自分が参戦し辛い状況が出来上がっていた——だからこそ
見えるものもある。

「来るぞ——！」

言葉と共に空が暗雲で——黒い風によって覆われる。それが広
範囲を覆う様にゆっくりと空から、徐々に潰すように落ちてくる。そ
れはゾオルケンを中心に押し潰す様に、集団を飲み込む様に破壊する
死の風であり、その規模から逃れる術はないと断定しても良い。故に
逃げ場のない勇士たちは死のその前に、殺す為に自殺にも似た特攻を

果たす為、正面から得物を叩きつけて行くイスカンドルの友達は一切死を恐れずに前進する。その先に勝利があると信じている故に。

それを嘲笑うかのように異形のゾオルケンが勇士たちを蹂躪する。地平線を黒が埋め尽くすような光景が広がって行く。それから逃れるために一気に後ろへと下がろうとも、限界が来るのは見えている。そもそも逃げる事の出来る類の攻撃ではないからだ。相手は間拔けな姿をしているが——その姿を取っても十分なだけの理由があるのだ。

「刺し穿つ——」

ルーンに加護と智慧による強化が加わり、凄まじい勢いで魔力の込められた魔槍が闇を切り裂きながら一瞬でゾオルケンに突き刺さられ、そうやって出来上がった道にバックステップを取りながら新たな魔槍を取り出し、ありつただけの魔力と呪いが込められる。

「——【貫き穿つ死翔の槍】 ツ！」

空間と時間を貫いて呪いの魔槍が異形の体に風穴を開けた。僅かな隙間、僅かな成果——だった。直ぐに死の物量がそれを埋めようとして、閃光と共に転移した姿がそこに出現した。それは輝ける希望を両手に聖剣の形として握り、完全に放つ準備を、今までを超える最高の魔力と破壊力を持って降臨していた。両手に輝ける聖剣を握りながら、

——騎士王アーサーは令呪のバックアップと共にそれを振り下ろした。

「【約束されし勝利の剣】アアア——ツ!!」

希望を形とする神造の兵器——宝具が閃光と共に弾ける。完全な意識外からの登場による奇襲で放たれた【約束されし勝利の剣】は意識外からの攻撃であったが故、完全に踏ん張る事も、堪える事も出せずにゾオルケンに【貫き穿つ死翔の槍】によってあけられた穴から侵入し、その体内全てを蹂躪する様に溢れながら光に変えて消し飛ばして行く。光の粒子へと変換し、姿を消し飛ばしながら聖剣を構え直していた。

「——残念ながら挫折や夢破れる事等当たり前の事です。確かに聖

杯でどうにもならないと聞かされれば心も折れそうになりますが、それでも腹立たしいですがその準ピクト系蛮族の言う通りです。挫折や悲劇なんてものは何度も経験しているものです——折れた心は折れません、味わっている以上これ以上折れる事は不可能ですからね」

経験した事がある。それ故にもう折れる事はない。それだけの簡単な話だ。アーサー王は悲劇の王だ。そして衛宮切嗣もまた、この道を選んだのは多くの悲劇を経験し、その道を歩み続けてきたからに他ならない。それでも挑戦しているという事は折れてから再び立ち上がった、と言うだけのシンプルな話だ。

願ったけど駄目だった——じゃあ次の手段に期待しよう。それだけの簡単な話。

「ええ——英雄を舐めましたね？」

光の粒子に飲まれながら徐々に、徐々にゾオルケンの姿が崩れて行く。その凄まじいまでの質量も軍勢と、そして令呪による強化を得た聖剣の前に屈した。その敗因は間違いなく英霊——というよりは精神力を甘く見たからだろう。目の前に希望を見せ、そしてそれを潰すところを見せれば、今までとこれからが完全に無意味だと知れば、それで心が

自分の様に折れると考えてしまったのが敗因だろう、か。

そこから数秒間、消え行くゾオルケンの姿を眺め——そしてその姿が完全に消えた所で歓声が爆発する。

イスカンダルの号令に参陣した英霊達が、この場で戦った者全てが歓喜の声を上げ、勝利に祝福を響かせる。

「これで……後は聖杯を壊せばいいのか……」

眩きながら太陽弓を下ろそうとして、気づく。

——ゾオルケンの持っていた聖杯が見えない。

「まだ終わ——」

言葉を放とうとした瞬間、

——全てを黒が一色に塗りつぶした。

――作戦は完璧だった。

蟲による盗聴を警戒したからこそ切嗣にはハンドサインで作戦を無視しろ、盗聴の恐れ、とサインを送った。そしてそれに切嗣は応えた。戦意を喪失、心が折れたフリをして、そのまま奇襲に備えた。そして完璧なタイミングで宝具を令呪による強化とサポートを込めて放ったのだ。そこに一切の不備はない、連携は改めて言うが完璧だった。

だけど、状況は変わった。

瞬間、様々な動きが発生した。まず感じ取ったのは英霊達がまるで肉壁になるかのように魔力を放出し、迷う事無く特攻する姿、天が割れる光景、宝具の輝き、地が砕けるような地鳴り、そして押し倒されて大地に背中を打つ感触だった。柔らかい物を感じると思ってた視線を前へと向ければ、スカサハが覆い被る様に押し倒してきているのが、その背後では黒い風の接近が見えた。それを見て理解した。スカサハが身を挺して守ろうとしている事が。そしてそれに抵抗しようとすれば自分が真っ先に死ぬという事実が。

「――すまん」

「気にするな。影の国へ会いに来てくれるのを待っているぞ」

直後、黒い風が落ちてくる。スカサハの体、そしてルーンが発動し、それが壁になる事で黒い風がこちらの体には届かない――が、それも拮抗するのは数秒ほど。聖杯という圧倒的出力を保有する存在の攻撃がそのまま堪え切れるはずもなく、スカサハの姿が風に飲み込まれ、直後、此方の体にも襲い掛かる。

寸前、固有結界の外へと弾き出された。

「があっ――」

血と息を吐き出しながら大地に落下、衝突し、即座に息を整えつつ受け身を取ってすぐに立ち上がり、太陽弓を構え直す。目の前の空間には何も見えないのが解るが――直後、虚空から出現する様にぼろぼろで今にも消えそうなイスカンダルの姿、そしてそれに守られた

ウェイバーの姿が出現する。ウェイバーの手からは完全に令呪が消失していた——おそらくはこの瞬間、全ての令呪を使って防衛に入っただろう。おかげでスカサハとは違ってまだ生きている。生きていてだけでも言える状態だが。しかしこの様子を見る限り、アーサーも駄目だったらしい。

ゾオルケンからの攻撃に運よく生き残れたのはイスカンドルだった。ただその豪運であっても今回は完全にしのぎ切れたものではなかったらしい。イスカンドルもはや瀕死と呼ぶのにふさわしい状況だった。これ以上の戦闘に耐える事は出来ず、ゆつくりと魔力へと散って行く。それだけだった。そんな絶望的な光景の中、

姿を現す存在があった。

「——だから言っただろう、全ては無駄であると」

異形の姿ではなく、人の姿をしたマキリ・ゾオルケンが再び出現した。先ほどのゾオルケンとは違い、その右手には黄金の器が——聖杯が握られていた。それを握るゾオルケンの姿には傷なんて一つも見当たらずに、先ほどまで戦闘があったというのがまるで嘘の様にさえ感じられるほど、先頭の形跡がその姿には見えなかった。涼しい表情を浮かべ、ゾオルケンは立っていた。

「……完全に殺したと余は思っていたんだがな」

「まあ、実際一度は死んでいる。レフ・ライノール・フラウロス——ああ、フラウロスの様に確かにマキリ・ゾオルケンは一度死んだとも。見事としか評価のしようのない動きで連携だ。英雄の精神性を舐めていたのも謝らなければいけないだろう。そこは素直に謝罪しよう——そしてもう一度言おう、無駄だ、と。全ては無駄だ。この世界は閉じている。可能性は発展しない。故に無力だ。この聖杯が存在する限り——」

ゾオルケンの言葉の途中で発砲音が響く。直後、ゾオルケンの頭に穴が開く——が、それを埋める様に蟲が集まり、その欠損を消失させた。銃撃の主である衛宮切嗣はトンプソン・コンテナーを真っ直ぐゾオルケンへと向けていた。その眼を見れば解る。切嗣の闘志は一切萎えちやいない。故に射撃した。が、

「無駄だ。お前達では私を殺——」

生命力を。魂を燃焼させて魔力を生み出し、それを太陽弓に乗せて、全力で奥義を乗せた一撃を放つ。対国級の一撃は阻まれることもなく、太陽そのものとなって蹂躪しながら、その射線上の存在全てを消し飛ばしながら突き進む。

「——【梵天よ、魔王を滅ぼせ】」

文字通り全力、限界を超えた必殺の一撃。サーヴァントでさえ一撃で蒸発させる一撃。それは一瞬でゾオルケンの姿を完全に呑み込んで消滅させ、その背後の岩場を完全に溶かして砕き、その背後にある濃密な魔力と悪の塊である大聖杯に直撃し——核爆発と表現されるその破壊力を見せつける。一瞬で大聖杯に到達した奥義の一撃は大聖杯を砕こうとして——時間が停止したかのように崩壊が、衝撃が止まる。

「——す事が出来ない」

まるで何事もなかったかのようにゾオルケンが再生した。大聖杯もそれに合わせて時間を巻き戻す様に再生し、命を削り、血を吐いて放った奥義は一瞬で消え去った。あまりの理不尽、あまりの法則性のなさ。それは圧倒的上位の存在が踏み潰しているような状況だった。聖杯。それだ。それだけだった。たったそれだけで、全てが無力化されていた。万能の願望器、確かにそうなのだろう。納得してしまつた。

聖杯は、正しい聖杯であれば、時空すら超えて願いを完成させる。

「死んで蘇った後で死んだ時の願いをする。真に完成された聖杯であればこの程度児戯の様にこなす。私が死に、完全に消滅したとしても聖杯が存在する限りはどうしようもない、それだけの話だ。諦めろ、それが賢い選択だ。そしてそこでゆっくりと眺めるが良い、人理定礎が崩壊し、人類史が焼却される姿を」

「うるせえ、死ね」

「それに関しては完全に同意だね」

銃撃と射撃が再び同時に放たれるが——ゾオルケンが掲げるように前へと出した聖杯がゾオルケンへと向けられた攻撃を無力化し、

完全に防いだ。今度こそ、目の前で、完全に無力化させられる姿に絶望を覚えるが、絶望なんてずっと前から抱いている為、困る事もなく——命削りの奥義を三度目を放とうとする。

が、それに体の方が耐え切れずに膝が折れる。

「クソ、が……！」

弓を握る手が震える——それでも落とさないのは戦士としての矜持からかもしれない。だけど体がまともに動かない状態なのは事実だ。そんな中で、弾丸を弾かれた切嗣の動きに続くようにイスカンドルが剣を抜き、ゾオルケンを砕くためにそれを振り上げる。が、直後、聖杯の力によって強化されたゾオルケンが黒い風を生み出し——それでイスカンドルを飲み込んだ。その光景を見て、今度こそ状況が確定した。

ギルガメッシュを除いたすべてのサーヴァントの全滅——状況は完全な敗北だった。死んでからの蘇生を願うなんて破綻した事、まづありえない。だがそれを成立させてしまうのが聖杯であり、それがゾオルケンの手にある限りは、あの男は無敵だった。

「まだ立ち上がる気概はあるか？ どうする？ 逃げるか？ ギルガメッシュの応援を期待するか？ 大聖杯を破壊して爆殺するか？

それとも何かほかに殺害手段を用意しているか？ 教えてやろう——無駄だ。完成された聖杯の前では全てが無力だ。サーヴァントでさえ所詮は聖杯によって生み出された存在。確たる序列として聖杯以下の存在である事が確定している。故に絶対に勝利する事は出来ないだろう、サーヴァントでは」

ゾオルケンの言葉は何よりも正しかった。

「絶望が心に差し込んだか？ 安心しろ、慈悲はある。このまま目を閉じて外界を拒め。己の内に沈め。目を開けるな。このまま、奈落の底へと沈んで全てを忘れろ。それが幸福だ。もはや人類史の焼却は我が王によって確定している事だ。王が決定してしまった事だ。もはや覆す事は不可能。人類には焼却以外の道が残されてはいない」

「王、だと……？」

ゾオルケンの放った言葉を確かめる様に呟いた途端、ゾオルケンの

背後、大聖杯が震える。否、大聖杯が纏っている魔力が、悪の泥が震えているのだ。

スカサハ、アルトリア、イスカンドルが散った。

そしてギルガメツシュが残った。

「ああ、そう言えば聖杯戦争が終了したのだったな——まあ、欠陥品が完成したところでどうにもならんがな」

「アイリ——」

アイリスフィールが人として死んだ事の証明でもあった。アイリスフィールが小聖杯として完成され、それを喜ぶように歓喜の震えを大聖杯は現していた。第四次聖杯戦争の終了を告げる様に、大聖杯から泥が溢れ出す。噴火する様に、津波の様に、世界を飲み込まんと、災禍と共にこの世全ての悪が溢れ出し始める。それをゾオルケンが眺め、そしてああ、と呟きながら背を見せる。

「終わりだな。じきに焼却も終わる——それまで幸福な悪夢の中で溺れていると良い」

ゾオルケンがゆつくりと、歩いて大空洞の外へと目指して行く。その姿を殺そうと獣の様な咆哮を響かせながら腕を持ち上げ、震える手で矢を放ち——明後日の咆哮へと矢が飛翔する。それでもゾオルケンを殺そうと、どうにかして止めようとする為に命を更にもやし、全身を無理やり動かす様に立ち上がらせようとして、

魔術回路そのものがオーバーヒートするかのように全身から力を奪う。

自分の体を支えきれずに、そのまま前のめりに倒れる。

——そして、泥がやってくる。

ゾオルケンが一步、そしてまた一步、ゆつくりと歩きながら去って行くのを眺めながら、大聖杯からあふれ出した泥が一気に此方へと向かってくるのを見ていた。赤く、そして黒いその泥は見ただけでありとあらゆるこの世の悪を内包した、それだけでおぞましい物体だった。否、物体と評価していいのかすらも解らない。そんな存在だった。ただ解っていたのはそれが間違いなくこれから、自分を飲み込む事だった。目前まで迫ってくるその泥の津波を前に、ゾオルケンは一

切焦ることなく、時間を楽しむかのように去って行く。

スカサハはもういない。

令呪もない。

ご都合主義は発生しない。

タイミング良く助けてくれるようなヒーローなんてものはあり得ない正義の味方なんてものは存在できないのだ。そんなヒーローがいたら今頃、世界には戦争なんて存在しなかった。聖杯戦争そのものが存在しなかった。だからご都合主義のヒーローには願えない。決して願ってはいけない。自分が辿る結末というものは結局のところ、自己責任、自分で招いたものの結果なのだ。だから人を殺して、好き勝手生きた自分の結末は、

ある意味で、これが一番正しいのだろう。

「悪いスカサハ……約束守れそうにねえわ——」

直後、泥がすべてを飲み込んだ。

熱く、冷たく、痛く、優しく——そして苦しい。ただただ、ひたすらに苦しい。拷問の様な苦しみに考えつく限りの負の感情がまるで物理的衝撃の様に叩きつき、そして耳や口、穴という穴から体の中に侵入してくる。吐き出そうとしてもがいても、それを無視する様に体に入り込んで、そして心を侵食しようとその悪意を手の様に伸ばしてくる。言葉として表現できない行為。常に頭の中で死ぬ、と眩かれている様な不快感。育ての親が笑顔で生まれて来なければよかったと壊れたレコードの様に繰り返すイメージが脳裏に浮かび上がる。

好きだった女性が目の前で笑顔のまま首を絞められて殺されるイメージが走る。

昔、どこかで助けた人はレイプされてヤク漬けになって死んだと囁く声が聞こえる。

手段なんて選ばない。想像力の及ぶすべての手段で無限大の悪意を込め続ける、触れた者をその瞬間に発狂する悪しか泥の中には詰まっていなかった。心が強すぎるが故に発狂できない。発狂して死ぬ事が出来ない強者の苦しみが精神的ではなく肉体的に締め上げ始める。

そして、息苦しさを感ずる。

肺から完全に酸素を叩きだされ、その代わりに悪意を込められた。全身の血液が全て泥に入れ替えられたような重さを感じ、

悪意の底へと、ドンドンと体が沈んで行く。開いた目はひたすら死の色のみを映しており、今まで経験した地獄という言葉が、どれだけ生温いかを理解した。

——ここが本当の地獄だった。

それでも、そんな地獄でも、

心が——精神力が強すぎて、

発狂できなかつた。これほど心が強かつた事を恨む日はなかつた。ただひたすら苦しみを感じながらもがく力さえもなく、視界の全てが死の一角に染まって行く中で、

発狂すらできずに底なしの悪意へと沈んでいった。

特異点X日目―8

――気持ちの良い風を感じる。

――わずかに感じる眠気を振り払いながら、少しずつ目を開ける。

――気づけば何時の間にか椅子に座っていた。

――ゆつくりと開けて行く目には普通のダイニングの風景が目の中に入り込んできて、自分がここで眠っていたことを思い出させる。なんだっけ、どうしてだっけ、そう思いながら記憶の中を探ろうとして、魔術の修行をしていて疲れて眠ってしまったという記憶を呼び起こす。ああ、そう言えばそうだっけ。そう思いながら欠伸を漏らしながら体を持ち上げようとする、

「なんだ、もう起きたのか。もう少し寝ていてもいいんだぞ？」

「Brother……」

「なぜ英語。しかもものすごく流暢」

「Singh……」

「人の顔を見て英語で溜息を吐くな」

マグカップを片手に近づいてきたのは兄の姿だった。あの魔術師の家に生まれ、属性が家の魔術と合致し、非常に高い素質と才能を見せる兄。彼は家の誇りだった。魔術師として優秀な兄が家を継げば、きつとこの家も、魔術も今まで以上に飛躍の時を迎えるだろうと、皆が言っていた。逆に無才の自分は今もう、魔術に対しては一切の期待を向けられる事はなかった。その代わりに、ほとんど一般人の様な生活をしている。魔術の修練を除けば。もはや惰性の様に続けている。

「ほら、これでも飲んでおけ。目が覚めるぞ」

「サンキュー」

兄からマグカップを受け取る。その中身はホットミルクだった。両手でそのマグカップを握りながら軽くリビングの方へと視線を向ければ、そこには両親の姿と、まだ幼い妹の姿が見える。これが己の家族だ。魔術師の一家――普通の魔術師の家だ。根源を目指そうと、魔術を極めようとしている普通の家だ。そんな家に自分は生ま

れ、そして育った。それがこんな風に、平和な日常を過ごせるとは思いもしなかった。魔術を最初に教わる時、たとえ家族であろうとも容赦はしない、と父には良く脅されたものだが、

今、こうやって、なんだかんだで平和な日常がここにはある。

それを謳歌しているのは事実だった。

「……なあ、兄さんよ」

「どうした弟」

「俺、本能寺ごっこしたいわ……」

「お前は一体何を言ってるんだ」

兄のリアクションに軽く笑い声を零す。

「今から俺が焼き討ちに来た一般戦国武士役で兄貴と妹と親父とおふくろがノツブ役な」

「なあ、お前大丈夫——」

マグカップを投げ捨てながら牙をむいて炎剣を生み出し、それを兄の顔面に突き刺した。一瞬で即死したその姿を張り付ける様に壁に叩きつけ、壁に突き刺さったその状態で放置し、新たに炎剣を生み出しながら視線をリビングの残りの家族の方へと向ける。そこで呆然と今起こってしまった凶事を眺める残りの家族の姿があった。あまりの突然の事態に、動いてすらいない。その姿を見て、わあ、犬みたいに口を開けてるなあ、何て感想を抱いて。

「ここらへんに……お。あつたあつた【天を翔ける、太陽よ】」

適当に背中辺りを探ってみたらやっぱりそこには弓があった。それに炎剣を矢へと変形させながら放てば、妹だった存在は足首だけを残して完全に消滅した。その光景を見ていた母が一気に悲鳴を響かせるが、五月蠅かったのだ。次の瞬間には二射目で消し去った。呆然と眺めていた父が狂人を見るような目で此方を見る。

「お前は……一体何をしているんだ……？」

「さあ？　なんか目が覚めたら物凄いもやもやしてからな本能と直感にのみしたがって行動しただけだよ。なんかぶつ殺したらスッキリするんじゃないか？　って感じの感覚でさあ……解らない？　なんか背中辺りを探ったら【天を翔ける、太陽よ】が出てきたし。……サ

ルンガ？ うん、まあ、確かそんな名前だったよな。とりあえず汝は織田信長ナリイ——!!」

「く、狂ってる……!」

「知ってるよ」

笑顔で答えて「天^サを翔^ルける、太陽^ガよ」を放った。父だった存在は一瞬で太陽の炎に焼かれて細胞の一かけらさえ残さずに蒸発した。それで虐殺が終わった家を軽く眺め、頭の中がすっきりしないのを自覚する。こう、感覚的に言えば情報がせき止められているという感じだ。この感覚には覚えがある。こういう時は頭で考えず、本能と直感に、獣の様に行動するべきだと自分の中の思い出せもしない経験が告げている。

だからその通り行動する。

「そもそも霞がかかったかのように家族の顔は思い出せないし、名前も思い出せねえんだから最初から疑問に思えよ、俺。まあ、本能寺ファイバーしちゃったんだけど」

誰かに言う訳でもなく整理の為に呟き、そのまま家の外へと向ける。靴は履くまでもなく、何時の間にか装着していた。だからそれで扉を蹴り破って、家の外へと出た所で、太陽弓を構え直す。なぜか体が凄まじく軽く感じられた。そう、まるで夢の中にいるような、そんな軽さが今の自分にはあった。魔力を使っても全く減らない感じからして、その考えも間違っではないのかもしれない。だから家から出た所で、迷う事無く太陽弓を構えた。

「お前が本能寺になるんだよッ!」
【梵^{ブラ}天^フよ、魔王^マを滅^{サル}ぼせ!】

対国宝具級の一撃を実家へと叩き込み、核爆発と表現される魔王殺しの一撃で完全にさつきからの広範囲を更地に変える。

「ヒヤア! 魔力の減りを感じねえ! やっぱ夢じゃねえかこれ!!
夢の中に家族が出てきたことにはケチがついたけど夢の中だったら好きなだけ暴れても問題ねえな! オラあ! 本能寺! お前も本能寺! 本能寺タイムだよ!! 本能寺になあーれえー!」

魔力が消耗されないという事実をいいことに、一切遠慮することなく、命削りの奥義を放って、ドンドン周りを更地へと変えて行く。見

慣れた街の風景が段々と炎に染まって更地に代わる光景は何とも筆舌し難い、愉しさを感じるものだった。何よりも本来は不可能であり対国級の連射という夢の中でしかできない、夢のような出来事に心が躍る。リアルでこれをやつていれば俺は干からびて死ぬだろう。

「けどこのスリルが楽しい。」

やがて、数分間無差別テロを続けていると、元々は街があつた筈の場所ではや荒野と焦土しか残されておらず、人の死体すら残さずに完全に消滅されきつていた。もはや残されているのは乾いた大地と炎、そして己の存在だけだった。

「やべえ、ソファアぐらい残しておけばよかった。調子に乗り過ぎたわ」「いや、ホント調子に乗り過ぎよ」

かけられた声に振り返れば、そこには黒いドレスに身を包んだアイリスフィールの姿が見えた。いよいよを持つてこれが夢であると確信できる様になり、そして徐々に本来の記憶が戻ってきた。ああ、そういうえば大聖杯の泥の中に沈んだんだっけ、俺、と本能寺フィーバーの気持ちよさの名残を感じながら思い出す。今度、実家に帰つて放火しよう。そうしよう。

「実家は本能寺するべきだ。」

「そろそろ喋つてもいいかしら」

「あ、ごめん。待たせた？」

視線をアイリスフィールへと向けなおしながら回転蹴りを叩き込んで頭を蹴り飛ばす。

「二度、遠慮なしに全力で美人を思う存分破壊してみたいって思つてたんだよな。おかげで欲求を満たせたわ。サンキュ大聖杯」

「予想通りと喜ぶべきか、予想通りと嘆くべきか……いや、お主には全く関係のない言葉だったな」

泥となつて砕け散るアイリスフィールから視線を外しながら視線を反対側へ——後ろ側、声の主の方向へと向ける。そこにいたのは全身を紫色のタイツに身を包んだ、赤い魔槍の女戦士——スカサハの姿だった。これ以上記憶がいじられていないのであれば、少し前にスカサハは自分をかばって死んだばかりだ。となるとこれは完全に

偽物になつてくる。

——迷う事無く太陽弓を構えて消し飛ばす準備を完了させる。

「さて、ここがどんな状況でどういう場所なのかは一切理解できないけどなあ——全力で暴れればとりあえず何とかなるだろ。なあ、おい」

「待て。一応は此方大聖杯に對話の意志は——」

「聞こえないなあ」

そして、對話する意志を持ち、その為に出現したスカサハの姿をした何かを迷う事無く消し飛ばした。スカサハのガワを被った存在が完全に消滅したのを確認しながら、太陽弓を下ろし、息を吐きながらそれへと視線を向ける。

徐々に、徐々に世界が虚構から大聖杯の本質を見せる世界へと変わって行くのが見える。偽りの街の青空は大聖杯と同じ赤と黒の禍々しい悪意の色に染まり、世界はまるで黙示録にある様な炎と荒地の焦土へと変化して行くが——元々派手にやったせいも、まったく変化が見えないのはきつと、気のせいなのだろう。だから盛大に、聞こえる様に溜息を吐きながら答える。

「いいか、教えてやる——死人は蘇らないし、絶対に蘇ってはならないのさ。この聖杯戦争で召喚されたスカサハは死んだんだ。彼女と同じスカサハはもういない。たとえ記憶を受け継いだ本体がいても、それはもう俺の知ってるノリの良い彼女とは別モンなんだよ。俺はここらへん、完全に割り切ってるぜ。過去は過去だ——死人や甘い過去の誘惑なんか俺にやあ通じねえよ。逆に破壊欲求を満たせてスツキリする程度の話だ。まあ、実家を本能寺焼き討ちできた事はものすごく楽しかったからそりゃあ感謝してもいいけど——」

一回言葉を止める。

「……もっかい実家、再生できない？ もっかい本能寺焼き討ちできない？」

返答はない。大聖杯とのコミュニケーションに失敗してしまったらしい——一体何がいけなかったのだろう。

個人的にはパーフェクトコミュニケーションな感じなのだが。……やっぱり駄目か。

太陽弓を放り投げながら、そのまま胡坐をかくようにその場に座り込む。赤黒い太陽が浮かぶ空を見上げながら、言葉を届ける。相手はそこにいる——いや、同化している様な状態なのだ。だから端末や使者なんて必要ない。言葉を語って聞かせればいい、それだけだ。

「俺さあ、結構破壊するの好きなんだよな。つか起源なんだから当たり前なんだけどな。だから魔術は壊滅的でダメでなあ……戦士なんでものを今はやってるよ。鍛えながら道すがら悪そうなのを適当にぶっ壊すだけの人生だけど……これがまた楽しいんだよ。自分の思うままに生きる、いいぞお、こりゃ。お前さんはどうだ？ どうしたい？」

赤黒い太陽が輝いている。その伝えたい言葉は人を通さずとも、直接伝わってくる。

——生まれたい、と。

「だけど残念——お前は生まれる事が出来ない。ここ、特異点だしな」

「だけど、その代わりに、」

「壊したいものがあるんだ」

初めて挑戦するものがある。

「元々■■■■に魂を売って、ぶっ殺す事は考えていたんだよ。俺の起源や戦いを考えれば用意された役割は結構わかりやすいもんだしな。ただなあ、この状況で願ってもたぶん聖杯の干渉力で負ける可能性がデカイからなあ——」

わざとらしく、勿体ぶる様に言葉を放つ。

「なあ、興味ないか？ 特異点カリ・ユガの終わる瞬間を見たいと思わないか？

特異点世界を壊すなんて事、お前チャレンジできるのか？ 俺なしで？

そんな事を願う奴が俺が死んだあとで出てくると思ってる？

なあ——一緒にこの世界を砕いてみないか？ どうよ、大聖杯ちゃん」

悪意の中にこの心が沈む事はない。もとより起源に覚醒している狂人、

折れた心が絶望を知って折れないなら——狂気にいる狂人も狂

えない。それだけの話。

健全な肉体には健全な心が宿るのは嘘だ。強者である事を、強さを求めれば必然的に心は正道を外れる。それが自然の流れというものだ。

だから起源に覚醒し、そして狂人として完成された己は自分の終わりが見えている。死が見えている。それは怖い。何時だって死ぬのは怖い。だけどそんな事よりも面白いものが今、目の前には転がっている。それが出来るかもしれない、という状況にまでやってきているのだ。だとしたら今やらないでいつやるのだろうか。少なくともチャンス逃すほど馬鹿になった覚えはない。

「さ、この特異点ユガの最後の時だ。終わればまた小聖杯の完成からやり直しだろ？ だったら息抜きついでに世界をぶっ壊そうぜ」

悪魔的な提案を放ち、

その返答として、太陽が泥の涙を落とした。

一直線に落ちた泥の涙は大地へと叩きつけられ、そこから洪水の様に世界を満たす。見た事のある光景に苦笑を持たしながら、声を響かせる。

「——聞いてるんだろ？ 見ているんだろ？ チェスの駒の様に俺の人生を進めて来たんだろ？ 今ここで、答えに至ったぜ。さあ、遠慮なく契約しようぜ——抑止力よお、おい」

直後、泥が世界を満たして全てを飲み込んだ。

特異点X日目―9

視界が戻り、意識が戻った途端、膨大な量の情報と、変革が体に叩きつけられた。抑止力との契約を通して肉体が、役割を果たすのに相応しい能力を身に着ける為の変態を発生させる。激痛とも取れるそれは同時に魂を永劫に世界というシステムに縛り付ける為の契約行為でもある。だがそれと同時に血管を駆け巡る様に聖杯の泥が肉体を巡り、自分では手にすることのできない魔力を供給しているのが感じられる。抑止力、そして大聖杯、この二つが呼び掛けと契約に答えただけだから、

ここからは自分の番だった。

「ゾオオオルウウケエエ——ンツ！」

体にかかる泥はもはやただの泥としか感じられなかった。弾き飛ばしながら全身にみなぎる魔力と力のまま、炎剣を生み出そうとして、それが炎ではなく、光によって生み出された剣に変貌したのを知覚する。抑止力との契約、それによって根本的な変質が体内で行われているが、正直どうでもいいのが真実だ。植え込まれる情報と、そして増える能力。それはこの状況を滅ぼすには十分すぎるものであり、与えられた役割を改めて理解する。が、それでも、やる事は変わらない。い。

「死ね——！」

光剣を全力で投擲する。一瞬で音速を凌駕した光剣はそのまま、大空洞を抜けようとしていた入口付近のゾオルケンの体を貫通し、爆裂しながらその体を割った。目視出来ないが、それでも始末しなくてはならない、抑止力が恐れる存在はどこにいても知覚できる。だから岩盤を貫いて割いたゾオルケンの姿が解り、それでいて抑止力が現在、この瞬間、この状況を恐れ、干渉する為の端末を何よりも欲しがっている事も理解出来た。

「あーそーぼおーおーぜえ——！　ゾオオオルケエエエンくううーん！」

太陽弓を握りながら——前へと跳んだ。「魔力放出（光）」で一気

に加速する様に跳躍しつつ、大空洞の通路を駆け抜け、その先にいるゾオルケンの姿を捉える。憐れみに満ちた姿は此方を目撃すると同時に憤怒の表情へと変わる。

「抑止力の狗が——」

「うるせえ、死ね。こっちは就職が決まったんだよ。新たな上司へのゴマすりで忙しいんだよ！ 死ね！ 早く死ね！ お前も本能寺にしてやろうかあ！」

すれ違いながらリアットを叩き込み、その姿を全力で大空洞の外
の空間へと殴り飛ばし、太陽弓を構える。それに番える矢は今までの
様な炎ではなく、完全な太陽光で生み出された太陽の一矢——
幻想を殺す側から幻想へと移り変わった影響としてシームレスに、体
に馴染む様に、苦痛も一切生じる事無く、まるでサーヴァントが行う
かのように生み出せた。

「今日からお前の名前は松永弾正！ 死因は爆死で決定だな！ ほ
ら、お前蟲だし！ 平蜘蛛つて名前の蜘蛛いねえの!？」

間髪入れず【梵天よ、魔王を滅ぼせ】を放つ——役割の、或いは
新しく与えられた名の影響か、以前よりもはるかに馴染む様に放てた
それはゾオルケンに返答させることすら許さずに姿の全てを飲み込
み、光の粒子をまき散らしながら森を焦土へと変貌させた。その後方
五十メートル程の距離に通り抜ける様に着地し、ゾオルケンの方へと
視線を向けなおす。

「——貴様、自分が今どうなっているのかを理解しているのか」

聖杯を片手に、ゾオルケンが無傷の状態に復帰し、戻ってきた。そ
の視線は此方の姿へと、憐れむ様に、怒る様に向けられている。ゾオ
ルケンは正しく世界と契約した者、抑止力と契約した者の末路を完全
に理解している。その知識がどこからきているのかは理解できない
し、その背後にいる存在も気になるが——抑止力が消す必要がある
と判断したら、そのうち絶対に会って殺しあう事になるだけだ。抑止
力が死んだら知ったこっちゃやない。その時は自分の意志で殺しに行
くだけだ。だから答える。

「ん？ つまり死後——あと数分の命だけ——を星に縛られて

便利屋として星の存続に協力するんだろ？ 時代を！ 国を！ 場所を無視して俺は戦えるんだぞ？！ 聖杯戦争かもしれないし、処理の為に召喚されるかもしれないし、時代を終わらせるためかもしれない——どっちにしろ、いろんな時代でいろんな場所でいろんなのを相手にできるんだ。天職だろうがああ！」

すっかり働けば有給休暇をくれるのを信じる。

「さあ、死ね、超死ね、ウルトラ死ね、とりあえず死ね。言葉で止められると思うなよ。星のバックアップがある以上、スペック的には殺せる領域に入ってるからなあ……！」

笑いながら太陽弓を消失させ、光剣を二刀流に生み出すのを見て、ゾオルケンも笑った。

「こいつが蛮族だど？ 生ぬるい表現だな。こいつはそんな生易しいものではない。人の形をされていて人の様に理解していて実際、中身が全く違う。貴様、生まれからして干渉されて育った、怪物の類だな……！」

「うるせえ、死ね」

完成された縮地法でゾオルケンの横へと移動し、二刀の軌跡六つの斬撃を刻み、体がバラバラになる前に、蹴り飛ばし、距離を生みながら右手の光剣のみを消し去って太陽弓へと切り替え、左手の光剣を矢として番えて【天を翔ける、太陽よ】を放つ。ゾオルケンの姿が一瞬で、その隠された末端までを含めて全てが浄化されるように死亡し——直後、聖杯の機能によって強制的に再生される。直後復活したゾオルケンが口を開く。

「無駄だ！」

「じゃあこっちもスペシャルゲストを呼ぼうかあ！ 大聖杯ちゃん！

インターセプト頼むぜ！」

直後、叫びながら再び【天を翔ける、太陽よ】を放ち——焦ったようにゾオルケンが体を蟲へと変える事で回避した。それは不死者にあるまじき行動。絶対という領域にある存在が絶対取ってはならない行動。即ち、絶対という領域から引きずりおろされたという証でもあった——つまり、殺せる。

「貴様ッ！」

「未完成の聖杯では完全な無効化は無理だとしても無限コンティニューぐらいは無効化できるだろ？ さあ、納得したら死ぬ！」

大聖杯による干渉が効いている今のみが殺害可能な時間だった。故に迷う事無く殺す為に【梵天よ、魔王を滅ぼせ】を放ち、古代インドの魔王殺しの奥義に包まれるゾオルケンを焼き、その姿が生き延びるために変質する。あの醜悪な異形の姿へと。それに存在を理解できない恐怖が付きまどっていたが、抑止力の一部、現象、或いは粛清装置と化した為、相手の事を理解できる。その正体は、

「——魔神、か。楽しいな」

魔神バルバトス——どこからどう見ても友情を回復しそうな姿には見えない。

殺す。

核爆発を光剣で切り裂きながらゾオルケン——バルバトスに向かって切り込む。襲い掛かってくる邪眼の眼光を完全に精神力で無効化しながら二刀の光剣で一気に切り込み、突き刺し、爆裂しながら飛び上る。薙ぎ払う様に襲い掛かってきた死の風を飛び越え、頭上から叩き込む様に【天を翔ける、太陽よ】を三連続で大きく裂いて破裂させ、太陽の光を辺りにバラ撒き、破壊をまき散らす。対応する様にバルバトスの周囲を死の風が結界の様にとわりつき、竜巻の様に回転しながら広がって行く。それに対して正面からあふれ出す魔力に任せながら【梵天よ、魔王を滅ぼせ】を放って相殺し、そのまま直線に突っ込んで行き、

【魔力放出（光）】の伴ったキックを叩き込み、目玉を破裂させながら大きくその巨体を捻じ曲げる。悲鳴のような獣の音が響くが、そんな事を気にすることもなく、太陽弓そのものを傷口に差し込み、

「——壊れた幻想」

太陽弓を爆破させて体を内側から破裂させる。爆破から逃れるためにも一気に跳躍し、縮地で逃れながら着地する。バルバトスの姿が灼熱と閃光に煮込まれるのを眺めながら、技術が一つ一つ役割に合わせて権能に変換されて行くのを知覚する。先ほどまで技能だった縮

地も、体が人間から幻想へ、現象へと変換されて行くのに合わせて権能へとすり替わるのを自覚した。

「まあ、出来る事に変わりがないのなら問題ないさ。そこら辺は尊重してくれるんだろ？」

答えはない。その代わりに空から火球が叩きつけられる様に落ちてきた。回避すれば稲妻が落ちてくる。それを回避すれば氷塊が叩きつけられてくる。それは余裕たっぷりの一辺倒の戦いから離れ、弾丸の様に、災害の様に叩きつけられてくる魔術の嵐となってくる。明らかに敵として、殺すべき相手として認識した故の行動であり、バルバトスの必死さが見えていた。だから殺害手段と殺害出来るだけの能力があれば、戦闘経験が圧倒的に違う。

——一回殺している分、遥かに楽だった。

『貴様は——』

ウァーイマナ

矮人の権能で取る一步が自由の一步となり、物理的な距離に関係なく、一瞬でバルバトスの懐の内へと入り込む。踏み込みで目玉を潰しながら、拳を繰り出す。それで胴体を割きながら追撃で光剣を交え、その姿をバラバラに引き裂いて解体する。大量の魔力が霧散し、徐々に、バルバトスとその魔神としての姿を維持できずに、マキリ・ゾオルケンとしての姿へと戻り始める。

『——なんなんだ!』

再生を行いたいようなバルバトスの体を光剣で爆裂させながら解体し、吹き飛ばし、着地し、その姿が焦土と化した大地に倒れるのを眺めながら答える。

カリ・ユガシヤンバラ

「現代の日本に生まれて、バラシユウラーマ門司と共に修行して体を鍛え、寺院のバ

ラモン僧に鍛えられた新人守護者さ」

ここまで神話になぞらえて言えば解るだろ？ という風に教える。

つまり抑止力が欲しかったのは時代の破壊者という存在だ。この状況を、特異点の形成をしていたが、抑止力という存在は直接的な介入を行わず、その場にいる存在の背を押すようにして事態を解決する——それが出来ないなら神話をなぞらせる様に出来る存在を生み出せば良いだけの話だ。そうやって生み出されたヒンドゥー神話の化

身は、

「——十体目の全王の化身って事よ。真実はどうか解らないけどな。それでも抑止力としては時代の破壊に特化した俺という手駒はそのロールを満たすには十分すぎる存在だったらしい。馴染むのが解るわ」

まあ、つまりなんだ、とゾオルケンに答える。

「所詮——俺もお前も、全ては抑止力の思惑通り……釈迦の掌から逃れる事は出来なかった憐れな猿だったって事だよ。お前のボスも憐れな猿じゃなけりやあいいな」

「私の……負け……なのか……？ 救済も、人類史の焼却も成し遂げられずに——」

ゾオルケンが言葉を何かを吐こうとしているが、知ったものじやない。その姿を殺す為に心の目で捉え、そして役割を満たす為に与えられた対界宝具を発動させる。一つの時代を、悪徳の時代である現在を終焉へと導き、そして徳の時代へと、黄金時代へと世界を次のステージへと運ぶ為の対界宝具——この特異点を砕く為の道具であり、抑止力が欲する特異点に対する必殺兵器。

「輪廻の時、終焉の星」

与えられた新たな宝具は——閃光だった。それがゾオルケンを中心に発生したと思つた次の瞬間には地平が、光が、空間そのものが圧縮しながら歪み、時代が重ねてきた悪徳を基準に宝具の破壊力が乗算で跳ね上がる。カリ・ユガを滅ぼす為だけの宝具がゾオルケンを問答無用で消滅させ、その蘇生等の全てを無力化しながら、対界の名に恥じぬ広範囲を時代の粛清として問答無用で終焉させる。

一度始まってしまえば閃光も埃も爆炎すら発生しない。風もその物が飲み込んで粛清され、跡形もなく静かに消滅していた。発生した場所にはもはや何も残されておらず、ゾオルケンが保有していた聖杯そのものが巻き込まれるように消滅していた。

ゾオルケンという一つ目の楔、

そして聖杯という第二の楔が破壊された。

そして時代を破壊する為の宝具によって特異点が大きく歪み——

―亀裂が穿たれた。

「……さすがに燃えないんじやあ本能寺できねえなあ……これ……少しがっかりだ……」

そう呟いて、リアクションを取ってくれる相手がもう、一人として残っていない事を理解する。視線を大空洞へと向ければ、そちらからは誰も出て来ないし、命の気配も存在しない。ウェイバーも、そして切嗣も大聖杯の泥に飲み込まれて完全に死んでしまったのだろう――大聖杯としても生かしておく意味はない。となると、この場で生き残っているのは自分のみで、

そして自分が死ねば、この無意味な戦いも終わる。

戦って得るものは何もない。

覚えていられるものは何もない。

だけど確かに何かを喪失する、それだけの、極限まで無駄な戦いだった。後は自殺するだけで終わりだ――スカサハがこの時点で生き残っていたら、ここで殺し合おうとも思っていたが、無駄な考えだった。きつと、ここで自分がスカサハを戦って殺す事が出来たら、どこかにいる影の国の本体も、俺が殺せるという希望を持てるのではないかと思っただが……幻想で終わってしまった。

「……あーあ……クッソ無駄な時間で本当に無駄な戦いだつたなあ」

呟き、光剣を生み出す。それを心臓に突き立てようと思ひ、気配を感じた。手の動きを止めて、視線を気配の方向へと持って行けば、

此方へと向かってゆっくりと歩いてくる、黄金の王の姿が見えた。その表情は笑顔の形に歪んでおり、実に良い機嫌であるという事が見て取れる。その姿を見て、ああ、と呟く。

「ああ、そっか……」

呟き、刃を下ろし、

――そしてこの戦いの勝者と相対する。

戦いは終わった――が、あと少しだけ、この特異点^{カリ・ユガ}は続きそうだった。

黄金の王がそこにはいた。英雄王ギルガメツシュ、古代ウルクの王にして世界最古の王と言われる存在。調べた結果、あらゆる財を収集し、その宝物庫に収めたと言われる人物であり、英雄達の原型、祖とも言われる凄まじいまでの人物だ。実際に一度戦って、そして調べたからこそ解る——ギルガメツシュは暴君だと言われているが、その程度の人物ではないという事だ。発言も、行動も苛烈で暴君を思わせる凄みがある。だけでそれで終わっていない。この人物を理解するのは難しいだろう。けどこの英雄は、ギルガメツシュは決して間違つてなんかいないという事だけは断言出来た。

それは理屈ではなく、もつと動物的な本能を重視する己だからこそ、感じられたものだと思う。

或いはインテリや勇者、英雄の類だったら邪悪、間違っている等と言うかもしれないが——自分はどうしてもそうとは思えなかった。寧ろその唯我独尊を貫く姿勢に関しては天晴さすら感じるどころがある。やはり、そこら辺は破天荒な自分の気質があつているのが原因だと思つている。まあ、それはともかく、黄金の王、英雄王ギルガメツシュの登場に、小さく笑い声を零してしまった。こうやって、聖杯戦争の勝利者に会えるとは思わなかった。自分以外が勝利した場合は、確実にギルガメツシュか切嗣に殺されていると思つていた。

「——筋書きは二流ですらなく三流、役者も一流というには少々劣るものであつた。しかし、一流の劇場では見られぬ確かな熱量を見せて貰つた。その魂の行方、迷いのない姿、見るにふさわしい悦を感じさせてもらった。——良くやった、実に大義であつた」

何を言い出すかと思えば、ギルガメツシュは今、ここに来て、此方を褒めたのだ。ただ普通に、よくやった、面白かつたぞ、と。ただそれだけだった。けどそれは同時に、暴君を楽しませる事が出来たという褒美、証拠でもあつた。予想外の言葉に、身構えていた心は一気にノーガードとなり、そして笑い声を零してしまった。

「は、はは、ははは……王様、ケツコー楽しんでる感じっ？」

「うむ、此度の聖杯戦争、我は元より己の財の回収にしか興味は持つておらん。そして我が出るという事は私の勝利以外で終わる結末はありえん。ならば勝利するまでの出来事全てが余興でしかない。ともなれば、聖杯戦争を心行くまで堪能するのが王者の娯楽というものよ。最初は何ともつまらん雑種に呼ばれたものだと思つたが——悪くはない。これはこれで遊びがいのある環境ではあつた。その中でも一番愉しめたのは貴様だつたがな。未来を知り、絶望を知り、それを眺めながらも歩んで行く姿——世が世であれば貴様の事を勇者や聖者だと評価する者が出てこような」

「俺、そんな大層なもんじゃないと思うけどなあ」
その言葉にギルガメツシュは応えた、然り、と。

「貴様の本質はそんなものではない。貴様はただ単純にやるべきことを最大限、己が愉しめる様にこなしているだけ、それだけだ。祭りの趣を理解していると言つても良い——だからこそ見ていて楽しませて貰つたぞ悪童」

「なんか色々状況が変わつても結局は悪童なのか」
「貴様を表現するのにこれ以上ない言葉であろう？ 我の言葉だ、しっかりと刻み付けておくが良い」

高圧的で、見下す様で——だが王としての振る舞い。それは理想王とも、騎士王とも、征服王とも——未来王とも違う、もう一つの形の王だ。ギルガメツシュは徹底して自分を王とし、全ての者を平等に見下している。それは悪性から来るものではない。彼は暴君ではあるが、破壊者ではない。ギルガメツシュは純粹に、本当に純粹な王として振る舞っている。即ちは統治者、そして後に続く存在に教訓として、そして生き残る為に道を示す、そういう道を選んだのだ。故に英雄王は、唯一無二の王として、絶対の君臨者として振る舞う。

それだけの、簡単な話だ。

そんなギルガメツシュと気が合うのはただ自分の動きがあつた王を楽しませているのと、たつた今見た物語の結末が彼の心を満たしたから、それだけだ。だから、言葉を求める様に口を開く。

「——なあ、王様」

問いかげにギルガメツシュは腕を組んだまま答えず、その先を放つ様に言葉を続けた。

「俺の人生に意味はあったんだろうか」

「そんなもの我が知る訳がなからう」

当たり前前の様にギルガメツシュが断じた。

「貴様が抑止力という結末へと至る為に生まれ、育て上げられ、そしてここへと辿り着いたとしても、その様な事に意味があるかどうか等所詮は私の考える事ではない。何事であろうとも価値を見出すのは己の判断のみ。他人にどうこう言われて価値観を決めるような雑種であれば絶望から自害しておろう？ 我にはそういう者の心は一生理解出来ん。だが同時に価値がないのだと思えば成程、という程度には考え、殺してやろう。価値を見いだせぬ人生ならば生きていく意味はどこにある？」

で、とギルガメツシュは口を開く。

「——貴様は己の生をどう感じた？」

「——」

ギルガメツシュに言葉を放たれ、目を閉じて考える——自分の今までの人生はどうだった、かと。間違いなく生まれは不幸で、決して幸福な人生だったという事は出来ない。魔術師の家に生まれ、そして一方的に捨てられたのだ。それで苦しい幼少期を過ごし、育って、旅をして——そして今の自分がある。過去があるから今の己がある、と、胸を張って言う事が出来る。だけどそれは一般的な幸福から離れた人生でもあった。果たして、自分の事を振り返って、今の状況を見て、幸福だと断言する事は出来るか？

——無理だ、絶対に無理だ。

「俺の人生は幸福なもんじゃなかった——」

そう、幸福なんてものは測れない。出会いがあれば別れがある。常に変化するそれを総合的に考えて幸福であったか否かを決断する事は出来ない。だけど比較的に、一般からすれば不幸な人生で、実りのない人生でもあった。魔術師として貢献する事はなかったし、武を鍛えてもそれを誰かに伝える事はなかった。結局のところ、俺が生み出

す事は一切なかった。後に残すものさえもなにもない。ひたすら、何も
ない。

だけど、

「——楽しかった。凄く、凄く楽しかった」

それだけは断言できる。そう、自分の人生は凄く楽しかったのだ、
と、胸を張って言う事が出来るのはまず間違いがない。だって、自分
の人生はこんなにも出会いが満ちていたのだから。日本で出会えた
黄理、旅の途中で出会えた門司、インドで修行をつけてくれたバラモ
ン僧、そして最後に友達になつてくれたオルガマリー。彼らとの出会
いを、そして共に過ごした時間をつまらない、なんて言う事は出来な
い。それだけは不可能だ。だって心の底から、一緒に暴れたり話した
りする時間を楽しんでいたのだから。

そして、その気持ちだけは抑止力だけでも、絶対に出来ない宝物で
あるという事は理解している。

抑止力は背を押す形でその役割を果たす。

が、直接的な干渉は粛清以外などでは行わない。

だからこの感情に、想いに、そして思い出に嘘はない。誰のもので
もない、自分自身のみものだ。それだけは誰にも、そして何物にも
言わせない。この心が砕けないその時まで、この世全ての悪にさえ染
め上げる事の出来ないこの魂は、偽れない。俺の人生は楽しかった。

「ああ、楽しい人生だったよ！好きな様に歩き回って！修業して

！ 気ままに人を助けて、好き勝手悪人をテロって！ ふざけた言葉
を相手に投げつけて！ ふざけた態度を取って！ それでも全力で
楽しんできたんだ！ 嘘でもつまらなかつたって言えるもんか！

俺の人生は楽しかった、凄く楽しかったよ、王様」

「そうか。ならば逝け、悪童。たとえ世界が忘れようが、貴様の蛮行は
この我が面白かつた余興の一つとして記憶しておいてやろう。安心
して逝くが良い」

ギルガメツシユの言葉に笑い声を零し、そして応える様に——自
分の右手で自分の心臓を貫いた。痛みを一瞬で頭から追放し、大量の
血が胸からあふれ出す。これでクリスチャンだったら地獄行きだっ

たろうなあ、何て事を想いながら、無言で見届けるような視線を向けるギルガメッシュの前で、もはや何も残っていない大地に倒れ伏す。ゾオルケンが、聖杯が、そして俺が死ぬ。これによって特異点を維持していた全ての楔が消える。

命が流れて行く感覚と共に、この世界が、特異点が崩壊して行く音を聞く。

「——いずれまた会う時もあるろう。その時こそは存分に祭りを楽しもうではないか——悪童^{カルキ}」

そりやあ楽しみだな、と答えたのに言葉が口から出ない。徐々に体の感覚そのものが消えて行き、人としての死が体を支配して行く感覚を感じる。そして、魂が世界に——星に束縛されるのを感じる。これから永遠に、この星が滅ぶその瞬間まで、粛清装置として、これから先に起こる神話の舞台装置として世界に組み込まれる。その感覚がはつきりと感じられて行く。

それは、明確に感じられる終わりだった。それは赤く、そして黒く染まっている。大地は焦土になっており、もはや生物の気配は一切存在しなかった。ギルガメッシュの姿ももう見えない。言峰綺礼もどくなってしまったのかは全く分からない。だけどこの寂しい大地が自分の最後だと思うと、少しだけ寂しさを感じられた。

それでも、胸の中には暖かいもので溢れていた。今までの人生が走馬灯の様に頭の中に流れて行く。それを見返しながら、ああ、と少しだけ、干渉されたかのように動きを取らなかつたことを思い出しつつある。あの時、なぜ殺せたのに殺そうとしなかつたのだろうか、なんて事を抑止力を理解すれば思える所もある。だけど結局、それも後の祭り、

意識が徐々に消えて行くのを自覚する。そしてそれが消えた時、また新たに始まるのだ。

命は輪廻する。人は旅をする。生物は善行と悪行を重ねる事によって来世の己の道を定めるのかもしれない。だが、己の輪廻はここで終焉する。未来王^{カルキ}は輪廻の終点、そしてリセット装置。世界が1から4までのラウンドで構成されているなら4を1に戻すのがカルキ

の役割。であるなら、己に次の生なんてものは存在しない。だから、後悔は少しだけ、一つだけ残ってしまう。

もし、この人生が、戦いまでの事が抑止力によって敷かれたレールの上の出来事なら、

——次は、抑止力にも、神にも、この星の意志にさえ邪魔される事無く戦いたい。

干渉のない、己の意志で、己の為に、最期まで戦い抜きたい。そうやって自分の意志で自分の為だけに戦い抜いて、俺の戦いだったと誇りたい。それだけ、それだけを求めたい。だからああ、と声が出なくなつた喉を震わせながら、完全に消えて行く意識の中で思考する。これから人を殺すのだ。たくさん殺すのだろう。粛清装置として、世界を次のステージへと運ぶために、終わらせるためにたくさん殺すのだろう。時代を、場所を無視して、数えきれないほどに殺すのだろう。だけど、それでは終わらない。

人としての名は消えるが——役割としての、カ粛清装置ルキとしての名は残る。

なら、何時か、どこかで聖杯戦争に呼ばれるかもしれない。その時は、舞台がどこであろうとも、全力で戦おう。きっとギルガメッシュもその時を待っていてくれる。その時になれば粛清者としても成長し、能力を十全に扱えるようになっていく事だろう。

だからそれを夢見て意識を閉ざす。

次に意識する時は粛清の時なのだろうか。

はたまた聖杯戦争なのだろうか。

或いは、まったく関係のない実験で呼び出されるかもしれない。

世界との契約で魂を縛られようとも——心までは縛れない。この心だけは誰にも縛る事の出来ない、自由なものだ。だからこの先、ありえる未来を想像し、それに思いを馳せながら、

——カリ・ユガ特異点の崩壊と共に完全に意識を消失した。

「はいはい、そっちは作業効率下がってるわよ！ もう少しテキパキとやりなさい！ 3番はどうなってるの？ 繋がってる？ ならないわね。時間は無限じゃないんだから出来る事は出来る内に終わらせるわよ！」

声を響かせれば返答の声が返ってくる。本当に解っているのだろうか？ 今、自分たちがやろうとしている事の重大さに。その認識がちゃんと存在するのか否か、それは仕事の効率を大幅に変える。ただでさえ自分が所長になってから色々大変になってきたというのに——これ以上結果を遅らせる事は出来ない。

人理保障機関カルデアの所長として、最高の結果を出さなくてはならない。その考えはずっと変わりはない。

カルデアの実験スペース、そこに続々と科学と魔術の融合を果たした装置がセッティングされ、そして準備が整って行く。これから行われるのは四度目のサーヴァント召喚実験。三度の実験を通してカルデアは有用なサーヴァントを召喚する事に成功してきた。この先、人理定礎を復元する為には更にサーヴァントを召喚する必要がある、今までの成果をフィードバックした結果、遥かに安定してサーヴァントを召喚する事が出来る様になった。だから、今までよりも強力なサーヴァントも召喚できる——少なくとも理論上は。

これを成功させれば、父が亡くなってからの明確な手柄になる——自分の事を、もつと認めさせる事も出来る。そう、頑張らなきゃいけない。自分はまだ跡を継いだだけの女だ。明確に自分にしかできないという手柄を上げない限りは、誰も認めてくれない——だから限界まで頑張つて、成果を示さなくてはならない。

なのに誰もそれを理解してくれない。

苛立ちに親指の爪を軽く噛みながら、全体の進行とミスのチェックを並列して行う。魔術のみで何かを進める時代は終わった——いや、カルデアが終わらせる。もはや魔術のみ、科学のみではどうしようもないのだ、人類の未来は。相反する魔術と科学、その両方を取り

入れて融合させ、その先を目指す事によって成し遂げられるのだ。だから無論、自分も科学、魔術の両面に精通する様に訓練したし、勉強もした。

ノートパソコンを通してデータの閲覧を行い、魔術的なチェックを、そして科学的なチェックを行いつつ、現場へと向ける。そこで働いているカルデアのスタッフを眺め、その中で本当に自分の為に働いてくれている者はどれくらいだろうか？ 他の所から紛れ込んだスパイはどれくらいだろうか？ 味方と敵、その区別が完全に終わってはいないのも心が疲れる話だ。

「——完全に信用できるのは——」

ロマニ、レフ、ダヴィンチ達英霊ぐらいなものだろう。それ以外の者は本当に信じていいのかどうか、微妙なラインにある。嫌だ、本当に嫌だ。頑張らなきゃいけないのに、なんでこんなことばかりなのだろうか——とはいえ、人類の未来を考えると決して投げ出せる事ではない。皆を認めさせないといけない。カルデアの所長は己しか無理だ、と。

「オルガマリー所長！ 此方完了しました！」

「5番から8番までもオールクリア！」

「魔術班、儀式の準備を完了しました」

「触媒のセット準備オツケーです！」

「……よし」

呟きながら実験室の中央に完成された魔法陣へと視線を向ける。何も無いところから始めた英霊召喚術式を何度も改良を重ね、そしてサーヴァント達の意見を聞きながらここまで完成された、カルデア式英霊召喚術。その触媒は通常の品ではなく、聖晶石と呼ばれる特殊な魔術道具になる。これは魔力が結晶化したものでもあり、聖性を保有している。高純度で高密度、サーヴァントを召喚する為には優秀な触媒であり、召喚されたサーヴァントを安定させる働きがある。

マスター適正が低く、魔力を満足に供給する事が出来なくても、この聖晶石を触媒に召喚されたサーヴァントは非常に安定して現界し続ける事が出来る——サーヴァントのランニングコストは優秀な

ものになればなる程、非常に重くなってくる。その為、これは非常に重要な事だった。特に目的達成の為に強いサーヴァントを従えたければ、コスト管理に関しては常に意識しておかないとならない。

だから虎の子の聖晶石を四個、魔法陣にセットしてある。それ以上の触媒はない。

「英霊召喚を開始します！」

「5……………4……………3……………、スタート！」

カルデアの魔術師の声によって魔法陣の励起が開始する。それと同時に聖晶石が魔法陣に吸収されるように溶け、純粹な魔力へと変換される。魔力の循環が開始し、それが魔法陣に吸い込まれ、英霊の召喚の為の術式と反応する。第一魔道リング形成、

——その色は虹色に光っている。

「これは——SSRな予感ですよ所長!! この流れなら俺も引ける!!」

「仕事場にソシヤゲを持ち込んでいる馬鹿を誰か連れ出して!! それよりも観測班! しつかりと記録を取るのよ!」

返答と共に第一魔道リングが三つに分離し、三つのリングが高速回転をはじめながら中央に収束する。やがてそれは閃光を放ち、魔力を集めながら召喚術式の役割を果たし、座に記録された英霊をダウンロードする。そうやって英霊は霊核を形成し、それを中心に肉体を魔力で構築して召喚される。

溢れんばかりの閃光を引き裂きながら、その姿は出現した。

「——超末世救世主——」

上半身に呪布を巻きつけた、白い肌の持ち主だった。ただその服装は不思議と近代的で、下がダメージジーンズ、上が呪布を巻いた素肌の上から白いパーカー付きのジャケットという格好であり、黒髪と琥珀色の瞳の持ち主だった。

オルガマリーちゃん

「セイヴァー・カルキ! 見参! 特異点の果てよりいざマスターの声を聴き来た! 見た! そしてこれから世界とか滅ぼして勝った! そして光秀には謝りながら本能寺する! そして帰りに軽くブリテンも燃やして青王を煽る、ザマア! お前民の心解ってねえーか

らあ、と！ あ、あのときは聖杯持って帰れなくてごめんね！」

こいつは、

いっつい、

なにを、

いつてるんだ……？

「ああ、所長が軽くレイプ目になって……！ ってちよつと待て、そのサーヴァント——セイヴァー？ その馬はなんだ！ 馬は！」
「これ？ 未来から持ってきた我が相棒ハヤグリヴァ君MKⅤ。IからIVは影の国をクリタ・ユガる時に足場にして壊しちゃった。このMKⅤは抑止力^{ガイア}の最新の技術と幻想を込めて作ったシャンバラ産のナイスガイだ！ 俺と変形合体も出来るぞ！」

「すげえ……！ どこから突っ込めばいいか解らないぞこいつ……！」

「誰か、スカウターを！ スカウターを早く使うんだ！ こいつ絶対に【狂化】か【精神汚染】が……ない……だど？」

虚空から出現したメカメカしい馬に所員達が追い掛け回されるのを眺めながら、これは、きつと悪い夢であるに違いないと、そう呟きながらゆつくりと顔を両手で覆い、現実から逃げようとする。そう、これはきつと夢なんだ。きつと目を開けたらあんな色物ではなく、騎士王とか、そういうもつとまともな英霊が仲間になった、きつとそういう風になっているのだ。うん、そう思えばまだがんばれそうだ。そう思いながら顔を持ち上げると、

救世主がメカ白馬の上に所員達と7ケツしてた。若干白馬が苦しそうな表情をしているが、一体どういう技術を使っているのだろうか。いや、違う、そうじゃない。

「あなたは一体何なのよ!! 何をしにきたのよお——!!」

召喚されたサーヴァントへと叫ぶ。救世主・カルキ。それは世界の終末にしか召喚できないサーヴァントなのだ。そしてカルキが召喚できたという事実は今、世界が破滅に向かっているという事実でもある。それ故に、世界を何とかしないといけない、そんな義務感があり、それと同じようなものをカルキに期待した。だけど彼はまるであつ

さりと、その目的を答えた。

「勿論悪徳カクの時代リ・ユカを肅清装置らしく破壊しに来たのさ！ だけど俺がどう考え、どう思うとも、それは俺の心のまま、俺の自由で、神様でさえ縛る事の出来ない最強の特権で権能だ。だから俺はこの自由な心で、召喚され、役割を果たすなら極限までその事実を楽しむと決めている。そして今回の召喚では何よりも重要な任務が俺にはある」

直後、白ハヤクリウツア馬から降りて真顔になったカルキが近づいてくる。その姿にビクリと硬直している間に彼は近づき、宣言した。

「——お前を笑顔にしに来た。世界が変わっても俺達は友達だ。な？」

その言葉を正しい意味で理解する事は出来なかった——が、なぜか、懐かしさと同時に、軽い怒りがわき上がり、何か、恥ずかしい様な感覚を隠すために叫んだ。

「——さっさと自害しろお！ 馬鹿あ！」

笑う救世主へと向かってそう叫んだ。

あとがき

光秀エえ!! ごめんねええ!! 本能寺ごめんねええ!! ほん
と本能寺なああ!

いや、真面目に一度謝らないといけないかもしれない。後被害に合
い続けてるノツブにも。どうも、てんぞーです。お待たせしましたあ
とがきコーナーです。最初の頃は初々しく心境とか語ったりもしま
したが、ここまで来るともう慣れたもんですな。サクサクと話を進め
ていきましょうか。

とりあえず Fate / Grand Zero 完結でございます
すわー。わーわーぱふぱふー。FGOとゼロを組み合わせたスタイ
ルのSSで、「特異点でリセットできるならぶつ壊しほうだいだなあ
!」という狂気の発想から生まれた話でした。

いやね、元々プロトタイプの話は出来てたんですよ。

身内オンリー配布の起源が「斬る」の起源覚醒者とキャスター：ア
ンデルセンのコンビで龍之介の代わりに参戦、麻婆が中華繋がり李書
文を召喚したり、おじさんのサーヴァントがオルタアルトリアだった
り、そういう感じで身内オンリー配布の話が原型にありまして、

これをベースに起源覚醒者というのを残して、「一貫して最初から
最後までブレない主人公を書こう」って話になりました。まあ、ブレ
ればブレる程エタる可能性も上がるので。ええ、そんな感じですよ。

とりあえず FGO 要素どうするんだ? ↓サーヴァントだけだと
つまらないだろ? ↓特異点設定が使えるな……という感じにトン
トン拍子で設定の方を固めてしまつて、後は執筆スタート! って感
じで生きたかったのですが、

カル ナ ガ チ ヤ (発狂)

元のプロットでは相方はカルナさんにしてギルvsカルナのガチ
ンコ世紀末みたいなのを計画してたんですが、

カル ナ ガ チ ヤ 爆 死 (発狂その2)

という悲惨な結末を迎えてしまいました。ええ、あのインド畜生マ
ジ許さねえ……! って感じの怒りパワーを充填してたところ、フレ

ンドの欠片男装備師匠を使つてたら「ああ、おっぱいがマシユマロなんじゃあ〜」つて気分になってきて師匠採用に。施しの英雄はどうやら師匠に出番を施したようです。

ヒロイン？ そんなものをてんぞーSSに求めてはいけない……体の関係があつても甘酸っぱい恋愛の様なものはない！ ないのだ！ というか恋愛描写がめんどくさく感じるタイプなのだ。それ故に、スカサハとの恋愛的要素はなし、そもそもクーってしつかりとした相手がいるからな！ ワンチャンセフレでそれ以上は無理だな！

まあ、そんなわけで好き勝手書こうと思いつたところ、

——てんぞー、現在地インド。

てんぞーに電流走る。

インドにしよう。

そういう訳で純剣士主人公だったのをインド系戦士主人公へと変化、サルンガやブラフマーストラを実装したわけですが「これ、覚えてるつてのに説得力欲しいよな？ 最後の最後で納得できるようなギミックにすれば楽しそうだなこれ……」という発想になって、ずつとお蔵入りになっている身内聖杯戦争用のカルキのデータを取り出し、

最終的にこれになる様に人生を、そして能力をちりばめて行こう、という事に。

その結果、大筋の人生が神話におけるカルキと同じような、或いは大体そういう感じの人生を送ったキャラになった。

サルンガ ↓ アヴァターラの一つであるラーマの武器

ブラフマーストラ ↓ 古代インドの奥義

縮地 ↓ 完全な縮地はアヴァターラの一つであるヴァーマナの逸話と類似

破壊の起源 ↓ カルキの役割は世界の破壊

こういう感じに要素要素とちよくちよく回りくどく仕込んで、最後の最後で一気に回収するのはもうこれ、気持ち良い感じで、光秀も本能寺だなあ、と感じました。うん、やっぱりミツチーには謝ろう。そろそろ謝ろう。ごめんミツチー……。

ともあれ、完結しました、お疲れ様でした。ただの勝利では良くあるSSの一つになってしまう。

ただの敗北は原作そのままになってしまう。

じゃあどういいうエンディングを目指すんだ？ 英雄らしい主人公を作るからならやっぱりそのあとに続くのが良い。だけどあまりにも勝つのも負けるのも嫌だ——よし、なら抑止力ENDだ。という感じで今回の結末が組み込まれました。

いやあ、抑止力が天職になるとはたまげたなあ。

ちなみに某日に軽くプリヤかお月様につなげるか迷ってアンケートの結果、200近い投票の接戦でお月様での戦争が決定されました。

テーマはFGOの礼装「もう一つの結末」という感じで。礼装持っている人は文面チェックしたかな？

そんなわけで、お月様に出禁を食らってソツコで裏に沈められた本能寺さんが眠りから目覚めるのを待つのだ諸君！ 最後にカルキのステータスを張ろうかと思っただけど、それはお月様にまで温存しておく方針で、それまで悶々としているが良い。

それではお疲れ様でした。